ウマ娘オグリン伝説

まとらよ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレセン学園の生活を具体的にドラマＣＤなどを参考にしながら、ゲームをプレイしたことがない人にもわかりやすく面白くなるように噛み砕きながらトレーナーとオグリキャップの成長を描く小説ですが、何が役に立つのかわからない育成や思い出したかのようなシリアスが現れます。アプリの育成シナリオに沿いながら進んでいきます。

目次

芦毛の迷子 1
芦毛の模擬レース 4
芦毛の森 9
皇帝と女帝の精神疲労 14
芦毛の選抜レース 22
芦毛の食いしん坊 31
高知のアイドルと地獄の一日 36
芦毛の皐月賞 46
芦毛のビート板 53
芦毛の決意 60
芦毛と時計 70
芦毛のダービー 83
芦毛と勝負師 94
芦毛と皇帝と帝王とトレーナーのレース 98
芦毛とマッドな合宿 110
芦毛と未確認生物 115
皇帝と地獄の鬼ごっこ 121
不沈艦と焼きそば屋台 134
芦毛の神社 139
芦毛とビデオ 144
同期と畑 149
芦毛と母性の合宿 154
芦毛とお出かけ 159
芦毛と夏祭り 164

無人島と鍋 179
皇帝と決闘（デュエル）と野球 194
芦毛と狂気のローテーション 210
芦毛と雪と記憶 215

芦毛の迷子

私はトレセン学園でトレーナーをしている者だ、
トレーナーの仕事は学校の部活動の顧問のようなものであるのだが、私はまだ自分のサークルやチームを持っておらず、今は担当ウマ娘もいない給料泥棒という訳だ。
このままでは秋川理事長に「解雇！君に用はない！」と言われてしまう。
という事で選抜レースを観に行こうと行きたいんだがそれだけでは駄目だ、強いウマ娘のトレーナーになるには事前にウマ娘と仲良くなる必要がある、
この仕事は信頼が無ければ何もできない、長々と話しているが信頼は本当に大切だ具体的にはトレーニングの時とか

今日はひとまず俺の過去の栄光でもある最強のウマ娘シンボリルドルフがとあるウマ娘と模擬レースをすると教えてくれた、
ルドルフがわざわざ教えてくれるようなウマ娘だとても強い賢くてユーモアが溢れるウマ娘だろう、
まぁユーモアは要らないし賢くなくても自分の強みを知っていて私の言うことを聞いてくれればそれなりに強いウマ娘にはできるはずだ。

そう考えながらターフに向かうと大量のトレーナーが見えてしまった、
ライバルの多さに期待も高まるがこの中から私をトレーナーに選んでくれるだろうかというのが頭によぎる、ひとまず見やすい場所でルドルフと白い髪の毛の転入生の模擬レースを見守った。
ルドルフが何故か爆笑しながら転入生から離れていった。
私は衝撃を受けた、このウマ娘、オグリキャップならばシンボリルドルフを超えるような強いウマ娘になるだろうそう確信できた、

何とかして彼女の担当トレーナーになり栄光を掴みたい彼女の夢を見たいそう思えた。

ルドルフと離れたあとオグリキャップがどこかへ向かって歩きだした。

私は他のトレーナーと同じようにオグリキャップをこっそり観察していた。するとオグリキャップが同じ場所を何度も歩いていた、

先輩たちが「少し変わった子なのかしら」や「わからない、僕には何もわからない」と言い帰っていく中、わかってないな～とおもいながら私は更にもう一つの確信を得ていた、

強いウマ娘には変な癖がありそれが強力な武器になっている、サイレンススズカは四六時中左回りし続ける癖で左回りのコースで素早いコーナリングを発揮した、

シンボリルドルフはダジャレで他のウマ娘の調子を落とさせて勝利を得ていた。

オグリキャップ彼女のあの同じ場所を何度も歩き続けるのも理由があるはずだと思いずーと彼女を見守り続けた、

途中ストーカーに間違えられそうだったが夕方までオグリキャップを見つめていた。

何かがおかしい

オグリキャップはもう2時間以上歩き続けている、いくら何でもこれはヤバいもう埒が明かないのでオグリキャップに話しかけた。

「やぁオグリキャップさんここで何をしているんだい」

「ここは不思議な場所だな、全く同じ見た目の場所が幾つもあるんだな」

「いや違うからな！もしかしてと思っていたが迷子になっていたのか？」
「迷子？・・・ ふむ、そうかもしれない。」
「…ところで君は誰だ、そういえば、知らない顔だ」
「トレセン学園のトレーナーだ」
「トレーナー！…では道がわかるのか？」
「寮に戻りたいんだ、道を教えてもらえないだろうか」
オグリキャップに道を教えると理解したようだ。
オグリキャップは帰路についたようだ。
オグリキャップが３分後戻ってきた。

「……！さっきと全く同じ顔の人間が……！まさかドッペルゲンガーか！」
「違うわ！君が全く同じ場所に戻っただけだ」
「カサマツの時は覚えやすかったから、道を覚えていたが都会は建物の距離が近いし、よくわからない」
「ハァ…その様子じゃ一人で帰れそうにないな、寮の前までは案内してやるからついてこい」
私とオグリキャップはこうして出合った。
ちなみに寮に男性トレーナーは入ることができないんだが、この日オグリキャップがご飯の香りがするまで寮内を彷徨ったのはまたの機会に話そう

芦毛の模擬レース

オグリキャップの案内をした数日後、オグリキャップとまた合うことができた、また迷っているようなので案内した、今度はトレーニングコースにいきたいようだ。

オグリキャップをコースまで案内した

オグリ「待たせたな、タマ。」

タマモクロス「おっ、来たなオグリ！よ～しよし偉いで、コースまでの道順やーっと覚えることができたんやな」

「迷子にならんか心配やったんやけどな～。ウチかていつでも案内でけへんやろうし、心を鬼にした甲斐があるっちゅう――」

「私が案内しました」

「って結局連れてきてもろたんかーい!!」

「……ま、まあええわ、ほな、早速模擬レース始めよか！」

「そうしよう、準備してくる」

「ノリが悪くてすまない」

「って、いきなりツッコミ入れて、待ったウチも悪いわ、でも次は反応してくてくれや」

「任せてくれ」

「ウチも準備せんとアカンから、また後でな」

さて、シンボリルドルフに続き今度の模擬レースの相手も既にデビューを叶えた強豪ウマ娘、タマモクロスだった。

となるとオグリキャップの実力を見たいウマ娘たちが見に来る訳だ、しかもタマモクロスはオグリキャップと同じ芦毛のウマ娘、話題にもなりやすい、それをオグリキャップはわかっているのだろうか？

「やけに騒がしいな、もしかしてこれからここでお祭りなのか？」

「違うぞ!?二人の模擬レースを観に集まってるんだぞ」

コイツメンタルまで大物だったのか!?

「えっ……そう、なのか。他のウマ娘たちが、こんなに……」

「むむ……」

「もしかして、オグリキャップ緊張してるのか？」

「いや、その、……故郷だと笠松だと、こんなにたくさん、同い年くらいの子たちに囲まれることがなかったものだから……。」
「慣れないせいか……むずむずするんだ。」
「食事のときもそうだ……お皿に山盛りにご飯を盛っているとどうしても注目されて……。」
「それが苦手で、最近は部屋で食事を――」
「君は食事を多めに取るんだろう？ならば食堂で食べたほうがおかわりもしやすいからいいぞ、君が珍しいから注目するんだ、それに何日も続ければみんな慣れて目立たなくなる」
　君が多めに食事を取るというのはルドルフから聞いている、だがそれも個性だ、それにいっぱい食べるのは良いことだ。
「……そうか、何日も続ければ目立たなくなるのか、ありがとう、君は頼りになるな」
「おーおー。待たしたな、オグリ！バッチリ準備できたでー……。」
「って、おお!?すごいギャラリーやな！」
「あ、タマ」
「なんやオグリ、緊張しとんのんか？そんなんやったらＧ１なんか出られへんで～？」
「ま、緊張するようやったら、あの子らの顔ぜ～んぶ「たこ焼き」やと思っとき！」
　タマモクロス有能過ぎないか偉そうに言っていた自分がすごく馬鹿に感じる、即効性もあるし後々応用も聞くし賢いウマ娘として記憶しておこう。
「……そうか、わかった。やってみる。」
「……お腹が空いてきてしまった」
「な、難儀なやっちゃな……。」

　そうして二人のレースは始まった
「ふっ……!!」
「浪花のど根性、みせたるでぇーっ!!」
　距離は８００ｍ。２人の健脚が地面をえぐる、両者互いに全く譲ら

ない

「むうっ……!!」

「オグリ……!!まだまだこっからや!!」

二人は抜きつ抜かれつを繰り返した。

まさかの同着同タイムという結果になった

しかし驚いた、いくらオグリキャップでもタマモクロス相手では模擬レースとはいえ厳しいだろうと考えていたがこれ程までの力を見せるとは８００ｍというのを加味しても素晴らしい結果と言える

「はぁっ、はー……!やるやんけ、オグリ!」

「タマ……君も速いんだな。予想以上だ」

「君たちすごい青春してるな」

「へっ、せやろ?けど次は、もっともっと予想を超えたるで。」

「――よっしゃ、気合入ったわ!でも走って来よかな、ほなまた後でな、オグリー!」

えっ!?俺の話はガン無視するのタマモクロスさん!?

「お疲れ様。いいレースだったぞ」

「あっ、君見ていてくれたのか。」

俺の存在は忘れられていたのか結構喋ってたし、解説までしてたんだけど

「ま、まぁいいや」

「……？なんだか不思議な気分なんだ。私は心臓が強い方らしくて、レースの後でも、すぐ鼓動が落ち着いていたんだが……。」
「今は……ずっと、鼓動が速い。さっきのレースを思い出すと、どうしてもドキドキするんだ。」
「すごく不思議で……心地いい感覚だ、これは……興奮、だろうか……？」
「恋だな」
「……そうか！これが恋なのか、中央に来て初めて感じたこの感覚これが恋なのか!!」
オグリキャップは余韻を惜しむかのように、いつまでもその場に立っていた。

じゃない!!!!やばいオグリキャップギャグ通じるけどたまにへんな勘違いするタイプだ。
「オグリキャップさっきのは違うからな、よく考え直すんだ。」
「冷静に考えてレースから始まる恋があるわけ無いだろう。」
「いいか？今のはライバルができたから、思えた感動と言うものなんだ。」
「いやー、二人はいいライバルになれると思うなぁ」
「……恋というのを経験したことがないから、グラスワンダーに相談しよう。」

「だから恋じゃないって!!それに何故にグラスワンダーなんであのレズウマ娘に聞くんだ！」

あかんガチで恋が始まる。

こういったやり取りがオグリキャップがお腹を空いて恋のことを忘れたあと、二人はライバルだと教えるまで続いた。

芦毛の森

タマモクロスとの模擬レースから数日後、――とても熱心にトレーニングしているオグリキャップを見かけた。
気迫のあるトレーニング風景に見入りながらも話しかけた。
「やぁ、元気かい、オグリキャップ」
今日もオグリキャップとの交友を深めていこうか
「む?……キミは……。」
「……少し呼びづらそうだな、…次からは、オグリと呼んでくれないか」
これは……仲良くなれた証拠だよな??
かなり不思議な娘だからそこいらへんはよくわからないな
「ありがたい申しでだ、是非そう呼ばせてもらうよ。」
「話を変えるが、随分張り切ってるな」
「ああ。……実は次の模擬レースに出られることになったんだ。」
「参加応募は私が転入してきた、時点で締め切られていたんだが――」
「この間のタマとのレースを学園の人が観て、特例で許可を出してくれたらしい。」
「それに、選抜レースに出れば中央でのデビューが近づく……鍛えておかねば。」
まぁそれに関しては俺もルドルフにも頼んだし、特例を作るのはあまり良くないとエアグルーヴに止められているのに認めてくれ、後押ししてくれたと言うことは、ルドルフもオグリの中央での活躍を早く観てみたいんだろう。
「よかったな、模擬レースでの活躍期待してるぞ」
「あっ、そうだ……何度もすまないが、また一つ案内を頼んでもいいか?」
「任せてくれ、それでどこに行きたいんだ?」

学園裏の森

「学園の近くにこんな森があったのか……大発見だ」
「やはり森の空気はいいな、澄んだ気持ちになれるし、落ち着く。」

「昔は、こういう場所ばかり駆け回っていた。そしたら故郷のみんなが『ウマ娘レースに出てはどうか』と勧めてくれたんだ。」
「それがレースに出るきっかけか」
「ああ。……みんなが、私を応援してくれた」
「地方のレースに初めて出ることになった日は私のために立派な横断幕を作ってくれた。……畑仕事で、みんな忙しい筈なのにな。」
「レースに出た日の夜は、いつもみんなで集まってごちそうを食べた。勝っても、負けてもだ。」
「『楽しかった』『元気が出た』『これからも楽しく走ってくれ』……私はいつもそんな言葉に囲まれていた。」
「……だから私は、走るのが好きだ。」
「レースに出て、みんなが盛り上がってくれるのが大好きなんだ。」

私がこのウマ娘、オグリキャップに惹かれた理由は彼女の走る理由のお陰なんだろう。
彼女は本当に天性のスターウマ娘なんだ。
「……故郷の人たちのことが本当に大切なんだな」
「もちろんだ」
「故郷のみんなは、『私がレースで楽しそうに走っているのを見られるのが何より、嬉しい』と言ってくれた。」
「この前のタマとのレースは……楽しかった。今でも思い出すと、鼓動が速くなる。」
「デビューして、タマのように強く、速いライバルたちと楽しいレースができるのなら――」
「私はすぐにでもデビューしたい。」
オグリキャップの目の中には強い決意が滲んでいた。
「立ち話が過ぎたな。トレーニングに戻らねば。」
「案内、助かった、ここなら初心を思い出しながら走れそうだ。」
「では、失礼する。」
そう言って、オグリキャップは軽快に走り去っていったが――
「あ……」

オグリキャップが突然その場でうずくまった!!
「大丈夫か!?痛い場所はないか!?」
「ん……?どうしたんだそんなに血相を変えて。」
「いや、急に故障でも起こしてしまったんじゃないかって……」
「ああ、いや違うシューズの紐が切れただけだ。」
言われてみるとオグリキャップのシューズは、だいぶボロボロになっていた。
「昔からこうなんだ。私は、すぐシューズを壊してしまう。」
「また買い替えにいかないと……。」
紐を結び直してオグリキャップはふたたび走り出した。
にしてもあのシューズの様子は異様だ。恐らく、彼女の地面をえぐるほどの脚力に、シューズが耐えられないのだろう。
あのままではオグリキャップは最大限の実力を発揮出来ない。

ならば私のすることは一つだ!

「うーん、相変わらずどれもええ値段しよるわ……。」

ラッキーだな、シューズショップにちょうど賢くて頼りになるスーパーウマ娘のタマモクロスさんがいるじゃないか。
「って、ん?アンタ、最近よぉオグリと一緒におる、新人トレーナーか?」
「一応、前の理事長の時からいるんだけどな」

まだ23歳だから、大学卒業して、試験に合格したての新人と同じくらいの年齢だから間違えられるんだよな。

「……なんや、けったいな顔しとるなどないしたんや?」
「年下の女の子にため口使われて、舐められまくってる自分にガッカリしてるんだ」
「……すまんな、まさかそんなに気にするとは思わへんかったんや」

「冗談だ」
「って！冗談かい！深刻な雰囲気でゆうから驚いたわ！」
「半分本音なんだが、それを置いておいてだな。」
「どうやら、オグリキャップの脚力が強すぎて今履いているシューズがボロボロだから新しいシューズを買ってやろうと思ってきたんだが、サイズ分からないしどれを買おうか悩んでいたんだ、ちなみに必要なのはとびきり頑丈なやつだ。」
「それならウチがオグリの靴のサイズ知っとるし、あいつは、ぼーっとしとる奴やし、選抜レースは全力をトレーナーに見せる場所やからこのままやとフェアやないから協力したるわ。」
「とびっきり丈夫なシューズ、ウチも一緒に選んだるで！」
「ありがとう、流石はスーパーウマ娘のタマモクロスだ。」
「ん、なんやスーパーウマ娘って？」
　心の声がそのまま出ていたようだ。気をつけよう、一応真面目でやってるのにバレたら面倒だ。
「まぁ、気にするな、しかし本当に君はオグリに優しいな。」
「しっかり全力見して、とっととデビューしてもらわんと、もっかい走りたいっちゅー、ウチの願望もあるからな！」
「ほな、選んでこか！で、予算はなんぼや？そこ、一番大事やろ!?」
「実は給料の３ヶ月分持ってきたんだ。」
「って！結婚指輪ちゃうんやぞ!?お前らまだ会ってから一月も経ってないやろ!?」
「オイオイ、タマモクロスさん知らないのかい？トレーナーはウマ娘に最初に買ってあげる靴は給料の３ヶ月分買ってあげてやる気を上げるという風習を」
「は～、そんな風習があるんやなー。」
「もちろん嘘だ、こんな嘘に騙されるなんてさては子供だな。」
「うるさいわ!!誰が子供や!!!」
「ハハ！もしかして身長気にしてんのか？可愛い奴め、な～に高等部に入ってからも大きくなる子もいるから問題ないぞ～。」

ブチ切れたタマモクロスをなだめて、オグリキャップの走りに耐えうるシューズを選んで購入した、ちなみに領収書を取っておいてルドルフに全力で頼むと予算としておろしてくれるぜ、さすがは会長、こういう時理事長より権限が強いかもしれない、昔はわからなかったけど最近理事長に若干避けられてる気がするし、ルドルフに頼もう。

まぁたまに他のトレーナー以上に生徒会の手伝いをしているから融通が少しだけ効くんだろう、デビュー前のウマ娘に関してはそこまでサポートされる訳ではないんだが大丈夫だろう。

ちなみにシューズの値段はゲーム機1台買える値段と言っておけば大体伝わるだろう。

???「彼は元気にしているのだろうか？また彼と共にレースに出てみたいな、オグリキャップとも仲良くなれただろうか。」

???「また彼が必要な依頼が来ないだろうか、……そういえば、彼の部屋は確かウマ娘のトレーナーをしているあいだはホコリとか溜まって汚れるんだ。」

???「よし、エアグルーヴを連れて彼の部屋の掃除に行こう。エアグルーヴの息抜きにもなるし私も彼と話せると嬉しいからな」

皇帝と女帝の精神疲労

朝９時頃

さて、オグリキャップに靴を渡しておいた。恐らくオグリキャップから私への好感度は更に上がり模擬レース後、【私のトレーナーになってくれないか♡】って言われること間違いなしだ。いやー困っちゃうな～Ｇ１とか荒らしまくちゃうな～。

そうなると私の給料もうなぎのぼり、担当ウマ娘のグッズが売れれば俺にもお金が入る最高だよ、この仕事、まずはテッパンのオグリン人形だ、で次にオグリキャップのＣＤだ。オリコンとか間違いなく載るだろうし大成功間違いなしだ。ルドルフの時は思いつかなかったことがドンドン浮かぶなぁー、いやーこれも成長だな、

よーし今日は明日の模擬レースに向けてライバルのウマ娘たちについて調べてオグリキャップに伝える作戦を更に完璧にしておこう。

コンコンコン、

おっと小気味よい音のノックが鳴り響いたな、オグリキャップがもう【私のトレーナーになって♡】と言いに来たのかなー、ガハハハ

さて、ハイテンションは一旦終了だ。この様子を他のウマ娘に見られたらドン引きされるからな、仕事もこなすし、クレバーな所が魅力の私のイメージが損なわれるからな。

という事でドアを開けると、私の元担当ウマ娘のシンボリルドルフとその右腕エアグルーヴがいた。

「久しぶりだな、ルドルフ、エアグルーヴも元気にしていたか？」

ルドルフ「トレーナー君こそ、最近は元気そうで何よりだよ。」

「少し前までは、特にすることもなかったからな」

エアグルーヴ「お前はすぐ腑抜けるからな、私がたまにお前の監視をしてもいいんだぞ」
「エアグルーヴお前は本当に俺に厳しいな」
「当然だ、会長の元トレーナーとして貴様が腑抜けているのが我慢ならんのだ。」
「つで、二人は今日は何をしに来たんだ、飯なら奢ってやってもいいが？」
「今日は、君の部屋の掃除に来た、ほら昨日連絡しておいた筈だが。」
「どれどれ、思いきりメールにあったわ、昨日はうわの空で気づけなかったなあ。」
「フフ、君が楽しそうで何よりだ。」
「会長、そんなにこの男を甘やかしてはいけません、甘やかしすぎるとすぐまただめになるでしょう。」
「彼は、普段は覇気が感じられないがレースの準備期間に入るととても頼りになる。だから普段は気が抜けている位が丁度いいんだ。」
「早速だが、エアグルーヴ掃除するか？」
「当たり前だ、ここまで来たんだ、しっかりスッキリさせてやる。」

エアグルーヴの掃除中の様子
床の隅にこれだけの埃が…フフフ、すべて私が相手にしてやる
フフ、テレビの裏にこんなにも埃が積もっているじゃないか、こんな時はクイック○ワイパーで一掃してくれるわ。
オイオイ、この本棚の上にも埃があるじゃないか、これははたきでホコリを落として掃除機でまとめてキレイにしてやる。
アルミサッシの端には青カビが少しあるな、貴様にはたっぷりと重曹とクエン酸を味合わせてやろう。

シンボリルドルフとトレーナー
「エアグルーヴ、やっぱりいつも掃除中はテンションがおかしいな」
「彼女もそれだけ夢中になっているということだ。」
「ルドルフ、エアグルーヴが掃除を終わった時の為に少し何か買いに

行こう」
「確かにあの様子だとエアグルーヴも後々こっちも掃除しそうだし、一旦買い出しに行ったほうが良さそうだな。」
「賢明な判断流石だな。」
「やっぱり、ルドルフ君は俺に優しいな。」
「それは君のことが好きだからだよ。」
「ハハ、冗談はやめてくれよ」
「君がそう言うならそういうことにしておくよ」
「さて、それじゃあ車回してくるわ、ルドルフ君が好きなデートだぞ」
「あぁ、とても楽しみだよ」
ルドルフが久しぶりにとびきりの笑顔を見せてくれた、おっと勘違いをしているわけではない、ルドルフはどうやら私に懐いてくれているようだからな、大切にしてやらないとな。

ショッピングセンターについた。エアグルーヴは一度掃除を始めると半日は続けるからな、ルドルフも生徒会大変だろうし今日は労ってやろう。
「ルドルフ、お菓子や料理の材料を買う前に少し遊んでいくぞ。」
「ああ、今日は何処で遊ぶんだい？」
「まずは映画館だ、今日は君の好きそうな映画が公開される日だからな」
「映画館に来るのは久しぶりだし、楽しみだよ。」

俺はまずチケットを並んで買った後、ポップコーンと1-1のコーラを買った、映画館ではこの黄金セットは欠かせない、ルドルフにももちろん奢った、そして私達が見た映画は、復刻公開映画幻のウマ娘だ、無敗で十勝クラッシック2冠を制したが、怪我により敗北する前に引退してしまった。ウマ娘をモデルにした、感動できる映画だ。
「火事のトラウマを克服出来たのに、走れなくなってしまうとは、悲しいものだな」

「最後に次の時代のウマ娘に自身の経験からウマ娘をサポートする立場に変わりウマ娘達を支え続ける、私もこの映画から学べることがあった。」
「まさしく、老成自重、経験こそ生涯の宝と言える。」
「あの映画のモデルになったウマ娘がトレセン学園にいるらしいがどうなんだろうな。」
「それは、あまり詮索するのは悪いかもしれない、もしかしたら、根も葉もない噂かもしれない。」
「ああ、もちろんだ、あの話は映画だから素晴らしいんだ、現実に自分の担当ウマ娘がそうならないよう気をつけるさ」
「ヨシ、次はお菓子と昼ごはんを食べにいくぞ。」
「あまり遅くなりすぎるとエアグルーヴに悪いから食事を買ってすぐにでも帰ろうと思ったんだが、……その様子だと何か用意してあるようだね。」
「実は、昼頃に家に代金を払った出前のラーメンを頼んでおいた、大丈夫だろう」
「それで何処に向かうつもりなんだい。」
「マ〇ドナルドだ、最近ジンジャーコークが出たから飲んでおきたい、あとルドルフも他のウマ娘と来ることがあるだろうから慣れておこう。」
「ファストフードはあまり食べないが他の生徒たちもよく立ち寄るらしいから、一度詳しく見ておこうと思っていたんだ。」
「じゃあ行くぞ。」
　このとき、ルドルフは手を握ってきた、あまり来ないらしいから迷わないための配慮だろう、今日は土曜日の昼過ぎ、客も増えてきた、さてフードコートよりは少ないだろうし、さっさと済ませよう。

マク〇ナルド

　俺が頼んだのは、エグ〇のセットにサイドはポテトのドリンクはジンジャーコークだ、まずはハンバーガーをひとくちほうばる、マクド

○ルドに来ると毎回食べるものだ、何度食べても飽きないちょうどいい味で素晴らしい、次に期間限定メニューのジンジャーコークだ、少し飲むとわかる、これはハンバーガーと一緒に食べることで最高のものになるのだと、この甘さの中にも辛味がありこの味はポテトにも手が進む、そしてポテトを食べるとジンジャーコークに手が出る、素晴らしい永久機関の完成だ。次のノーベル賞はマクドナルドのものだろう。

しまった、映画で飲んだコーラとジンジャーコークがかぶってしまった、俺今日だけでコーラ1．5ｌぐらい飲んでるんじゃないか、まぁ美味しいからＯＫだ。

俺は並んで食べるのが嫌いというわけではない、ただ人を待たせた状態で食う飯がそんなに好きじゃないだけなんだ。だからファストフードは好きだ、基本行列が出来ないからな。

ルドルフも思ったより美味しそうに食べているじゃないか可愛いから奢ってあげよう。

食事をすませたあと

「ヨシ、今度は買い物に行くぞ、晩ごはんも食べていくだろ？」
「ありがたく、頂戴するよ。」
「さて、今日は卵がセールの日だし、野菜も安いし色々買っておこう。」

買い物後

「ところでオグリキャップとは、仲良くしているようだね」
「ああ、俺はルドルフ以来の天才が現れたと思ったし、何とか専属トレーナーになれたらなって思ってるよ。」
「私のトレーナーに復帰してくれてもいいんだよ。」
「あまりそういう冗談はしない方がいい今のトレーナーにも悪いからな。」
「私は君と共に歩んでいた時の方が私の目標に近づけ心強かったと思うんだ。」

「レースの結果は今のトレーナーの方が安定しているぞ。」
「私がクラシック三冠を達成できたのは君がいたからなんだ。」
「俺の力なんて微々たるものだ、生徒会の仲間たちの方がお前の役に立ったはずだ。」
「それでも君と共に歩みたいんだ。」
「俺がお前のそばに居てもお互いの為にならない。」
「もう……わたしとともに歩んでくれないのか……」
「俺はお前の夢を信じている、すべてのウマ娘が笑顔に過ごす世界を、応援もするよ、だが今はオグリキャップがどうなるか、それを見届けたい。」
「君は本当に前に進んだんだな、私はまだ進めていないのかも知れない、だが諦めないよ、いつかまた私ともう一度歩みたいそう思わせてみせる。」
「あぁ、楽しみにしてるよ。それに俺にも夢があるからな。」

そう言って俺たちは少し気まずくなりながらも家路についた。

「エアグルーヴ、掃除は終わったか?」
「ちょうどいい時間に帰ってきたな、今風呂の掃除が終わる所だ。」
「お前風呂の掃除もしてんのか!?」
「当然だ、徹底的にすると決めていたからな。」
「マジか、スゴイ気まずいわ。」
「それじゃあ、エアグルーヴの掃除が終わるまで食事の用意をしよう。」

今夜はカレーだ、なぜならカレーが嫌いな人間はいないからだ。正直言ってスパイスとかよくわからないがカレールーの元があれば美味いものは出来る、あと多めに作るからオグリキャップに餌付けしておこう。
「次の選抜レースだが、どうやらオグリキャップ以外にも期待の新人がいるんだ。」

「あぁ、スーパークリークだろ、とても速くて母性の溢れる子だと聞いたが、オグリキャップのライバルになるウマ娘だと思い、すでに調査してある。」
「スーパークリークはスタミナを貯めて、勝負所を見極めてスパートをかけるタイプだ。」
「対する、オグリキャップはその高いパワーとスピードで前方から更にスパートを掛けて他のウマ娘を抜き去るスタイルだ。」
「一見似ているが、かなりタイプが違う、スーパークリークは前方の逃げ切りより、オグリキャップは前方の差し切りより、うどんとそばのように互いの強みがある。」
「正直言ってどちらが勝つかはまだわからん。」
「だが、勝たせるつもりだろう?」
「もちろんだ、オグリキャップには夢があるからなすぐに叶えさせてやるさ。」

「カレーができたようだ、ところで生卵は入れるか?」
「生卵?」
「関西の方では生卵を入れるらしい、ちょうど中辛だし卵の甘みが合うだろうしな。」
「なるほど、よし、私も一つ入れてみよう。」
「私の分も卵頼むぞ」

卵入りカレー実に素晴らしい、今回のジ○ワカレーは中辛だ、バー○ントカレーの辛口より辛いらしいから、これくらいの辛さに卵がよく合う。にんじんが何故か三日月型だがルドルフがしたんだろう目にもよい素晴らしいカレーだ。カレーにはやはり牛肉だ豚肉も美味いがなんか肉って感じが感じられないんだ。あとペットボトルでコーラ1・5l買ったけど俺3食コーラ飲んでんじゃん、なんだろう、虫歯に近づいた気がするなぁ、あと肉じゃがは何故か豚肉の方が美味しく感じるんだ、不思議だな、とにかくカレーはいつ食べても美味いそれに尽きる。

「さて、門限も近づいてるし、送り届けるよ」
「ありがとう、これで門限破りはしなくて良さそうだ。」

「俺が最初から送るってわかってたろ。」
「ところで掃除中の私はどうだった。」
「安心しろ、いつもどおりだったよ。」
「そうか、ならいいんだ。」

二人を送り届けたあと

やっべ、模擬レース明日やんけ、俺今日コーラ飲んで、奢っただけじゃん、俺スーパークリークが母性溢れるウマ娘ってことぐらいしか知らないわ、偉そうに言ってたけどルドルフからも話を聞くべきだった。

まぁ大丈夫か、靴も新しくしてフルパワーになった、オグリキャップに勝てるウマ娘はそうそういないだろう。

そうと決まれば明日オグリキャップに餌付けするカレーを多めに注ぎ足しておこう。

明日は祝勝会をするぞー

芦毛の選抜レース

選抜レースの5日前……

オグリキャップの脚力に耐えるシューズを渡した。
「シューズを、私に？」
「……なぜだ？私は、まだ君の担当ウマ娘でもないのに。」

まだ、だと!?、オイオイオグリキャップさんついに私に落とされてくれたようだな。ククク……安心しろ君を日本一のウマ娘にしてやろう。
「選抜レースはウマ娘の全力をトレーナーに見せる場所だ、タマモクロスもそう言っている、そのままの靴では君は全力を出せない。そして公平なる勝負は最も大切なことだ。」
「なるほど、タマが……。そうか、そういうものなのか。」
「……わかった。気遣いありがとう。今日から履き慣らして、本番に備えるよ。」

それから、新しい靴を履いて走るオグリキャップを、しばらく見守った……。

やっぱりあまり信用されてないんじゃないか、いやだって、【なるほど、タマが……】だぞ、俺の部分全く聞いてないんだから、タマモクロスに全幅の信頼を寄せているのがわかったけど、俺実はまだ、信頼されてないんじゃないか？

「はっ、はっ、はっ――ふ……ははっ、はははっ!!」
「すごい!!脚が、軽いぞ……!!」
「はぁっ、はぁ……。」
「改めて、お礼を言わせてくれ。」

「ありがとう。これは……最高のシューズだ。大切にする……！」

耳がピンっと立っていて上機嫌なのがわかるな、顔ではよくわからない子だと思っていたが、身体（耳）は正直じゃないか

「楽しそうで何よりだよ。」

「……っ。」

「あ……あれ？なんだ……？」

「どうした？」

「いや…その。すごく、なんというか……。」

「懐かしい感じがして？」

恋だな初恋を思い出したんだ、ってふざけて言おうと思ったが、前回それでかなりまずいことになったからなここは自重しよう。とぼけるか

「懐かしい？」

「あ……いや、すまない、忘れてくれ。」

「とにかく、シューズありがとう。選抜レース、必ず全力で走ってみせる。」

選抜レース４日前

あの幻のウマ娘が復刻上映だと絶対観に行かなくては、いやでも、一人映画はボッチ感があってやだな。

選抜レース３日前

そうだ、トレーナー仲間を誘えばいいんだ。よし、早速桐生院を誘おう。

選抜レース２日前

断られた、しかも女の子誘って断られたから男としてかなり惨めな気がする。仕方ない、もう一人の年下後輩を誘うか。

選抜レース1日前

断られた、選抜レース観に行く準備があるから無理ですって言われた。ごもっとも過ぎてぐうの音も出ない。てか新人誘って何してんだ俺は、そう思ってたらルドルフとエアグルーヴがきた。エアグルーヴが週末にしようと思ってた掃除をしてくれるし、ルドルフを連れて映画を観に行こう。

選抜レース当日

……何も調べてねーー!!馬鹿だよ俺はホントバカ、ルドルフに今日の選抜レースについて聞いておけば万事解決なのに聞いてないのホントバカ、5日間遊ぶことしか考えてないのもホントバカ、俺がした役立ちそうなことってカレー作ったくらいだぞ。オグリキャップ多分俺が何か凄いことしてると思ってるかもしれないのに、俺がしたのは遊ぶことだけ、ホントバカ!

いやでも最低限の情報は持っている、オグリキャップは昼からの選抜レースに出走する、そしてもう一人の期待のウマ娘スーパークリークも出走する是非観に行かなければ、

G1レース並みの盛り上がりが会場を包んでいた……!すごい熱気が伝わってくる!

「これが本当に選抜レースか……末恐ろしいな」

「わぁ、すごい数のお客さんですね~。」

「ああ、そうだな。選抜レースというのは、いつもこんなに盛り上がるのか……。」

「いいえ、いつもはここまでじゃないんですが……。誰か有名人でもいるのかしら~……?」

「有名人か……なるほど。」

選抜レース係員A「スーパークリークさん!そろそろご準備の方、

お願いします！」
「はぁ～い、では、失礼いたしますね～。」
「ああ。」
「……いまの、誰だったんだ？」
教えてやるべきだった、まさかそこまで何も知らないとは
注目されてるのに、ふたりともかなりマイペースだった……

――だが、レースが始まると二人共圧倒的な走りを大観衆に魅せつけた！
俺はそれを後ろの方で腕を組みながら見守った。
実況「オグリキャップ追いかける！出だしの遅れを感じさせない走りだ！」
「オグリが追う！オグリが追う！クリーク逃げる！逃げ切れるか！オグリか！クリークか――」
……結果、オグリキャップの成績は、スーパークリークに次いで僅差の2着だった。
「2着、か。」
「新しいシューズで、全力で走って……それでも、2着……。」
気まずい、勝つと思ってたから祝勝会の準備もしてるのがかなりまずい
「……すごいな。デビューすれば、タマやクリークのようなライバルたちと、これからもたくさん走れるのか……！」
「うん、すごいことだ……。楽しみだ、とても……！」

中堅トレーナー「オグリキャップ！お疲れ様、素晴らしい走りだったぞ……！」

ベテラントレーナー「ええ、とても力強かったわ！ぜひあなたをスカウトさせてほしいのだけど――」

「あ……そうか、デビューのためには、まずスカウトか、そうだった……。」
「いや、だが……すまない。ちょっと、通してくれ。」
人波を不器用にかき分け、オグリキャップが後方彼氏面の俺の傍らまで歩いてきてくれた。
「……レース、見ていてくれたか？」
「見てたぞ！素晴らしかった、俺を熱くさせてくれてありがとう!!」
「っ……ありがとう。」
「うん、やっぱり……そうだ。」
「――一つ、頼みがある。私のトレーナーになってくれないか？」
「君の言葉からは、すごく温かい気持ちが伝わってきた。」
「懐かしい……故郷の人たちが向けてくれた、真っ直ぐな応援の気持ちだ。」

少し違う気がするが気にしてはいけない、概ねそのとおりだ。
「私は、故郷から遠く離れたこの地でも、キミが見ていてくれるなら……安心して、力いっぱい走れる。そう思ったんだ。」
「……どうだろうか。お願い、できるか？」
「俺が君のお願いを断ったことがあったか？一緒に故郷の人たちを喜ばせるぞ！故郷に錦を飾るぞ!!」
「……！ああ！よろしく頼むぞ、トレーナー！」
「よし、それじゃあ――」
（ぐうううぅ……）
「……まずは、腹ごしらえだな。」
淳朴な腹ペコウマ娘、オグリキャップとの日々はまだまだ始まったばかりだ……！

終わると思っていたのか？

「オグリ、今日は宴会をするぞ。」
「……！そうか、ありがとう!!」
「勝っても負けてもお祭り騒ぎだからな」
「とりあえず俺の家まで車で行くぞ、何人か迎えに行かないと行けないからな。」
「……本当に君は。故郷の人みたいだ。」

トレーナーの家

「あら～さっき私とレースで走った方ですね～」
「君は、スーパークリークだな。」
「ウチも忘れたらアカンで！」
「先輩！今日はよろしくお願いします！」
「こちらは、担当のハッピーミークです。ミーク、ご挨拶してもらえますか？」
「……ハッピーミークです。……こんばんは。」
「先輩俺も今日は、クリークともどもよろしくお願いします。」
「さて人数が、集まったところで自己紹介をするぞ。」
「まずは葵ちゃん！」
「ハイ！トレセン学園の新人トレーナーの桐生院葵です。今日はよろしくおねがいします！」
「次、ミークちゃん！」
「……はい……トレーナーの担当ウマ娘のハッピーミークです。……今日はよろしくおねがいします。」
「次、スーパークリーク！」

「は～い、こちらのトレーナーさんの担当ウマ娘のスーパークリークです。今日は楽しい時間を作りましょうね～」
「次、トレーナー！」
「今年から入った新人トレーナーの鏡祥太郎です。今日はよろしくおねがいします。」
「次、タマモクロス！」
「ウチはデビュー済のウマ娘のタマモクロスや！みんなよろしくな～」
「次、オグリキャップ」
「……ここにいる、先輩と呼ばれている。トレーナーが担当のウマ娘だ。」
「なぁ、もしかして誰も俺の名前しらないのか？」
「怒らないから、全員正直に手を挙げて。」

全員が手を挙げた。

「えっ!?みんなそんなに俺の名前そんな知らない!?」
タマ「オグリのそばにようおるトレーナーとしか、見てなかったわ。」
オグリ「名前、あったんだな。」
卑しい後輩「あの～、失礼ですが、凄腕のトレーナーだって聞いてましたけど、名前は知りませんでした。」
無難な後輩「面倒見のいい人だと聞いていました。」
卑しい後輩のダシにされる卑しくないウマ娘「……誰って思ってました。」
「そんなフルボッコにする!?」
「まぁいいや、とりあえず、名乗るぞ！」
「俺の名前は木原正樹だ、トレセン学園で勤務して5年目のトレーナーだ。」
「昔担当した、代表的なウマ娘はシンボリルドルフで無敗の三冠を達成させた。」

「その他のウマ娘のこともまた、今度話すから今日は用意してあるカレーやピザを食べながら盛り上がるぞ！」

さて俺が食べるのはピザだ。俺の家にはわざわざ作ったピザ窯があるから、それを使ってピザを焼いた、チーズはモッツアレラ、サラミはこだわりのトスカーナ、さらにピザソースはトマト缶を使って手作りだ。ククク、美味そうに食べるじゃないか。

実際かなりうまいからな、まぁ正直言ってサラミとチーズをここまでこだわらなくても良かったと思うがうまいから問題なし。オグリキャップはカレーに誘導しといてよかった、カレーがすごい勢いで減ってるしな。ピザを念の為６枚焼いたけど多分足りないだろう。仕方ない冷蔵庫の中のものでなにか作ってやろう。

「先輩、なにか作るのなら、手伝います」

「大丈夫だ、オグリがかなり食べるからなにか適当に作るだけだしな。」

「他の奴らと楽しく話しておいてくれ。」

「ありがとうございます。先輩」

俺は冷凍庫の中にあった、冷凍の１００個分の焼き餃子を焼くことにした。冷凍だが餃子が結構パリパリになる素晴らしいものだ。

餃子を焼いていると会話が聞こえてくる。

「オグリ相変わらず、ごっつい量食べるなぁ～」

「タマも、たくさん食べないと大きくなれないぞ。」

「そうですよ～、たくさん食べないと大きくなれないんですよ～」

「ウチはこれで充分や！それにウチは二人より先輩や！」

「鏡トレーナーカラオケに興味はございませんか？」

「ございます。」

「……本当ですか！……よろしければ今週の土曜日一緒に行きませんか？」

「ありがとうございます！是非一緒に行きましょう！」

なんで俺の家でカップルができあがろうとしてるんだろう

スーパークリークはなんとも思わないのか？

仕方ないハッピーミークには水族館のチケットでも送って桐生院と遊びに行かして妨害しよう。

ハッピーミークは水族館のチラシを興味深そうに覗いているしな。

あとは理事長が新しくするレースのＵＲＡファイナルズを盛り上げるためのイベントをしたいって言ってたから二人を生贄に捧げよう。

あのかなり、すごい記事を書くパッション系記者さんが取材するらしいから、楽しいイベントになるだろう。

そんなこんなで餃子が焼けた。もう一つの冷凍食品の唐揚げもオグリに食べさせよう。

そんなこんなで門限が近くなるまで続いた。

オグリには、せめてルドルフを超えてもらわないと困るからな

芦毛の食いしん坊

さて、改めて自己紹介をしよう。オグリキャップのトレーナーの勤続５年目の凄腕中堅トレーナーの木原正樹だ。私の現状について説明したいというかする。

ルドルフを無敗の三冠ウマ娘にしてから２年がたった訳だが、実は私は故郷の高校を卒業したあと、すぐさまトレーナー試験を受けて合格した。かなり珍しいパターンだ。しかし、教員免許というのは高校卒業だけでは中学生までの教育しか出来ないのだ。

それにより、ルドルフと別れた訳だが、その後理事長からある物を貰った、それは特別免許状と呼ばれるものだ。これにより私は高等部の教育ができるようになった。

本来の物は１０年更新だが私のものは、５年更新であり、長いスパンのウマ娘教育において、失敗はかなりまずい、結果を残せなければ、私は高等部ウマ娘の教育資格を失ってしまう。

そうなるといいところまで、育成したウマ娘を他のトレーナーに掻っ攫われることになってしまう。

そしてそれを受け取ったのがルドルフと別れた直後の２年前だ。つまり３年以内に結果を残さなければ私の特別免許状は取り消されるわけだ。

そして今は２月後半、私としては制度が変わったお陰で出走できるようになった、皐月賞に出て欲しいがそのためには、Ｇ３かＧ２を勝たないといけない、そのためにオグリと相談したいんだが、オグリに負担を与えないようにスケジュールを組まないといけない。相談したいんだが……

午後から授業で模擬レースがあるという、オグリキャップと、昼食を一緒にとることになった。

もう驚かないが、傍らに置かれたバッグには、とんでもない量のパ

ンやおにぎりか詰め込まれている。

オグリ「購買部で買ってきたんだ。これでエネルギー補給はバッチリだろう。」

「すごい量だな、何食分だ？」

「一食分だ。」

「相変わらず凄まじい量だな、慣れてしまった。自分に驚いた。」

「腹八分と行ったところか。食べ過ぎたら、動けなくなってしまうからな。」

「腹八分!?」

「カフェテリアだと制限なく食べてしまうから、たまにこうして購買部で買って済ませるんだ。」

買い込んだ食料を広げ、オグリキャップは【いただきます】と丁寧に手を合わせ食事を始めた。

青が広がる空の下、まるでブラックホールに飲み込まれるように食料がオグリキャップの中へ吸い込まれていく

……。

「ごちそうさまでした。」

「よく噛んで食べたか…？」

「もちろんだ。」

『いただきます』『ごちそうさま』そしてよく噛み味わうことが食べ物を作ってくれた人に対する感謝だとトメさんに教わった。」

「……大事なことの多くは、故郷の人たちに教わったんだ。恩返しのためにも、私はこの学園でまた成長しなくては。」

「……ああ。トメさんと言えば、よく差し入れにくれたおにぎりは美味しかったな。私の大好物だったんだ。」

「まん丸で砲丸のように大きくて、しっとりしたのりに巻かれていてな。」

「具も盛りだくさんで、焼いたタラコや高菜の漬物、昆布の佃煮が入っ

ているんだぞ。」
「どこから頬張ってもすぐに具材にいきついて、とても幸せな気持ちになれるんだ。」
（ぐぅぅぅ～……）
「む……思いだしたら、またお腹が……。腹八分目には少しばかり足りなかったか。」
「ううむ……買い足すにしても、今から購買に行って間に合うだろうか……。」
「私のおにぎりをあげよう。」
「……！もらっていいのか？」
「ふふっ、ならば遠慮なくいただこう。」
　ボケたつもりだがボケが微妙すぎた。全く気づかれない言い方がなんか微妙に下ネタっぽいだけだしな。
　そんなことを考えていたら、オグリキャップは目を輝かせながらおにぎりを取ると、すごい勢いで食べだした。
　そして、あっという間に用意しておいた3つのおにぎりをすべて平らげてしまった。
「ごちそうさまでした。時にトレーナー、これは君の手作りなのか？」
「トメさんのおにぎりと同じだ……とても優しくて、心がぽかぽかしてくるような、そんなおにぎりだった。」
「何か特別な握り方でもしているのか？」
「握り方は普通だ、ただ特別な海苔を使っている。」
「どんなのりなんだ？」
「俺の故郷の名産品の味付け海苔だ。俺の故郷は他にもにんじんの出荷量が3番目に多いとか踊りの祭りが県の最も大きな祭りだったり、そんな場所だ。」
「塩とか醤油とかの味がよく効いててうまいだろう。」
「のりも美味しかったが他になにかあると思うんだ。」
「本当に適当に握っただけだぞ。」
「……技法では無いとなると、他になにか秘密が？良ければ、今度キミが握ってるところを見せてくれないか？」

「こっちに出てきてから、このおにぎりの味が恋しくてな。自分で握れるようになりたいんだ……お願いできるだろうか。」
「構わん、むしろ毎日おにぎりを作ってやるぞ。」
「……！ありがとう！君にトレーナーをお願いして本当によかったと思っているぞ。」
「久しぶりに食べた優しい味で、お腹も気持ちも満たされた。トレーナー、午後の模擬レースは期待していてくれ！」

その言葉通り、オグリキャップは模擬レースで圧倒的な勝利を収めてみせた。
私のおにぎりがオグリキャップの力の源になれたのは嬉しかったが……。
（ぐうううう……）
できれば1つぐらい残しておいてくれたら良かった、と少しだけ思うのだった。

オグリキャップとレース後話した結果、弥生賞に出ることになった。ファン数が不安だったがどうやら笠松時代の記録も加味して出走できるらしい。
中央初のレースだ、しっかり支えてやらないとな。
数日後
俺は1つ恐ろしいことに気が着いた。
あれから毎日おにぎりを作っているが、オグリキャップがお腹一杯になるには最低でも30個は必要だと言うことに、またオグリキャップの食欲には限りはなく、食事のあとに食べ物の話をするとさらにお腹が空いてしまう。トメさんは何者なんだ本当に
これの分を加味すると1日50個あると確実だ。
少しでも不満を残さないために50個毎日作っている。おにぎりを作り続けることがこんなにも苦しかったのか、私は後悔している。
「トレーナー！今週の週末念入りに練習したいから3食おにぎりを作ってくれないか？」

私は自分の頭がおかしくなったのかと考えた。
とりあえず言葉を思い出そう。
【3食おにぎりを作ってくれないか？】
ふまんをのこさないようにしないといけないんだった。
「アア！モチロンダ。イクラデモツクッテヤルゾ！」
「キミノ、エガオガ、イチバンノホウシュウダカラナ！」
「……トレーナー！私のためにありがとう。君の作ってくれたおにぎりで必ずレースで優勝してみせる！」
私はおにぎりを作り続ける機械になった。

弥生賞のレース後

実況「強い！強すぎる！8馬身以上の着差で勝利したのはオグリキャップ！」

というわけで見事皐月賞への切符を手にした。オグリキャップだった。

弥生賞まで毎日おにぎりを作り続けた私は母の日に感謝の気持ちを伝える大切さを本当の意味で理解できた気がした。

高知のアイドルと地獄の一日

私は何をしているのだろう……

遡ること3時間前

私はトレセン学園にある木にもたれながら体育座りをしていた。

ただ何も考えず、空を見たり苦しみながら、地面を見ていただけだ。

そうしていると女の子が私に話しかけてきた。

元気なウマ娘「お兄さん！こんなところで何してるの～～？」

「あぁ、実は自分の担当ウマ娘に毎日５０個のおにぎりを作っているんだが、苦しくなってしまったんだ。でも担当の子は表情が分かりづらい子だから、嬉しいのかどうかもわからないんだ。」

「えー！毎日おにぎりを５０個も作るなんてスゴイね！」

「それにきっと担当の子も、すごく喜んでるよー！」

「そうかなー、実はもう飽きてたりしてないかなー……」

「飽きないよ！だって自分のトレーナーが毎日おにぎりつくってくれてるなんて、わたしだったら自慢してるもん！」

「ありがとう、君は本当にいい子だね、よければ名前を教えてくれないかい？」

「わたしはハルウララだよ！」

「お兄さんの名前は木原正樹って言うんだ、よろしくね」

「ねえねえ、木原さんこれからショッピングセンターでビコーペガサスさんのヒーローショーがあるから観に行かない！」

「もちろん観に行くよ、オグリも今日はタマモクロスと遊びに行くらしいから俺も行くよ。」

近くのショッピングセンター

ハルウララと話しながら歩いているとオグリが現れた。

オグリ「トレーナー！」

「どうしたんだ、オグリそんなに慌てて」

「タマが迷子になってしまったんだ。」
「とりあえず、どこに行く予定なのか教えてくれないか。」
「タマと物産展を観に行く約束をしてたんだ。」
「なら、賢いタマモクロスなら、物産展にいるだろう。」
「俺が会場まで案内するからついてこい。」
「そういうわけだから、ウララちゃんは先に行っておいてね。」
「バッチリいい席取っておくから楽しみにしておいてね！」
「任せたよ」
「トレーナー、仲良しだな。」
「実は今日合ったばかりなんだ。たぶん学園で一番いい子だぞ。」
「オグリも仲良くなれると思うぞ、いい子だからな。」
「トレーナー……捕まらないように気をつけるんだぞ。」
「お前……そんなこと言う奴だったのか……」
「まぁ……案内してやるからついてこい。」

物産展会場

「オグリ！心配したで～～一体何やっとたんや。」
「タマこそ心配したぞ、急にはぐれたから攫われたんじゃないか心配したぞ。」
「よく見なかったら、小学生位に間違われてさらわれる可能性もあるからな。」
「ウチ、なんで、迷子とそのトレーナーにこんなに言われんとアカンのや！」
「まぁ、気にするな俺は屋上でヒーローショー見てるから楽しんでな。」
「なんや、子供でも付き添いできとんか？」
「ハルウララだ。学園内で一番強靭なメンタルを持ったウマ娘だ」
「トレーナーと、今日合ったばかりらしい。」
「なんやチームでも作るんか？」
「まさか、ひとさまのウマ娘を取り上げてまでチームは作らないさ。」
「ハルウララのトレーナーは出張で二週間程いないらしいから私が付

き添いで来たというわけだ。あと良い子の誘いは断れない。」
「あんたがそこまで、優しい人だと思ってなかったけどええとこあるんやな。」
　オグリに靴買ったし、皆を呼んで自腹でパーティーしたし、結構いいことしかしてないつもりだったんだけど、そんなふうに思ってたのか。
「失敬な、俺はバファリンと一緒で半分は優しさで出来てるんだぞ。」
「……トレーナー、そうだったのか？」
「オグリ、これはこの人なりのギャグや。」
　タマモクロスなんで俺に対して厳しいんだ。敬語使わなくても許してるぞ。
「じゃあ、おれはヒーローショー見てくるから楽しんでくれよ。」
　タマモクロスの思考
　こいつ担当ウマ娘放って何ほかのトレーナーのウマ娘の尻追いかけとんねん。オグリはボーーとしとるやつやからお前がしっかりせんとあかんのやぞ。皐月賞も近いし作戦とか大丈夫なんやろな、こいつ何考えとんやホンマ底が知れんやつや。

　ショッピングセンター屋上
　屋上の屋台これは素晴らしいものだ、ハルウララにはクレープを買っておいた。はちみつを食べると足が速くなるらしいからな、あの子は一生懸命走るんだが、足が遅いらしいからはちみつをたくさん取って素晴らしいウマ娘になってもらいたい。
　そして私のぶんは屋台にあったケバブとジンジャーコークだ。久しぶりにケバブを食べるが目の前で切ってくれたから楽しめそうだ。普通はストックして置いた。他の肉を使って作るからな、回してるアレは見せるようだが、切ってくれる店だったから、久しぶりにテンションあがった。店主の人もトルコ人らしいから雰囲気も抜群で買う選択肢しかなかった。そしてジンジャーコーク、マク〇ナルドで飲んでから他の店で飲める日が来るとは思ってなかった。早速飲んで

みよう。味は普通にうまい、ショウガがしっかり効いてて、かなりうまい。そしてケバブもよく食べられるドネルケバブだが、普通にうまい、ソースが結構薄めだが楽しめる味だ。ジンジャーコークの味を中和するのに良くて永久機関が完成する、次のノーベル賞はケバブ屋のものだろう。

コイツはどうやら皐月賞前に食べ物のことを一番良く考えるようだ

しかし気づく、私はなぜか最近よく心のなかで食レポをしてる気がする。カレー作ったときも映画を見に行ったときも食べ物を食べると毎回食レポをしている。もう考えて食べるのは辞めよう。なんか人として気持ち悪い気がする。偉そうで、ノーベル賞受賞者多すぎだろ

「オーイ、ウララちゃーん!」

「あ!木原さんだ、バッチリいい席取れたよー」

確かにまんなかのまんなかで丁度いい距離でキレイに観えるいい場所だ。座高がやばいやつもいないからしっかり見えそうだ

「ほら、お土産のはちみつチョコクレープだ。これを食べて足を速くするんだぞ〜」

「わぁ!ありがとう木原さん一緒に食べながら見よう。」

他の観客も食べ物持ってるから食べながら見ても問題ないところだしそうするか。

会長「トレーナー、ヒーローショーを見に来るとはよいショーじんだな」

「ルドルフいきなりジョークとは流石だが、俺のジンジャーコークともかかってるし素晴らしいんだが無理矢理過ぎるぞ。」

「ルドルフも今日はヒーローショーを見に来たのか?」

「フフ、実は私は登場するんだ。グリーンルドルフとしてね。」

「すごいな、しかし会長がなぜそんなことを?」

「地域の人との約束でね、色々トレセン学園に融通してもらう代わり

にこういった催しを地域で行うんだ。この前は商店街でヒーローショーをしてそこのハルウララもピンクウララとして舞台に立ったんだ。」
「ウララちゃんもヒーローやったのか！俺も見たかったな～」
「私もまた出たいからその時は木原さんも観に来てね！」
　舞台スタッフ「大変です、怪人役の方が脱水症で倒れてしまいました！」
「いきなりだな！しかしかなりの大ピンチじゃないか！ウマ娘ヒーローショーってアクションが出来るかなりのクオリティのショーだろ、大変じゃないか！」
「かなりの大ピンチだね、代役が必要だ、いなければ中止しないといけない、しかし楽しみにしてる子供が大勢いるのに無力だ、こんな所に体力がそこそこあってウマ娘と信頼関係が厚い人物なんてそうそういないよな～」

「チラッ　チラチラ」
　なぜ俺を見る、しかしプロだろ何年もやってんのに熱中症で倒れるなよ。お前そんなやつだったのか、今日は色んな人の意外な一面を見せられる日なのか。
「わかったよ、できる限りのことはするよ。」
「おお、流石はトレーナーだ、君のそういうカッコいいところは大好きだよ。」
「だから、こういうときにからかうな。っで今日の怪人はどんなやつなんだ。」
「怪人ハダアーレだ。」
「怪人ってゆうより乙女の天敵って感じだな。あと調子を一気におとしそうだ、ウマ娘も乙女だから乙女の天敵はウマ娘の天敵か。」
「そのとおりだトレーナー、早速着替えてきてくれないか、私も着替えたあとそのままショーに入りたい。」
「台本ぐらい読む時間はあるよな、それとショーの流れもわかるよな。」

「時間がないから急いでくれ。」
「今日は人使いが荒いな。まぁ急いで着替えてくるよ。」
「ウララちゃん俺の活躍をしっかり見てくれよ！」
「うん！バッチリ見てるよ！」
ルドルフの考え
彼に厳しく当たってるように感じられるのだけは避けたいんだがどうなんだろうか、大丈夫だろうか、怪人役の人のチャックと声をだす部分を一時的に壊しておいたが狙い通り脱水症で倒れてくれて助かった、これで彼とともにヒーローショーができる。
ハルウララにもヒーローショーがあると教えておいて正解だった。
それに彼の心を癒やすのにも彼女が適任だと思ったがやはり正解だった。だがかなり仲良くしているようだが、私のお願いを優先したやはりオグリやウララより私を大切にしている、すなわち私が彼の相棒にふさわしいと言うわけだ。優越感で空が飛べそうだ。
なにかズレているようだ。

男性用の楽屋に入った、きぐるみみたいのがちょうどある、
ジャ○ラだ、確かに水がないところ出身だから肌荒れどころかそんなレベルじゃない気がするが着てみよう。
きぐるみだからよくわからないが動けるから問題なしだな
台本を軽く読んでいくか

１０分後
アイネスフウジン「みんな～今日は集まってくれてありがとう！」
「これからウマソルジャーVがやってくるから楽しんでね～」
プシュー
ウー　ウー　ウー　ウー　ウー　ウー
怪人ハダアーレ「グエッヘッヘ、それはどうかな」
「あー！貴方は怪人ハダアーレ乙女の天敵のとっても悪い怪人よー」
「クックックッ、解説ご苦労アイネスフウジン君、さあ戦闘員共あそこにいる子供を捕まえるんだ！」

ウー　ウー　ウー　ウー
「キャー！助けてダイヤちゃん！」
「キタちゃんをさらうなら私を代わりにさらって！」
「クックックッ、そんなに大切ならば二人一緒に怪人にしてやろう。」
「キタちゃんにダイヤちゃん二人は優秀な怪人になってくれるだろう。」
「みんなー！このままだと二人が怪人にされちゃう！せーのでみんなでヒーローを読んでね」
「せーの！」
子どもたちの声「ウマソルジャーV!!」
プシュー
シュタッ
「蒼き帝王ブルーテイオー!!」
シュタッ
「漆黒の名優ブラックマックイーン!!」
〈〔僕たち、私達が相手だ、ですわ!!〕〉
「テイオーさん!!」
「マックイーンさん!!」
「僕達が来たからにはもう安心だよ」
「私たちにお任せください」
「クックック、二人だけとは随分舐めたマネをしてくれたな、」
「戦闘員共二人を始末しろ!!」
ウー　ウー　ウー　ウー　ウー　ウー
「オリャー」
「それ！」
ウー　ウー　ウー　ウー
「なかなかやるじゃないか、私自らが相手になってやろう」
「ウオリャー」
「ハアーー！」
「フハハ、全く聞かぬわ！」
「フン！」

「クッ　コノママジャヤラレチャウヨ」
「所詮はただのウマ娘我々怪人の敵ではない」
　いいんじゃないか！初めてヒーローショーしたけどここで確か残りの三人が登場して怪人をやっつけるとかそんな感じだったはずだからそろそろくるはずだ。
　プシュー
　さっと音の方に振り向く、そこには二人のウマ娘が
???「ペガサスキーック!!」
　怪人ハダアーレ「ウボァーーーー!?」
「助けに来たよ、二人共！」
　ばっ馬鹿な、背後からいきなりドロップキックだとイカれてやがる。
「今のは少し効いたぞ【やせ我慢】だが正義のヒーローが背後から奇襲とはいかがなものかな？」
「手段を選ばないのも正義！」
　だめだコイツの正義はやばすぎる。
「それじゃあ、みんなでやるよ！」
「燃える正義の赤い炎レッドペガサス！」ドカーン!!
「蒼き不屈の帝王ブルーテイオー！」ドカーン!!
「緑の絶対なる皇帝グリーンルドルフ！」ドカーン!!
「漆黒の永遠の名優ブラックマックイーン！」ドカーン!!
「爆ぜる正義の桜吹雪ピンクバクシンオー！」ドカーン!!
　5人「ウマソルジャーファイブ!!」
「クックックッ、ついに揃ったかウマソルジャーファイブ、やはり全員を相手にしてこそ怪人！」
「みんなあれをやるぞ！」
　四人が返事をする
「みんなの人参を一つに！」
　ウマソルジャーファイブ「ウマソルジャーバズーカ！」
「えっ、ちょ、はやすぎな……」
　グリーンとピンクの見せ場は!?

「エネルギーゲートイン！ファイアー!!」
突如私の足元がカラフルに爆発した、凄まじい勢いでふっ飛ばされた。
大怪我するはずだが痛いですんだのでどうやらこのジ〇ミラは防護スーツの役割もあるようだ。
「ヤッター勝ったぞー」
生き残った戦闘員「まだです、ハダアーレ様はこのコーラを一気に飲むことで復活するのです。」
お前喋れるのかよ!!
怪人ハダアーレ「今は無理……」ボトン……
戦闘員「おのれウマソルジャーファイブ!!」ドカーン！
お前らもふっとぶんかい！
てかこの状況誰かツッコめよ！
私は薄れゆく意識の中でキタちゃんとダイヤちゃんがテイオーとマックイーンに抱きついているのを見てから眠りについた。

十五分後
ウマソルジャーファイブと子供たちの触れ合い会が終わったあと、スマートファルコンとミホノブルボンそしてサイレンススズカの逃げ切りシスターズのライブが行われています。アイネスフウジンはショーのおねえさんだから踊らないのだろうか？
センターはスズカだ、スマートファルコンが、リーダーと聞いたがスズカセンターの方がよいと判断したのだろう。
ショーのあと念の為ルドルフに湿布を貼ってもらったが明日には痛みが引いているだろう。ルドルフがふたりきりの時はルナと読んでくれと久しぶりに言ってきた、ルドルフがそんなことを言うのはかなり珍しい、ライブを見たら帰るか、ウララちゃんを家に送ってな。
ルドルフに誘われたが、皐月賞が近いから無理だと断った、どこか旅行に行きたがっていたが、2年前に行った温泉にでもまたいきたくなったんだろうか。

帰ろうと思い、ウララちゃんを連れて駐車場に向かおうとすると乙名士記者に捕まった。急遽来月イベントが決まったからリハーサル中で私にも見てもらいたいらしい、そう思ってついていくと何故か俺はウマぴょい伝説を踊っていた。なぜだかはわからないが、痛みを感じながらでも嫌とは思わなかった。

芦毛の皐月賞

皐月賞の一日前

「オグリ、皐月賞のあとの練習は俺のおにぎりではなく食堂でご飯を食べてもらいたい。」
「トレーナー、もしかして、作るのが嫌になってしまったのか……」
涙目で見てくる。
まずい、担当ウマ娘と仲が悪くなって調子を下げさせるのは一番の悪手だ、半分本当のことだが誤魔化そう、ちゃんと説明したらわかるだろう。
「違うぞ、長い人生で一番重要なのは友達を作ることだ。そして人と人が最も話すときは人と物を食べているときだ。つまり食堂で友達を作り一緒に食事をすることそれが大切なんだ。」
「俺はお前のトレーナーでもあり、先生でもあるからな、お前のことを考えたことしかしないぞ。」
「お前は、もう友達はたくさんいるが、悪いやつ以外は友達はいくら居ても問題ないからな。」
「……本当か？」
本当に泣きそうな目で見てくる、なんでこういう時だけするどいんだ。
「もちろんだ、俺が君に嘘をついたことがあったか？」
「……食堂で、ご飯を食べるようにする。でもたまにはおにぎりを作ってくれないか？」
「……！もちろんいいぞ！そんなに俺のおにぎりを美味しいと思ってくれているんだな。」
「それに、おにぎりを作るところを今度こそ見せてくれないか？」
「もちろんだ、おにぎりを作るところを見せてあげよう」
「それもあるんだが皐月賞頑張って勝ってくれよ。」
「任せてくれ、君のおにぎりを食べた私は無敵だ。」

そんな話をしたことで皐月賞の日もオグリキャップがお腹いっぱいになるようにおにぎりを用意することになった。
私がここまで頑張ってこれたのはウララちゃんのお陰だ、ウララちゃんが早く勝てるウマ娘になるのを私は願っている。
そう考えないと毎日おにぎり５０個はキツイ。おにぎりを作る大変さを説明してなかったけど、まず、ここまであると米炊くのだって大変だ。家にあるのは元々５合炊きだからわざわざ二升炊きの炊飯器を買ったからな。
そして私は、一つのおにぎりを作るのに約一分掛けている。一日分を約５０分掛けて作っているわけだ。５０個の時はもう慣れたが１５０個作ったときは心を無にしないと駄目だった。これを続けているとオグリに弁当を勧めたくなる。それでもおにぎりを作り続けた訳だが、今回の説得でしばらく解放されそうだ。
皐月賞に向けて、練習もしたから大丈夫だろう。あとは本当に勝つだけだ。

皐月賞当日
皐月賞は午後から走るそれまでにこのおにぎりを渡さないといけない。さて控室に向かうか。

少し開いている控室から不思議な声が聞こえてくる、趣味が悪いが覗かしてもらおう。
鏡トレーナー「クリークママ～♥」
「僕頑張ったからたっくさん甘やかして欲しいでチュ～～♥」
クリークママ「は～い、トレーナーさんは本当に偉い子ですよ～♥♥」

どうやら見てはいけないものを観てしまったようだ、先月、公衆の面前で葵トレーナーとウマぴょい伝説踊っていたがあれよりヤバいことをしていたとは彼も疲れているんだろう、ここは何も見なかったことにしよう。まぁ葵君には情報交換するが。
今気づいたが俺のリハーサルウマぴょい伝説は何だったんだ。
おっとまた、少しだけ空いたドアが正直言って少し怖いがもう一度覗いてみよう。

ハッピーミーク「クソです…あのクソ女…ミークのためだの吠えてた奴が…この間のお出かけ鏡トレーナーのを……」

これ以上見てはいけない、なんだろうこの前は新しい一面を見つける日だったけど、今度は見てはいけない一面を見てしまう日なのか？
葵ちゃんも結構大胆な子なのかもしれないな、
鏡くんは実は私の想像以上に恐ろしいやつかも知れないな。
おっと今度こそ、オグリキャップの控室だな、
「オグリ、入るぞー」
「……トレーナー、随分遅かったじゃないか。」
「すまないな、ちょっと見てはいけないものを見てしまってな。」
「……？見てはいけないもの？」
「レースには関係ないから気にする必要はないぞ。」
「それより、お前の大好きなおにぎりだぞ～～」
「……！トレーナーありがとう！そのトレーナー、たまには、一緒に食べないか？」
「そういえばほぼ毎日作ってるが一緒に食べたことは無かったな、たまには一緒にたべるか。」
「私もおにぎりを作ってきたんだ。」
そう言って5個ほどおにぎりを見せてくれた、大きくて一つで十分たりそうだがこれがオグリの基準なんだろう。ありがたくいただこう。

３個目で限界が来た。
「いや～、オグリのおにぎりは美味しいな～、美味しすぎて一気に食べるのはもったいない気がするな～。」
「……トレーナー、私のおにぎりは美味しくないのか…」
コイツこんなに面倒くさい子だったか!?
「いや違うんだオグリ、実はお腹いっぱいになってきてな。」
「そうか……やっぱり美味しくないんだな…」
「すごく美味しいから！自分で作ったおにぎりより美味しいくてすごく喜んでるからな！」
「本当に美味しかったらいくらでも食べれるはずなんだ。」
どんなやつだそいつは!!オグリか！コイツ美味しかったらいくらでも食べれるタイプか
「トレーナーが、作ってくれたおにぎりならいくらでも食べれる。」
「俺もそんな気がしてきたよ!!よーしあと２つもたべるか!!」
もうどうにでもなれ!!

「もう食えな……」
「安心してくれトレーナー、おかわりもある」
ニッコリ笑顔でオグリが言ってくる
これはオグリなりの恩返しなんだろうか、俺が悪かったから許してくれないだろうか……
「これが最後だよな」
「……足りないのか?それはすまなかった、次はもっと用意しよう。」
「これでお腹いっぱいだ！よーしたくさん食べて元気を出すぞ～」
晩ごはんが間違いなくいらなくなる量のおにぎりを食べた。

「オグリ、勝ってくれよ……」

「もちろんだ、任せてくれ。」

皐月賞

実況「最初に先頭に出たのは7番ジャラジャラ」
「3番オグリキャップまずは後方で様子を伺う。」
解説「7番ちょっと掛かり気味かもしれません一息つけると良いのですが」
中盤
「先頭にたったのは11番スーパークリーク!!」
「一番人気のオグリキャップ足をためています。」
終盤
「ここで飛ばしてきたのはハッピーミーク先頭との差がみるみる縮んでいきます!」
「スーパークリーク粘ります、しかしその差はわずか!!」
「ここで真打ち登場オグリキャップ並ばないハッピーミークとスーパークリークをごぼう抜き!!」

「オグリキャップ!!脚色は衰えない!!」

オグリがこちらに手をふる、私も全力で振り返す。
三冠の１つ目皐月賞は私達が取った。ウイニングライブではしばらくオグリはバックで踊ることはなさそうだ。

オグリが、センターでライブをしている、久しぶりに自分の担当ウマ娘のライブを見たが涙が出てくる。
ウマ娘の娘は子供だと言うことかも知れない。
自分の娘の晴れ舞台みたいで、泣けてくる
ＵＲＡファイナルズ優勝したときたぶんめちゃくちゃ泣くと思う。
とにかく私はペンライトを全力で振りながらオグリを応援した。

「素晴らしいウイニングライブだったぞ。」
「トレーナー応援ありがとう。」
「今日は二人で食べに行くぞ。」

オグリが好きそうな定食屋に行った
俺は焼き鮭定食でオグリはすき焼き定食だ。
前食べたときとても美味かったのでオススメした。
「トレーナー、こういうお店はよく来るのか？」
「安くて美味いからな、新人の時からずっと定食屋には来てるよ。」
「……トレーナーは、どうしてトレーナーになろうとしたんだ。」
「俺は用心棒とかが活躍する西部劇が大好きなんだ、戦隊ものとかも好きだが、時代劇も大好きだ。用心棒は先生ってよばれるんだ。俺もそう呼ばれたくてな、学校の先生にお前は、先生に向いているって言われてな、それならウマ娘のトレーナーになりたいなと思って勉強してトレーナーになったけど、誰も先生って読んでくれないんだ。」
「なら、ふたりきりの時は私が先生って呼ぶよ。」
「実は、先生って、呼ばれるより、今はトレーナーって呼ばれる方が気

に入ってるんだ。」

「さて、オグリ次のＮＨＫマイルカップを勝つぞ今日はレースの疲れを癒やしてゆっくりするぞ。」

そういったあとオグリは早速願掛けのカツ丼を７つほど頼んでいた。７冠してほしい俺の気持ちを見据えてくれた行動かもしれないが財布に大打撃だった。

芦毛のビート板

皐月賞から二日後

今日はオグリキャップの練習にしっかり付き合う日だ。オグリはどうやら長距離も走れそうなので長距離を走りきれるようにするためにプールで練習するつもりだ。スタミナを鍛えるにはプールトレーニングと古事記にも書かれている。そして今日は先生を呼んでいる。

「オグリ今日は水泳を教えてくれる先生として、トウカイテイオーを呼んでいる。スポーツ抜群のウマ娘だ、生徒会室でエアグルーヴに頼まれて連れてきた。」

「カイチョーと仲良くしてるらしいけどおじさん何者なの？」
「俺まだ２３なんだが、まぁルドルフの元トレーナーの木原正樹だ。」
「……！トレーナーそんなに若かったのか。」
「どんな奴でも社会人５年目まで行くと落ち着きが出てくるものだ。」

テイオーの指導はかなりスパルタだった。
手を掴んでようやく泳げるオグリを泳いでる途中で離すなどかなり厳しい、というかそれは自転車で後ろの荷台の部分を離す感覚でやってると思うんだがだいぶ違うぞ。
「トレーナーは泳がないのか？」
「ライフセーバーの代わりだからな、基本は見守るだけだ。」
「向こうの方に監視員もいるから、トレーナーも教えてくれないか。」
「大丈夫か、まぁテイオーではお知えられない部分もあるか。」
「ところでテイオー、」
「何、トレーナー！」

「俺は君のトレーナーではないんだが聞くぞ、実は水泳教えるの苦手だろう。」
「うん！よくわかったねトレーナー！」
「いやだから、君のトレーナーじゃないからな、木原さんとよべ、たぶん感覚でこなしてた、タイプだから教えるのが苦手なんだろう。ダンスとかは教えるのは得意そうだろうが。」
「初対面でそこまでわかるなんて、流石トレーナーだね！」
「初対面じゃないぞ、ヒーローショーの怪人ハダアーレの中の人だ。あと君のトレーナーではない、木原先生とよべ」
「あのすごい演技もトレーナーがしてたんだ！すご～い！」

何だこの子!?距離感バグってんのか!?ルドルフの元トレーナーって言った途端、態度変えて、あれか結構相手を選ぶタイプの子だったのか!?
そもそも俺の話聞かないし、若干ボケてはぐらかすようにしてんのに全スルーだ！しかも全肯定してくるから怖い!!頭イカれてんのかこの子!?

危ない危ない、この子のペースに乗せられるところだった。おそらく強いウマ娘が持つ独特な特徴をこの子も持っているんだろう。
そう！サイレンススズカの左回り！シンボリルドルフのジョーク！オグリのウマ娘でも桁違いの大食い！
彼女の武器はこのイカれた距離感だ!!

「よ～し、二人共とりあえず、準備運動からやり直すぞ～」

そうして、我々三人は準備運動を始め……

何だあのからだのやわらかさは!!??
ヤバいってなんか見ていて不安になるくらい柔らかい!?
肩を通して後ろ手で手を組めるとかそんなレベルじゃなくて、肘が当たりそうになってるだと!?
「トレーナー、ナニ、ボーットシテルノ？」
「あ、あぁ、そうだな、プールで泳ぐのに一番重要なのは準備運動だよな！」

馬鹿な!!!
ウマ娘の武器は一人一つの筈だ。

トレーナーは混乱しています
ルドルフをジョークで相手の調子を下げさせるだけの子だと思っています。

あとなんで時々半角で喋るんだ！何だこいつ！駄目だ私には何もわからない……
非力な私を許してくれ……

「……！っ、大丈夫か!!トレーナー！」
「……！大丈夫だ、オグリ私は大丈夫だ。」
「トレーナーダイジョウブ？ムリハイケナイヨ！」
「トレーナーがいきなり……なにもない所を見つめて顔を水に三十秒程入れたままだったんだ。」
そんなに俺はショックを受けていたのか、
「……気を取り直して水泳練習するぞ！おー！。」
【【おー！】】
かくして水泳練習は始まった。オグリはまともに泳げないから、夏合宿にも備えて泳げるようにしておきたい。
「……トレーナー少し泳ぎ方が変だと思うんだ。」

「なーに、最初のうちはきれいに泳げないものさ、変になったら俺が直してやるさ。」
「そうじゃなくて、トレーナーのクロールがおかしいんだ。」
「えっ」
「平泳ぎの方が早いし全く息が吸えてないようにも見えるし、私より変なフォームだと思うんだ。」
「ハハ、オイオイ何を言っているんだいオグリン。テイオーもなんか言ってやれよ。」
「ゴメントレーナー、トレーナーノクロールハカナリヘンダヨ」
「えっ」
「正直に言うとクロールと思えないほど遅いんだ。トレーナーが泳ぐ平泳ぎは速いのにね。」

さっきまで全肯定だったのにそこまで言うのこの子、最近の若い子が全然わからない、クールにあしらうか。
「オグリ先輩といっしょにクロールで泳いでみるとよくわかるよ。」
「そこまで言うならやってやろうじゃないか！」

私は惨敗した。これまで全く泳げなくて練習して１０ｍようやく泳げるようになったオグリに負けた。
平泳ぎは普通らしい、平泳ぎが速ければ開き直れれるので、テイオーと２５ｍで競争した。

惨敗した。私が１５ｍの所でテイオーはすでにゴールにいた。
俺なんであんなに偉そうだったんだろう。よく考えたら小学校の頃低学年用のプールに俺クラスの中で最後の一人まで高学年用のプールに入れなかったじゃん、
テイオーによく見てみたら平泳ぎもなんかバタフライみたいって言われた、死体蹴りまで食らってしまった。

そういえば昔ルドルフが合宿中にトレーニングの日以外に休みを作ったら、一緒に遊ぼうって言ってきて遊んだけどビーチバレーや城を作ったりしたけど一向に海に近寄らなかったのは俺に気を使っていたんだろう。なんだろう本当にルドルフ俺にはもったいないくらいいい子だったんだなぁ、一瞬結婚したいとか考えてしまった、俺メンタルクソ雑魚だったのかぁ、

てか、ウマ娘の体力は俺たちヒト息子と比べると違いすぎる。本当に同じ人間なのか、不安になる、しかも頭の良さも俺たちと変わらないから、ウマ娘が世界征服とか考えたら、世界滅亡が間違いなく近づくだろう。

武田ウマ娘隊が戦国時代鉄砲が現れるまで最強って呼ばれていたのはもう覆されることはないだろうな。

よし、適当なことを考えたら楽になれたぞ、夏合宿までにテイオーに勝つ、オグリにまた尊敬されるようになろう。

その時、ふと閃いた！

このアイディアは、オグリキャップとのトレーニングに活かせるかもしれない！

オグリキャップの成長につながった！

スタミナが5上がった

根性が5上がった

どこ吹く風のコツのレベルが1上がった

「オグリ!!」

「!?なんだトレーナー?」

「一旦休憩しよう！」

「私は全く疲れてないぞ。」

「もうそろそろお昼だし、プールは自分で気付かないが疲れが貯まるものだ。休むことが上手いやつは大成功するしな！」

「トレーナーがそう言うなら……そうする。」

「テイオーも一緒に休憩してご飯でも食べよう。」

「ウンワカッタヨ，トレーナー」

私の作戦はおにぎりでオグリに尊敬を思い出させる狙いもある。そして軽く豆知識を披露して、【トレーナーは何でも詳しいな、尊敬する♥】コレだ、完璧なプランだ！

「オグリ、おにぎりと炭酸抜きコーラとバナナだ。」
「……？トレーナーどうして炭酸抜きコーラなんだ？」
「これから泳ぐのにこの量は自殺行為だよ～」
「フッ、それはだな……」
???「ほう炭酸抜きコーラか…たいしたものだな」
顔の大きいウマ娘「私のデータによれば、炭酸を抜いたコーラは極めてエネルギー効率が高いらしく、レース直前に愛飲するランナーも多いらしい。」
「何でもいいけどこのあと泳ぐんだよ～」
胸と顔が大きいウマ娘「それに大量のおにぎりにバナナ」
私の見せ場をぶっ壊したウマ娘「これも即効性のエネルギー食だ。しかもおにぎりはオムライスおにぎり梅干しおにぎりや色々あって栄養バランスもいい」
完全詠唱するウマ娘「それにしても水泳という激しい運動の前にあれだけ補給できるのは驚異的な消化力というほかはない」

オグリ説明聞かず食べてんのかよ。
「お前は誰だ、後お前は何を言っている。」
俺の見せ場をこうもあっさり奪うとは何者だ。あとバ〇大好きだろ。俺もアニメ見たけど。
「これは失礼した。私はビワハヤヒデだ。」
「では、俺も名乗ろう、木原正樹だ、その頭は飾りではないようだな。」
「誰の頭が大きいって！」
「オイオイオイ、俺は頭は飾りではないなと言ったんだ、大きさには一切触れてないぞ。」

よし、1枚上手を取ったぞ!!

その時、ふと閃いた！
このアイディアは、オグリキャップとの
トレーニングに活かせるかもしれない！
オグリキャップの成長につながった！
トリックのコツのレベルが3上がった

「ほっほひっふ～っ！　これか調子がいいとこうなる、だから、期待していてくれ！」
何だこの状況、最近疲れることが多すぎないか。
「よし、全員食べ終わったら泳ぐぞ。」
「後、ビワハヤヒデ、気に触るようなことを言って悪かったな、これからもよろしく頼む。」
ビワハヤヒデ「私からもよろしく頼む。」
こうして練習に戻った、オグリは結局２５ｍは泳げなかったので、合宿もビート板は手放せなさそうだ、浅瀬で有効的なトレーニングも調べておこう。
テイオーはかなり興味深い子だから、ルドルフにも聞いておこう。
ビワハヤヒデは頭もキレがある子だ。
「今私の頭について考えていたな」
なんで俺の思考が読めるんだよ。
このあとごまかすために俺は１７アイスを全員に奢った。
途中でやってきた、ナリタブライアンも遠慮していたがビワハヤヒデに言われて食べた。ちょろそう。
ＮＨＫマイルカップに向けてオグリの調整も仕上げに入らないとな、マイルは元々オグリの主戦場だから問題ないだろうからスタミナをつけるのと準備のために水泳を選んだがまぁ大丈夫だろう。

芦毛の決意

ＮＨＫマイルカップ当日

さて今日は喫茶店にでも行って心を落ち着けてからオグリの控室に行こう。

喫茶店

休みだと!?定休日は水曜日で今日はもちろん日曜日だから開いている筈なんだが……

張り紙があるが……ペットの犬が脱走したから探すので休みます。ワンちゃんの名前はケンジロウ、ゴールデンレトリバーで赤い首輪の犬、あだ名はケンちゃんか

これは仕方ないな。そういえば花を見に行こうと思っていたし公園にでも行こう。パンとか売ってる自販機もあるし、そこでご飯も食べよう。

公園

いたぞケンちゃん、なんか花壇の花食べてる、しかし6月じゃなくてよかったな、6月は私の好きなアジサイが植えてあるから食べてしまうと、毒で死んでしまうかもしれないからな、捕まえるか。

一時間後

商店街

「ぜぇ～ぜぇ～」

元気で商店街のアイドルなウマ娘「あっ！大丈夫？木原さん！」

「はぁはぁ……ウララちゃんじゃないか、商店街のお手伝いかい、立派だね。」

ハルウララ「木原さん、そんなに息を切らして走ってどうしたの？」

「さっきワンちゃんが走って行っただろう。あの子は実は脱走犬でね、行きつけの喫茶店のワンちゃんだから捕まえようと思ったけど速

すぎて捕まえられないんだ。」
「じゃあ私に任せて！ワタシウマ娘だからとっても足が速いから、すぐに捕まえられるよ！」
「お手伝いしてるんだろう？ウララちゃんはお手伝いしてて俺一人で充分さ。」
「おじさんと約束したから、手伝えない、でも木原さんはとっても困ってるどうしよ～」ヘナヘナ

八百屋のおじさん「あんちゃんその様子じゃ無理だろ、ウララちゃん、ウララちゃんのおかげでニンジンもう殆ど残ってないから、おにいさんのお手伝いしてあげてくれないかい。」
「おじさんありがとう！木原さんワンちゃんどっちに行ったの？」
「オヤジさん今度、人参たくさん買うぜ、ウララちゃん、ワンちゃんはこっちの道に行ったから一緒に追いかけよう。」

結果はケンちゃんを無事捕まえることができた、そして俺はうまいコーヒーとサンドイッチ、ウララちゃんは美味しいパフェにありつけた訳だ。
人助けして食う飯はうまい。

東京レース場

オグリは調子がかなり良さそうだ。
毎日【ほっほひっふー！】と言っている、正直かわいい、いやそんなことよりオグリの調子を見に行こう。

プシュ～
「ほう、炭酸抜きコーラかたいしたものだな、」
「お前また、それやってんのかよ！」

「木原さん、実際にみたらこれは何度も言いたくならないか？」
「って、そっちの君は誰だ。」
アメリカンな女の子「ハ～イ、タイキシャトルデース。」
「ＷＯＷ!!トムの勝ちデース！」
「ワッツヨクワカリマセーン。」
「すまんな、最近ボケてない気がしたからな、ちなみに日本古来のギャグだ。」
トムの勝ちデースはもう若者は知らないのか!?、
そうかこれがジェネレーションギャップか（違います）
タイキシャトル……最強マイラーと言われているウマ娘だ。
強敵だ、マイル以下では彼女の独壇場だ、オグリ同様ダートでも強い、そして何より、
「貴方はオグリキャップのトレーナーさんデスカ、今日はヨロシクオネガイシマース。」
両手を広げてきた。なるほどかなりアメリカンというか、オープンな子だな、取り敢えず仲良くなるためにしっかりハグだ。
……
――――――なんて柔らかさだ！気持ちいい毎日これされたい、これをされる為に毎日挨拶しに行こうって下心しかない考えが浮かぶほど気持ちいい、ってあれなんだろう、背骨に力を感じて、痛ただ！やばいかなり痛い、さっき改めてウマ娘との体力差に気付いたのに、やばい背骨が砕ける、

ハッ！オグリが遠くの方にいる、アイコンタクトだ、この前教えたモールス信号のＳＯＳで伝えるんだ！
あれオグリがこっちを見たのに、見て見ぬふりだと、冷ややかな視線を送ったら楽屋に行った。浮気をしたけど、妻にバレてもなんとも思われない悲しい夫の気持ちになった。

俺はなぜ人を呼ぼうとしているんだ。自分でいえば万事解決じゃないか、というか、離れようとすれば空気を読んで離れてくれるだろ

う。
　手を上げて後ろに下がるこれだけで、離れてくれる、離れられない！なんてパワーだ、挨拶代わりに背骨砕きにきているのか!?
　無駄に体力を使いすぎた、頭がぼ～としてきた、
「トレーナーさん、ずいぶん長い間、ハグシマシタネ、コレで友達デース。」
　バタン!!
「大丈夫か！木原トレーナー！」
「あぁ、大丈夫だ、熱いハグだったよ、タイキシャトル。」
「Ｏｈ！アリガトウゴザイマース！友情の印にもう一回デース！」
「ギャーッ!?」
「照れなくても、いいんデスヨー」
「そっ、それじゃあ、今日はいいレースにしような。」
「ビワハヤヒデは、今日のレースに出るのか？」
「私は今日はデータを取りに来ただけでレースには出ない。」
「偵察とは抜け目ないな、そういえば君はまだデビューしていないんだったな、実力も伴っているがしていないとはずいぶん入念に計画を練っているようだしな。」
「私の計画が進行するのは来年を予定している、それまでは準備を進めるだけだ。」
　そう言ってビワハヤヒデとタイキシャトルと別れた。
　特筆すべき強敵、タイキシャトルの様子を見れたからオグリの様子を見に行こう。
　オグリの楽屋
　調子が少し悪くなったようだな、昨日までは（ほっほひっふー！）を言っていたが言わなくなってしまった。
「その、オグリ、機嫌を直してくれないか」
「……トレーナー、なんの事だ、私は見ての通り調子はバッチリだぞ。」
「ほっほひっふーて言わなくなったからてっきり調子が悪くなったんじゃないかと思ったんだ。」
「……トレーナー、あれはいつも言っている訳ではない」

「調子がいいときにふと、勝手に出てくるものなんだ。」
「確かにその通りだな、わざわざ言ってたらそれはもう口癖ではないしな。」
「オグリ今日は任せたぞ。」
「あぁ、任せてくれ、必ず勝ってみせる!」

そうして送り出した、オグリキャップはタイキシャトルに敗北した。最後の直線で伸びきれず2着だ。
俺はとても悔しい気持ちになった、オグリが勝てなかったのは俺のせいだ、やはりオグリは少し調子を落としていた。そしてフルパワーだとしても勝てたとは断言できないことそれが一番の悔しいと思う理由だ。
「流石中央だな、全力を出し尽くしたが負けてしまった。」
「オグリ……」
「トレーナー任せてくれ、次は必ず勝利する!」
「あぁ!そうだな次は必ず勝つぞ、このままだと俺たちはマイルが怖くて逃げた、臆病者にされてしまう。」
「ハウディ!キハラさんこのあとパーティーを開きますから、オグリと一緒に来ませんか〜」
背後から抱きつきながら、タイキシャトルが話してきた。
オグリの様子を視る、やはり少し機嫌が悪そうだ、そりゃそうだ、自分を倒した相手と教師が仲良くしてたら嫌な気持ちになるだろう、それに自分の先生が自分と同い年くらいの子に抱きつかれてニヤニヤしてたら気持ち悪いと思うだろう。
「オグリ、どうする?」
「トレーナーの好きにしてくれ」
「なんかトゲのある言い方だが、勝っても負けてもお祭り騒ぎだから

な、参加させてもらおう。」
　おっとオグリの顔色が少し良くなった。うまくいったようだ。
「今日のパーティーは賑やかにナリソウデース。」
「手土産でも買ってからそっちに合流するよ。」
「ワカリマシタ、今日は楽しいパーティーにシマショウ。」
「オグリそれじゃあ、二人で買い物でもしよう。」

ショッピングセンター
　レースの後に少しだけ、ショッピングをするとウマ娘は喜ぶ、これはルドルフの時に学んだことだ。普段は勝ったあとにしていたがこれはこれでいいだろう。気分転換は大切だしな。
　オグリが無言で手を握ってきた、オグリはかなり迷子になりやすいからな、少し強く握っている気がする、悔しかったんだろう、俺は後ろを振り向かず歩いていった。
　見慣れた小さな人影、いや、ウマ娘影を見つけた。
「タマモクロス久しぶりだな、元気にしていたか？」
「ウチは、オグリによくアンタの話をされてたから久しぶりの気はせえへんけどな。」
「そうか、所で、じっと立ち止まって何を見てるんだ？」
「ウチらの人形があるんや」
「……すごいな、話には聞いていたが……」
「以外に作りがしっかりしてるんや、原価いくらやろな」
「それに、タマやクリーク、会長のもある。」
「せやけど、一番売れとるのは、オグリのやけどな、みてみぃ、あと1つで売り切れや。」
「人気があるんだな」
「レースだけやなくて、大食い大会でも名を売っとるからな。」
「老若男女問わず、大人気ってわけや。」
「そんなのにも出てたのか。」
「まーこのオグリならウチも欲しいわ、本家と違って飯代もかからへんしな！」

「それに、なんや速そうな顔しとる、トレーナー、コイツも育ててみぃひん？」
「いいかもな。」
「え……」
「ははっ、せやろ？」
「っと、あかん、ウチ、イナリと待ちあわせしとったんや、」
「もう行くわ、ほなな～！」
タマモクロスは慌ただしく去っていたようだ。
「オグリキャップのぬいぐるみ買うか。」
「え!?な、なんでだ、これはただのぬいぐるみだぞ？」
「その……トレーナーがついても走らないんだぞ？」
「いや……止めるつもりはないが、
そうか……買うのか。」
オグリキャップは何やら落ち込んでいるように見える、オグリってこんなに面倒くさい子だったの!?
やめておくか、いや
「買うぞ。」
「……そうか……」
街中
少女「オグリキャップさんだ～！」
「おっとオグリ大事な大事なファン様だ、しっかりファンサービスをしてやれ」
そう言ってオグリキャップに俺はペンと色紙を渡した。
「……トレーナーこれは……」
「いざという時にいつも持ってるんだ。早くファンサービスをするんだ。」
ファンサービスとはファンに握手などをする事であって
希望を与えておいてそれを奪うことがファンサービスではない。
握手をしたあとにサインを書いて渡した。
「いつも応援ありがとう、これは私からの贈り物だ受け取ってくれ。」
少女「わ～！ありがとう、私一生大事にします！」

「お嬢ちゃん、お兄さんがこのみんな大好きオグリン人形もあげよう。」
少女「お兄さんありがとう！今日買いものに行ったけど売り切れてて買えなかったんだ。お兄さんオグリキャップさんの恋人？」
「なっ……」
「ハハ、違うよ、まぁ、俺はオグリキャップの相棒さ」
「それじゃあ元気でね、向こうでママが待ってるよ。」
少女「オグリキャップさん！今日は負けちゃったけど次は勝ってください！応援してます！」
俺はオグリと二人で手を振りながら少女を母親のところまで見送った。
「……トレーナー」
「なんだ？」
「あげて良かったのか、欲しかったんだろう？」
「確かに、タマの言う通り……
ぬいぐるみは飯代も掛からない。」
「いや、飯代は私だって自分で出すしトレーナーには負担はかけないが」
毎回奢ってるし、おにぎりは自腹で用意してるけどな
「だが、ぬいぐるみはフワフワもしているし、小さくてかわいい、これは勝てない。」
「さっきから、どうしたんだ、頼むからハッキリ言ってくれ。」
「……本物の方がいいと思う。
私はすごく速く走れるからな。」
ぬいぐるみに嫉妬しているだと……クソ、メチャクチャカワイイ、俺が勘違いしていたら確実にやられていた。
「ぬいぐるみでは無理だが……私ならトレーナーの期待に応えられると思う。」
「いや……必ず応えてみせる、ぬいぐるみよりも。」
「いいか、最初の質問への解答は俺には本物がいるからなだ、それにぬいぐるみは応援の形だ、君にはもうコチラにもファンがいる、笠松の

ようにな、ぬいぐるみは気持ちなんだ。君のことが好きで応援しているなら自然と欲しくなるものだ。」
「そしてそのうえで言うぞ、本物が1番だ。」
「うん、任せてくれ。トレーナーがいれば私は誰よりも強く速くなれる。」
「全力でトレーニングに取り組むぞ、どんなに厳しいものだろうとも。」
「私はぬいぐるみより丈夫だしな。これからも遠慮なく頼む！」
「当たり前だ、よろしく頼むぞ、今日はパーティーに参加するけどな。」

パーティー会場
すでに盛り上がっている。ビワハヤヒデとタイキシャトルが何故かダンスバトルをしている、ビワハヤヒデはすごくキレキレなダンスだ。何がとは言わんが揺れている
対するタイキシャトルはフリースタイルな自由でアクロバットを取り入れた、ダンスだ、何がとは言わんが、揺れている。
そして何故かいる、マルゼンスキー、お立ち台のうえでジュリアナ扇子をブンブンしている。
ライスシャワーがそれを見て目を輝かせている。
肉が食えると聞いて我慢できずに駆けつけたナリタブライアン「正樹ようやく来たか。モグモグ」
「あぁ、凄く盛り上がっているな、全員自由だな。」
「ＷＯＷ！キハラさん遅いデスヨー、すでにパーティーは大盛りあがりしてマース。」
うん、そうだな盛り上がってるな、あとビワハヤヒデはダンスバトルに負けたようだな。何が審査基準なんだ。
「大盛りあがりのところすまないが、タイキシャトルは次はどのレースに出る予定なんだ？」
「次は、安田記念に出るツモリです。年末はマイルＣＳに出る予定です。」
つまりリベンジのチャンスはあるわけだな、マイルＣＳは元々出走

予定だったしな、そこでリベンジしよう。
「トレーナー……安田記念に出るぞ。」
　なんだって!?オグリ日本ダービーにも出るんだぞそんなハードスケジュールさせるわけには行かない。仕方ない日本ダービーには出なくていいか。

「わかった、なら日本ダービーは出走やめるか。」
「日本ダービーにも出るぞ。」
「……オグリ、その意味がわかっているよな、かなり無茶なことだ。連続出走は体を壊してしまうかもしれない。」
「それでも、私は大丈夫だ。ぬいぐるみより丈夫だからな。」
　決意のこもった目で俺を見つめる。
「わかった、その代わり少しでも異変があれば出走は取りやめるからな。それにリベンジは早いほうがいい」

　さて、これが吉と出るか凶と出るか。

芦毛と時計

（ジリリリ）……

ハッ！夢か……今日はオグリキャップの大事なレース日。

早くレース場に向かわなくては…

さて今日は喫茶店でサンドイッチとコーヒーを食べてゆっくり落ち着いてから、オグリキャップの様子を見に行くこの予定だ。

閉まってるだと!?張り紙がある、なになに、ペットが脱走したので、探すので本日は休みます。

ペットの犬の名前はケンジロウ、ゴールデンレトリバーの赤い首輪、あだ名はケンちゃん。

これは仕方ないな…

何かがおかしい

馬鹿な、ここまで俺が見た夢と同じだ、だがそうなるとオグリは調子を落として負けてしまう。このまま同じというわけでもないだろう。ひとまず公園に向かおう。

公園

ケンちゃんがいた、花は食べてない。早めに動いたからか、これはどうやら正夢のようだったな、俺はこのまま追いかけた場合、ケンちゃんに一時間ほど逃げられて商店街にたどり着いて、ウララちゃんに手伝ってもらい捕まえることに成功する

商店街に向かおう。ウララちゃんに手伝ってもらおう。

商店街

ウララちゃんがいた、夢より人参が残っている、早めに来たからだろう。そうなると夢でのことだが約束通り人参をたくさん買おう。

「オヤジさん、人参をダンボール二箱分ほどくれ。」

八百屋のおじさん「あいよ!!しっかしすごい量だね、人参パーティでもするのかい？」
「木原さんニンジンパーティするの？ワタシも行きたーい！」
「それなら今日はタイキシャトルの所に行けばパーティをしてるからそこで、人参を食べよう。」
夢のとおりならタイキシャトルはレースの後にパーティをした筈だ。
「ウララちゃんお願いがあるんだけど、公園に脱走したワンちゃんがいるから一緒に捕まえてくれないかい？」
八百屋のおじさん「ウララちゃん、もう人参殆ど売れたからお手伝いはもういいよ。木原さんの手伝いをしてあげて。」
「おじさんありがとう！木原さん一緒に捕まえにレッツゴーだよ！」
ウララちゃんがすごく元気だ。1割増しほど元気な気がするな、よくわからないが夢より早く捕まえられるだろう。

公園
「おりゃー！」
「木原さーん見てみて、捕まえたよー！」
「さすがウララちゃん、立派なウマ娘だ。」
???「あら、木原トレーナー、ハルウララさん、おはようございます」
「たづなさんじゃないですか、学園の外で会うのはレースの話などを聞いていたとき以来ですね。」
たづなさん「あれから、2年経ちました、素晴らしいパートナーにまた出会えたようですね。また担当さんとのお話を聞かせてくださいね。」
「それならちょうどウララちゃんと喫茶店に行く予定ですから一緒に行きませんか？」
たづなさん「喜んで、それにどうやら、『時計』を使っているようですね。」
「『時計』？」
たづなさん「ふふっ、効果は今実感していることですよ。」

「繰り返していることに気づいているんですか？」
まさか、俺が気付いていないだけで何周もしているのか
たづなさん「安心してください、一回目です、残り2回は起きるでしょう。それにルドルフさんを担当していた時にも起きてましたよ。」
「なんだって!?」
緑の悪魔「貴方はそれをデジャヴだと思っていましたがルドルフさんの時には3回起きてました。起きると毎回ルドルフさんの調子が良くなっていました。ルドルフさんの喜ぶ行動を取っていたんでしょう。」
「木原さん、何の話をしてるの？」
「ウララちゃん、ワンちゃんを連れて喫茶店に行ってくれ、マスターが美味しいパフェを作ってくれるだろう。俺も後で向かう。」
おかしい、たづなさんから異様な気配を感じる。
緑の悪魔「確かに彼女たちには、聞かれると困る話ですね。レースの結果を納得の行くまでやり直すなんて。」
「たづなさん、貴方はいったい何者なんですか？」
緑の悪魔「ふふ、日本ウマ娘トレーニングセンター学園理事長秘書の駿川たづなです。」
ごまかしているのか、この人はそれとも他の意図があるのか。
「あと2回は起きるというのはどういうことですか？」
たづなさん「あなたが『時計』をもう持っていない場合二度と起きませんよ。」
「たづなさん俺は『時計』なんて物を持っていた覚えはありません。俺が持っている分かりやすい時計はこの腕に着けてある。G―SH○CK位です。」
たづなさん「気付いていないだけだと思いますよ。勝手に消費されるわけではないですし、全てのレースで使えるわけでもないです。」
たづなさん「これ以上話をしても無駄ですから、一緒に喫茶店に行きましょう。」

私はたづなさんと共に喫茶店に行った。

喫茶店に行くとマスターが開けてくれた。お礼でコーヒーとサンドイッチを作ってくれる。ここまで夢のとおりだ、たづなさんが居るのを除いて。

「たづなさんここに来たのは初めてですか？」

私はさっきのような話をする気にはなれなかった。恐怖であり未知であること、『時計』については忘れたほうが幸せだろう。

たづなさん「はい、初めてでとても楽しみです。」

にこやかに笑っている。さっきまでの姿は何だったんだ

俺が頼んだサンドイッチの具材はスクランブルエッグにレタスそして主役のベーコンを挟んだ、シンプルイズベストな物だ、マヨネーズなどソースなどは入ってなくて塩コショウのみだ。

たづなさんはホットドックだ、3個もある、朝から食べるんだな、脚もウマ娘に追いつくレベルで速いし、何者なんだ。食べるのも早いな、俺まだ半分も食べてないのにもう一つ食べ終わってる。ウララちゃんはパフェを食べ終わったのか、ワンちゃんをナデナデしている

ん、そういえば帽子を外したところを見たことがない。

「たづなさん、そういえばこの店、実は格式が高いので、帽子は脱がないといけないんですよ。」

たづなさん「えっ！そうなんですか、でもあまり脱ぎたくないんです……」

たづなさん「木原トレーナー。」

「なんでしょう。」

たづなさん「どう見ても貴方の服は、スマートカジュアルとかそういうものではないと思うんですが、」

今の服装を思い出してみた。

コートにダメージジーンズ、売れないバンドマンっぽい服装だ、いやバンドマンがそういうお店だめというわけでもないんだが、ダメー

ジジーンズはお断りされるだろう。
「正直にいうので一度帽子を外してくれませんか」
「嘘をつく人の云うことは聞きません。」
そう言って、たづなさんは少し機嫌を悪くした顔で横を向いた。カワイイ、しかし、どうして帽子を取ろうとしないのだろう……

ハッ！まさか、いやそんなバカな、
ゴールドシップが『内緒だけどお前にだけ教えてやるぜ』と言って実はたづなさんには角が生えていて、パワーアップしていると言っていた、力を出すためにはエネルギーを貯める必要があり、だからたくさん食べるんだろう……

ハッ！
帽子を外さないと言うことは耳を隠しているともとれる！
耳を出さない、特徴的な耳、ウマ娘！そう！たづなさんの正体はウマ娘だったんだよ!!
な、なんだってー!?
と言うだろう、ウララちゃんの驚く顔が目に浮かぶ私のこの完璧な推理の前には、フフフ、あとはたづなさん本人に実はウマ娘でしょうと聞いて裏取りをすれば完璧だ

ハッ！
だがゴールドシップはウマ娘の耳とシッポは着脱は可能になっていると言っていた、つまり俺が取るべき行動は！
「たづなさん『外す』までのあいだ目を瞑って待ってますから外してください。」

こういうと耳を外すところを見られない！恥ずかしい部分は見られないということで外してくれる。完璧なアイデアだ！
たづなさん「イヤです。」
心底嫌そうな目で私を見てくる。なんだろうこうも嫌がってると悪いことをしている気分になってくる、もう一回この目で見られたら心が壊れそうだからもうやめよう

たづなさん「木原さん今さっき『時計』を使いましたね、２回も使いました。」
「えっ」
「気づいて無いんですか？サンドイッチを見たらわかるかも知れません。」

……!??ばかな私のサンドイッチが食べる前の状態に戻っている、ウララちゃんがパフェの最後のひとくちを食べようとしている、そんなことがあるのか……
そうかこれが時計の力か、過去に戻り変えることで現在と未来を変えるそんな力か。
「たづなさん、この力があればどんなレースでも負けないと思いますよ。」
発動条件はわからないがうまく使えばオグリの敗北を無くす事ができる、素晴らしい力だ。
「もう使えないと思いますよ。ルドルフさんの時は３回使ったあとはもう使っていませんでした、」
えっ、勿体ないことしたな
「それに私は感知出来ますが、流石になんの為に巻き戻しているのかわかりません、ですが、トレーナーがやり直したいことといえばレースでしょう。」
そのとおりだ、俺はもう使えなくなったが、ん、もしかして他のトレーナーも使えるのか。
「もしかして他のトレーナーも使えるんですか？」

「使える人もいるかも知れませんが、そのときには貴方は感知できないでしょう。本来使った人しか気付けないものですから。それにあなたの夢はそんなものに頼って叶えるものじゃないはずです。」
「……忘れてください、実現できるようになるまで…少なくとも秋までは」
対策は無理か、仕方ない、俺はオグリを全力で鍛えるしかない。

さて、話も済んだ、食事も取った、負けない為に早めにレース場に行っておこう。
「たづなさん、今日はありがとうございます、マスターが奢ってくれるそうなので俺は帰りますね。」
「オグリキャップさんと二人で頑張ってくださいね。」
「ウララちゃんも今日はありがとう、おかげで色々うまく行きそうだ。」
「木原さんも元気でね、私も早く勝てるように頑張るぞー」

東京レース場
まずはコーラを自販機から無くしておく、こうすることで、イベント　炭酸抜きコーラを無くせる、こうすることでタイキシャトルに背骨を折られかけることもなくなる、ただ、このあとオグリの決意を固める為にも、レースのあともう一回遊びに行かないといけない、そして、前回の流れは敗北したが良い展開だった、再現する、タイキシャトルをパーティーに誘う、だが俺の家で準備はされていない、タイキシャトルはバッチリだろう、それを見越したうえで話誘いがえされる、これが一番良い流れだ、タマモクロスもいるだろうし、こうすると前回起きた、オグリキャップの成長とタイキシャトルへの勝利を両立できる。ゲームみたいに考えてるがタイムスリップをしたらこんな発想も出てくるようになるだろう。

おっとオグリが早めに現れた、

「……？トレーナー、その沢山あるコーラは何かに使うのか？」
「オグリ、調子は良さそうだな、このコーラはレースの邪魔になってしまうから、今のうちに排除している。」
「……？どうしてそのコーラが私のレースの邪魔になるんだ。」
「実はコーラってレース前に飲むと失格になる可能性があるんだ、カフェインが理由でな。」
「えっ。そうだったのか。」
「失格になるウマ娘が出ないように、コーラを排除しないといけない、これはやましいことではない。」
半分ウソでもあるが、オグリは俺を信頼している、問題はない、説明をしたあと、急いでコーラをオグリの控室に持っていった。

オグリの控室に行き、オグリと少しのあいだ話をした、
オグリの調子は前回と変わっていない気がするな、俺がタイキシャトルに背骨を砕かれかけるまで、最高をキープしていたんだろう。流石だ。

オグリが立ち上がった、どうやら移動するらしい。
おそらく前回このタイミングでオグリが動き出し、タイキシャトルとハグをしている俺を発見する流れになったんだろう。オグリについて行こう。
「その…トレーナー…お手洗いに行きたいんだ。」
「ああ、口に出させてすまない……」
「その…案内してほしいんだ。」
「……そういうことか、わかったトイレまで案内する」

ん、待てよ、この行動は俺の行動ではどうにでもならないオグリの生理活動だ。
もしかして前回のオグリって漏らしたの、嘘だろ、いやいやいやいや、そんな訳はない。だがオグリの方向音痴はただの方向音痴とは格が違う。あり得るなというかそれで調子下がった可能性があるので

は、あれくらいの年の女の子が漏らすってやばいだろ、大事件だろ、漏らしてないことを祈りたい。
他のウマ娘の偵察や対策よりオグリの面倒を見て強くなってもらう方がいいんだろう。

オグリをトイレに案内したあと
タイキシャトルとビワハヤヒデが話をしているようだ、彼女らの会話は炭酸抜きコーラ無しでも始まるようだ、
取り敢えず話しかけよう。
「ハローエヴリワン、マイネームイズキハラマサキコレカラヨロシク。」
「タイキシャトルデース。ヨロシクオネガイシマース」
「あと日本語で大丈夫デース。日本語は大体分かりマース。」
「木原トレーナー、少し文章がおかしいぞ。」
「伝われば、問題ナッシングと言うからな。」
「二人は盛り上がっていたが何の話をしていたんだ？」
「タイキがパーティーを開くと言うんだ、私もそれに誘われてな。」
「キハラさんもパーティーに来ませんか？」
理想の流れだ。問題なし参加一択だ。
「わかったオグリと、話して決めるよ。たぶん参加すると思うが。」
そう言って俺は手を前に出した。そうこれこそが誘いハグを防ぐ手段、予めを手を出しておいて握手にするだ！
フハハハ！完璧な策とはこの事だ。
そうだ、さぁ、手を握って握手だ。

うん、普通に握手が終わった、頭に一瞬握撃が浮かんだが、あれは人間業じゃない、ウマ娘でもできない。

「楽しいレースにしよう」
「勿論です、でも勝つのはワタシです。」

オグリが出てきたようだ、一緒に控室に向かおう。
控室で言った
「ほっほひっふー!トレーナー今日は必ず勝ってみせるぞ、任せてくれ。」
やっぱり調子がいいときに言うんじゃないか。
「頑張れよ。」そう言って俺は、オグリキャップがターフに向かうのを見守った。

結果は、1着だった。『時計』の力は偉大なようだ、レース結果まで変えれることがはっきり確認できた。

タイキシャトルは2着だ、だがこれで本当に良かったのだろうか、ウイニングライブのセンターはオグリキャップになっていた、夢の中で観たウイニングライブはタイキシャトルがセンターだった、オグリキャップが楽しそうにライブをしている、だがこの結果は正しい結果と言えるのだろうか?
炭酸抜きコーラを消し去り、一時間ほど早く終わらせた脱走犬探し、そしてオグリキャップの勝利、私は取り返しのつかないことをしてしまったのだと思う。私はオグリの純粋な笑顔を穢してしまった。彼女を褒め称えることができるのか、私は、楽をできたのかもしれない、だが私は彼女を勝たせるために、彼女の未来を穢してしまった、どれだけオグリキャップが輝かしい戦績を残しても私の心の中には『時計』を使い、勝負の世界を侮辱した、その『毒』が私に纏わり付く。

気づいたらライブは終了していた。
オグリが話しかけてきた。
「トレーナー!見ててくれたか?」

「もちろんだ、次もセンターで踊ろうな。」
私はもう『時計』を使えない、手段を選ばずオグリを勝利させる、それすらも取りづらくなった。

「トレーナー！今日はどこに行くんだ。」
ご飯を期待しているんだろう。
「タイキシャトルの所でパーティーだが、その前にショッピングセンターに行こう」

ショッピングセンター
前回は負けたあとに来ていたが、本来は勝った後に来ようとしていた。
オグリは手を握ってくる、とても優しく握っている、喜んでいるのが見なくともわかる。

前回と同じ場所にタマモクロスがいた。前回同様挨拶だ
「やあ、元気にしていたかタマモクロス。」
そうして始まった会話は前回とほぼ同じ内容だ。
タマモクロスにいろんな人形があるが一番人気はオグリン人形だと、伝えられ残り一つだと伝えられる。それを伝えた後にタマモクロスは立ち去った。
私はそれを買った、オグリが少し悲しそうになっている
そしてその後、パーティー用にみやげを用意してタイキシャトルのパーティー会場に向かった。

そしてオグリキャップのファンの少女に出会った。

オグリキャップに色紙とペンを渡しサインを書かせた。
少女はオグリキャップが勝利したことによってか、前回より喜んでいるように見える。

少女は買えなかったようだが、ぬいぐるみを買いに行くとき前回より、早めに買いに行ったおかげで、間に合った、勝利するとたくさん売れるようだ、

少女の笑顔は私の心に傷を与える。胸を張れる勝負ではないはずだからだ、そして私は少女にオグリの相棒、と答えた、相棒を欺いているのだ。さらにファンまでも欺いているのだ。もう後戻りはできない。

私は決心する、このことを人に伝えることはないだろう
たづなさんは知っているだが、この心の毒は私の中だけに留めておく、オグリキャップは被害者、タイキシャトルも被害者である、出走したウマ娘全てが被害者であり、その加害者は私だ、未来は変えるのではない、穢す物だ
勝負は1度きりだから素晴らしいのだろう、これは心を腐らす毒なのだろう。
この毒は私だけが持つべきものだ、この気持ちは私だけが持つべきものだ。『時計』の力は使ってはいけないものだ。

「オグリ、パーティに行くぞ。」

パーティは前回の面々に加えハルウララが加わっていた
タイキシャトルがこう言ってきた。
「オグリ～！次に出走予定のレースは何ですか？」
「日本ダービーと安田記念だ。」もぐもぐ
「なら、私は安田記念に出走シマス。そこでリベンジデス。」
「オグリ安田記念に出る予定は無かったんだが、」
「トレーナー、今日あの女の子のおかげで応援されていることに気がつけた。レースに沢山出走したい。」
「連続出走は体に悪いんだがその様子だと、やめる気はないようだ

な。」
「わかった、精一杯サポートしよう。」
「ありがとう、トレーナー！」
「それではオグリにキハラさん、首を長くして待っていてください！」
「それを言うなら、首を洗って待っていろ。だけどな」

前に進むしかない筈だ、『時計』を使う者も現れるかもしれない、『時計』を使っての勝利は絶対にさせてはいけない、そしてオグリを必ず最高のウマ娘にしてみせる

芦毛のダービー

時計を使ってレースに勝利してから6日ほどたった、私は時計についてたづなさんに説明されたこと以外なにも知らない、あの一日を何度もループするんじゃないかと恐れていたが、そんなことは無さそうだ。そんなシリアスなことを考えながら今日はオグリキャップを家に呼んでおにぎりを作っている。

「やっぱり、難しいなどう作ってもトレーナーのおにぎりの味にならない」

軽くつまみ食いをしながらそういう

「難しく考えるものじゃないさ、適当に、心を込めて作ればうまくなるおにぎりってそんなもんさ」

だがおにぎりは奥が深い、料理番組で一見そんなもん流す必要なさそうだが、塩むすびを作るのをプロの料理人が作っているのを15分間放送したことがあった、あれは驚いた、

「トレーナーちゃんと綺麗に掃除もしてるんだな。」

「それに関しては、掃除が好きな知り合いがいるんでな、『キサマにはたっぷり重曹を味あわせてやろう』とかそんなことを言いながら掃除する変なやつだ。」

あれからエアグルーヴがルドルフとたまにやってきて掃除をするようになった。よっぽどエアグルーヴはメンタルをやられているようだ。

それにトレーナーをまた頻繁に変えているようだしそろそろしっかりした、相棒を捕まえてほしい、まぁ、生徒会活動とレースの両立に付き合ってくれるトレーナーがあまりいないのだろう。ルドルフといっしょにやってた時も生徒会活動はどうしても負担になっていたしな、負担だけにならずウマ娘の成長に役立つわけでもあるんだがそこを考えるトレーナーが少ないんだろう、これを考えれるやつは少しゲスなやつだしな。

「オグリそろそろおにぎりが百個を超えそうだからそろそろ作るのをやめて一緒に食べよう。」

「……トレーナー、おにぎりは外で食べよう。」
「そうだな、外は晴れてるし、まだ十二時にもなってないからな、ピクニックには丁度いいだろう。」
　オグリは連続出走を決めているため、あまりトレーニングはしないほうがいいと判断して、ここ3日は軽めのトレーニングをそして今日は完全な休みだ、元々土日は自由にしてくれって言うのが俺の方針なんだが、今日は元々無理矢理なにもするなと言っていた。そう言うとおにぎりを作っている様子を見せてくれと言われた。たびたびおにぎりを作っている様子を見せてくれと言われていたのでこの機会に見せておこうと思い朝からオグリを迎えに行って、おにぎりを作っていた、オグリはおにぎりの出来に納得していないが米も尽きるし、ピクニックにでも行こうと思う。
　大きめのバックパックにおにぎりを詰めた、量が多すぎて入り切らない、普段５０個は入っているが、流石に１００個は入らない、半分は冷凍庫に入れて保存しとこう
「オグリ、おにぎりは６０個ほど持って行くから、４０個は保存しとくぞ。」
「……保存するおにぎりはトレーナーが食べてくれ、今日は二人で作ったおにぎりを食べよう。」

　普段ピクニックは山登りをして山頂で美味しく弁当を食べるタイプだが、オグリにきつい運動をさせないつもりだから山登りはしない、なので公園にやってきた。

公園

1時頃
ウマ娘が居た。子供を引き連れてこっちにやってきた。
ハジケリストなウマ娘『おっ、あそこに怪人がいるぞ！お前ら捕まえたやつには褒美を取らせるから捕まえてこい！』

子どもたちに捕まる、……

「ゴールドシップ何をしてるんだ、子どもたちと遊んでいるのか？」

「よーし、お前らよくやった！お前たちにはこの男をくすぐりの刑にする褒美を与えてやる！存分にくすぐれ！」

オグリが公園のベンチで俺たちの様子を見ている。多分遊んでいると思っているんだろう。実際には遊ばれているんだが、

子どもたち「ハハ、それそれー！」

こちょこちょしてきた

「あっはっはははは！はははは！ちょ、やめて笑い死ぬから。」

子どもたち「このお兄ちゃんこちょこちょに弱いぞ、みんなもっとしよー」

子供に5分ほどこちょこちょされた。

「さあ、これでエデンについて話すつもりになっただろう！」

「エデン……何だそれ。あとたづなさんに生えている角は何なんだ？」

「何いってんだ人間に角が生えてる訳ねえだろ。」

「えっ、ちょっとまって、昔言ってた耳と尻尾は着脱可能って言う話も嘘なのか。」

「オイオイ、ゴルシちゃんが嘘つくわけ無いだろお前トレーナーなのにウマ娘も信じれないのかよ、やっぱトレーナーは全身緑で歯がむき出しのやつだよな。」

「そんなトレーナーがいるわけ無いだろ!!何だガチ〇ピンか！そいつは!!」

「それよりお前なれたのか？立派なマグロ漁師に」

「俺の目標は最高のトレーナーだ!!マグロ漁師じゃない!!」

「そうか！なれたんだな立派なカニ漁師に、お前がロシアのカニ漁船に乗るって言ったときには今生の別れだと思ったがまたあえて嬉しいぜ！」

まずい会話にならない、オグリも待ってるしここは、話しに乗って会話をぶった切りにいくぞ。

「俺もカニ漁師になれて本当に嬉しいよ、ゴールドシップは元気にし

ていたか？」
「何いってんだ？お前はトレーナーだろ、どうした頭がぼ～としてるのか？」
　いきなり冷静になるんじゃない！ようやく狂気に合わせられると思ってたら一気に突き放された気分だ。
　勢いで話を誤魔化すしかない！
「フッフッフ、エデンへの行き方は今行われている、トウィンクルシリーズのＵＲＡファイナルズに勝利するとわかる。」
「君は、これからレースに勝つしかないのだよ。」
「全ては、エデンの名のもとに……」
　イケたか！イケてくれ！結構恥ずかしいからな！
「チクショー！テメーらの掌の中って訳か、だがゴルシちゃんはそんなもんに負けねー！」

「絶対お前らより先にエデンにたどり着いてみせるぜ！」
　良かったお気にめしたようだ、ゴールドシップは子どもたちを引き連れてどこかに遊びに行ったようだ。
　座っているオグリに話しかけに行く。
「トレーナー、さっきは楽しそうにしていたな。」
「子どもたちの相手だけならまだいいんだが、ゴールドシップの相手までするとと疲れる。」

　オグリと共に景色を楽しむ、花が綺麗に咲いている。エアグルーヴの趣味が花を育てることだと聞いていたが俺は見るだけで十分だろう、それだけで心があたたまる。
「オグリこうしていると心が休まるだろう。」
「トレーナー、私達はこれで大丈夫なんだろうか？」
　しばらくトレーニングが緩めでいるから、少し不安になっているのだろう
「オグリ君は連続出走をする予定だからな、あまり運動をするのは良くないと考えて、しばらく控えめのトレーニングのほうがいいんだ。」

「それに君はめちゃくちゃ強いからな。少し休んでも問題ない、タイトルが全てを物語っているからな。」
「……タイトル？なんのことだ？」
　やばいな、ゴールドシップと話したから変なことを言ってしまった。
「気にするな、そんな時は空を見るといい。不安になったときに考えをまとめる時は空を見るといい」
「空か……」
　オグリキャップが空を見上げている、俺も考える時は空を見上げている、夜空の時もあるし、雨空の時もある。
　今日は綺麗な晴れ模様だ、こういうときに空を見上げるのは心の余裕につながる。
　じ～と空を見ている。
「何を考えているんだ。」
　改めて口に出ると違うものが出るはずだ、そしてその言葉は最初より核心をつく。
「故郷のことを考えていた
　みんなは元気にしているだろうか……。」
「ん……あの雲の形、
　どこかシゲさんに似ているな。」
　そうか故郷の人たちに、自分の活躍が伝わっているか気になっているんだな。ぬいぐるみが沢山売れてファンもできたが、頑張ってきて故郷が恋しくなったんだろう。
「あっちは、トメさんで……
　向こうは……どて煮。はあ……。」
　なぜどて煮？てか、ホームシックになってないか？日本ダービーのレースは明日だよな、やばいどうしてレース前に限って調子を落とすんだよ……
　よしオグリの調子を上げる為に動き回ろう！

「オグリ、おにぎりは食べ終わったな！」
「……ああ！トレーナーおにぎりはちゃんと食べ終わったぞ。」
「少し公園の中を見て回ろう。」
フッフッフ、私はオグリが公園でかわいがっている、猫のハツラツが居るのを知っている。故郷のトメさんの猫である、ハツラツのような元気な猫は今のオグリのホームシックを治すのに最もいい存在と言える。
そして呼び出す為に、私の胸ポケットにはマタタビ、バックパックには、ねこじゃらしを入れてある。私に死角は無い。

そしてこの時間はすべり台の下で、陽の光を避けて寝転がっている。カワイイ

そしてオグリをハツラツが見える所に誘導する。これによりオグリは自分でハツラツを見つけたように錯覚し紹介してもふもふする。
「ん……、ハツラツそこにいるのはハツラツだな。そこは危ないからこっちに出てこい。」
「――――おっと！」
「出てこいとは言ったが、飛び掛かって来いとは言ってないぞ。」
「まったく……そういうヤンチャなところもトメさんが飼っていたハツラツにそっくりだ。」
「トレーナー、こいつはハツラツ。私の友達だ。」
よし、完璧な流れだ。
「そうか、友達か、かわいいやつだな。オグリちょうどねこじゃらしを持ってるからそれで遊んでやれ。」
「トレーナー、なんでねこじゃらしを持っているかわからないがありがとう、これでハツラツと遊ぶ。」
オグリがねこじゃらしで野良猫のハツラツと戯れている。カワイイ

「はは、ハツラツ楽しそうだな。」
ハツラツがニャーと鳴きながらねこじゃらしに猫パンチをしている、美少女と猫、素晴らしい構図だ。

2時間後
ずっとオグリがねこじゃらしでハツラツと遊んでいる。いくらなんでも飽きないのか？あと猫は気まぐれで飽きやすいんじゃなかったのか。
おっとハツラツがオグリをグルーミングしだした。それに対抗してオグリが
「グルーミングをしてくれるのか。
ふふ、お礼に撫でてやろう。」
「もふ、もふ……ハツラツは柔らかいな。
いつまでも撫でていられそうだ……。」
なにか不穏なことを言っている。

2時間後
「しまった、もうこんな時間か……！」
「トレーナー、何時間も付き合わせてしまってすまない。」
「あぁ……大丈夫だ。俺はちゃんと起きてるぞ。」

「ん?トレーナー大丈夫か?」
「あぁ気にするな。君が元気ならばそれでいい。」
「だが、予定していた、自主練習の時間がなくなってしまった。」
あれかえってオグリの調子が下がった気がする。
ならば
「オグリ、門限まで時間がまだあるから俺の家でご飯を食べないか?」
食事で元気を出させるしかない、おにぎりは食べ慣れているから元気を出さすことができない。他の料理で元気を出させるしかない
「わかった、今日は自主練習もやめて一緒にご飯を食べよう。」
よしこれで巻き返そう。

トレーナーの家
ポストによく見たら手紙が入っているなオグリキャップが帰ったら読もう。
そして私はオグリキャップが元気を出すようにあらゆることをした。食事を作り、カサマツ音頭を踊り、カワイイ猫動画を見せ、いろんな手段を使ったがあとひと押しが足りない気がした。
「トレーナー、今日は楽しかった。明日は絶対勝つ。楽しみにしていてくれ。」
まずい絶好調じゃないはずだ。あとひと押し何かが必要なはずだ。
だがオグリは帰ってしまった。
俺は仕方ないので手紙を見ることにした。
「これは……明日オグリに読ませなければ。」

ダービー当日
やばいゴールドシップがいる。捕まるとオグリに見せるものが見せれなくなってしまう。
となると少し遠回りになるが別のルートを取るしかない。
やばい楽屋が少し空いている。これは覗くしかない。

「こいつらうまぴょいしたんだ!!」
何故か、葵ちゃんと祥太朗くんがミークに謎の言葉を言われている、そういえばうまぴょい伝説のうまぴょいってなんなんだろうな。
祥太朗くんは忙しいなこの前はスーパークリークと赤ちゃんプレイをしていたが今度は葵ちゃんと遊んでいる。
固いやつだと思っていたが結構軟派だったのかもしれない。
さて遠回りはこれぐらいでオグリの部屋に行こう。

オグリの部屋
「トレーナー今日は必ず勝ってみせる任せてくれ。」
頼もしいがこれをみせないといけない
「オグリこれを見てくれ」
「……どうしたんだ、トレーナー?」
「……っ!トレーナーこれは。」
「そうだ、ファンレターだ、前の時にも言ったが君を応援している人がいる、これでもっと心に火がついただろう。」
「ああ!トレーナー、この手紙の差出人のためにも負けるわけにはいかない!」
そうしてオグリを私は送り出した。

実況「一番人気3枠6番オグリキャップ覇気を感じます。」
解説「私が一番期待しているウマ娘です、ぜひ頑張ってほしいです。」
実況「この評価は少し不満か?2番人気5枠9番ゴールドシップ」
実況「3番人気はこの子ハッピーミーク実力では負けていません」
実況「威風堂々とスタートを待ちます。」
実況「体制を整えて、いまゲートが開きました!スタートです。」

実況「ゴールドシップ少し出遅れたようだ、しかしこの子は後方からのワープするような末脚が魅力なウマ娘です、」
実況「ハッピーミークかなり飛ばしています。」
解説「少し、掛かっているかもしれません、一息つけると良いですが。」
実況「前から４番目はオグリキャップ、前を狙っています。」

レース終盤

実況「おっと！ここで伸びてきたのはゴールドシップ
バイトアルヒクマやトンネリングボイスを次々抜いていく、凄まじい末脚だ！」
実況「オグリキャップもここで仕掛けてきた！ハッピーミークに追いついた！」
実況「ハッピーミーク苦しいが粘っている。しかしここでオグリキャップとゴールドシップが抜け出した。」
実況「オグリキャップ　ゴールドシップ並んでいる凄まじいデッドヒートです。」
実況「このまま、並んでゴール!!わずかにゴールドシップが体制有利か!?」

……
実況「確定しました、一着オグリキャップ！皐月賞と日本ダービーを制し三冠ウマ娘に近づきました。」
解説「２着のゴールドシップも健闘しましたが、どうやらオグリキャップのほうが仕上がっていたようです。」

ということでオグリキャップは勝利した。
ちなみにファンレターの内容には天皇賞春を勝利した。タマモクロス以上の活躍を祈ってますとも書かれていた

次のレースは安田記念タイキシャトルとの再戦だ。今度こそ完璧な勝利を！
ところで祥太朗くんと今回のレースに出ていないタマモクロスとナリタタイシンが何故かガラガラを持ったスーパークリークに追いかけられていたがあれは何だったんだろう。

芦毛と勝負師

日本ダービーの次の日

「…トレーナー、少し顔色が悪いが大丈夫か？」

「心配させてすまないオグリ、朝変なものを飲んでな」

「本当に大丈夫なのか？保健室に行くか？」

オグリがとても心配している、俺の舌に合わないものを飲んでしまって気持ち悪くなってしまった、朝に作ってそのまま飲むんじゃなかった。

「大丈夫だ、しばらく経てば元気になるはずだ。」

「トレーナー…昨日のレースはどうだった？」

「いい勝ち方だったと思うぞ、ゴールドシップの追い上げがかなり怖かったがしっかり最後までスタミナがもって走りきれたから、問題ないはずだ。」

そうなるとダービーよりさらに短いマイルの安田記念はスタミナの強化は必要なさそうだ。さてそうなると今日の朝作ったこれの価値が本当になくなるなこの「牛乳コーラ」

「トレーナー…水筒を買ったのか？いつもはペットボトルのお茶を飲んでいたが。やっぱり中身はお茶か？」

「お茶ではない、栄養はバッチリだが、すこぶるまずい、学生の頃に友達と飲んだファミレスのドリンクバーの飲み物全部混ぜたやつの次にまずい、コーンスープとかコーラを混ぜたやつの次にだ、飲んだあと一日は体調を崩すこと間違いなしだ。」

ちなみにそのスープを飲んだやつは6人だがそのうち4人は次の日学校を休んだ、そして残りの二人俺ともうひとりの奴は休み時間に入るたびトイレにいった、半分食中毒だ。（お店に罪はありません、彼らは若くアホだったのです。）

その話をしたあと、オグリと体育館に移動する

ここで、トレセン学園のカリキュラムについて説明をしたいと思う、午前は普通の学校でも行われるような授業とレースについて勉強する、Ｇ１に出走するにはどうすればいいとかそんな感じだ、普通の

授業は一般の普通化高校より難しいが超難関の高校よりマシだ、俺は高校までしか行っていないが偏差値７２の高校で高成績だった、だが生徒のウマ娘達は午前の授業のみなのでテストを受けると普通に赤点になる生徒が多い、俺も午前の授業のみで母校のテストで赤点を取らないようにしろと言われても無理だと思う。
オグリはよくお腹がなりまくるので食堂に授業中に食べに行けと言われている、
トレセン学園は文武両道を目指すように言っている、あまりにも無視すると「粛清！　遺言を忘れずにな！」
と理事長に言われてしまう。
なのでオグリを運動させない為にも今日は勉強をすることにした、ちなみにあまりにも成績が悪いと夏合宿中に補習を受けることになる、夏合宿に集中させる為にも成績はあげておいたほうがいい。
まぁ、半分遊ぶんだけどな、俺は将棋盤とコマそれと眼鏡を持って体育館にはいった。
「トレーナー…それは何に使うんだ？」
「将棋をするんだ、そして形から入ろうと思いこの地球を代表する最強の将棋指し羽○さん眼鏡を用意した、これをかけてみてくれ。」
「トレーナー私の耳に掛けれるタイプじゃないから無理だからトレーナーがかけてくれ。」
忘れてた、ウマ娘の耳は頭の上の方にあるのに将棋界最強のヒトムスコの眼鏡を掛けれるわけがなかった、しかたないので、私が掛けてみた、
「トレーナー似合ってるな、つけると先生って感じが増すから毎日着けたほうがいいかもしれない。」
「ハハッ、そう言うなら今日試して評判が良かったら毎日つけるよ。」
そう言いながら、将棋の駒を並べた、ひとまずオグリに駒の動かし方を覚えてもらい適当に打った、私は接待プレイを嫌う男だ、当然初心者相手に矢倉を組んで盤石の体制で勝利を得た、２回線目はオグリは私の打ち方をみて学習したようで、見様見真似で矢倉を組んできた、しかし強みを完全に活かしきれず、飛車を取ってどんどん蹂躙し

た、3回目オグリが二歩をした、初心者では気づかないことだ、それを指摘したが続けた、途中で気付いたが俺は角がワープしていた、オグリには秘密だ。
　そんな感じでオグリと将棋を打っているとウマ娘が近寄ってきた。
　とってもギャンブラーなウマ娘「体育館の真ん中でヒリつく空気の中将棋とは面白そうなことをしてるな。」
「その声と、若干校則やぶり気味な服装のウマ娘といえばルドルフのチェス友達のナカヤマフェスタだな」
「フフ、私のことをよく覚えていたな、最後に会ったのはもう2年以上なのに。」
「俺もチェスをしてボコボコにされたからな、二回戦にチェスボクシングにして戦ったがチェスとボクシング両方でボコボコにされて完敗したからな。」
　ボクシングの方は4ラウンド目で俺のストレートに合わせた、クロスカウンターで倒されたがゴングに救われチェスに戻ったところ意識が朦朧としてマトモに打てなくなり敗北した。その時は大丈夫と伝えたがルドルフが看病すると言って俺の話を聞かなくなってしまったが、レースには勝てたので問題ない。いつかナカヤマフェスタにはリベンジしようと思っていた。ちょうどよい機会がやってきたようだ。
「木原さん、あたしとまた勝負してくれないか、あんたは己の勝負で決して油断をしない、だがスキを見つけだしぬくその気持ちを得るためにはアンタを倒すのが一番いい。将棋で勝負してくれ。」
「いや、その前にオグリに勝ってからだ、今一応授業中だからな、俺の目的はオグリの頭の回転を速くするためのトレーニングでもあるからな、オグリも良いな？」
「ああトレーナー、私に任せてくれ。」
　そういったオグリは善戦したと思ったがナカヤマフェスタの策にハマり敗北した。相変わらず勝負に強いなナカヤマフェスタ。
「オグリ君の仇は俺が討つ、将棋はチェスと違ってまだ自信があるからな、任せてくれ。」

「トレーナー……任せたぞ！」
「ナカヤマフェスタ、俺は今『牛乳コーラ』を持っている、敗北した方はこれを飲む、味は不味くて体調を一日崩すぐらいだ。これを３回勝負をして一回の敗北ごとに飲んでもらう。」
「イイねぇ、リスクが無ければ勝負は面白くない。あんたとは面白い勝負ができそうだよ。」
　そういったあと俺は将棋をした、一戦目は俺が勝利した
　オグリとの戦いを見てナカヤマフェスタの戦法を覚えたからだ。
「ナカヤマフェスタちゃんまずは一杯だ、紙コップがあるからそれに入れてあげよう。」ニッコリ
「二戦目は木原さんの勝ちだが、２戦目はわからない。楽しみにしていてくれ。」
　少し悔しそうな表情で牛乳コーラを飲んでいる、堪らない、ウマ娘の整った顔立ちが苦悶に歪むのがとても唆るだがこれは過程だ、勝負の後はナカヤマフェスタのお口直しにファミレスにでも連れて行ってあげよう。オグリも頭を使ってお腹を空いてるだろうし。
「ククク、随分と苦しそうだが味は堪能できたかな、君は後これを最低２回は飲むことになるからねぇ。」
　その後私は二杯の牛乳コーラを飲んで苦しんだ。

芦毛と皇帝と帝王とトレーナーのレース

私が牛乳コーラを飲んで苦しんですぐあとのことだ、オグリが私を心配しているが自業自得なのでしょうがない

「オグリ、ナカヤマフェスタは強かったな、やはり俺も得意な麻雀にすれば良かったか。」

「トレーナーはすごいぞ、一戦目は勝てたし次はわからないさ。」

そうしているとルドルフとテイオーが現れた。

「トレーナー君、何をしているんだい、それとその眼鏡とても似合ってるよ。」

「将棋をしていたところだ、ナカヤマフェスタにやられてしまってな。メガネは最強の将棋うち〇生さんぽいメガネを用意した。」

「実は生徒たちから体育館の真ん中で将棋をしている不審な人物がいるから、調べてほしいと頼まれてね、早速来たわけだが君たちだったんだな。」

「それにナカヤマフェスタと勝負をしたということはなにか賭けて勝負したんだろう?」

「あぁ、負けた方はこの『牛乳コーラ』を飲むという条件で勝負をして俺が敗北した。」

「トレーナーなら私とも勝負をしてくれないか?負けた方は勝った方の言うことを何でも聞くという条件で。」

「いいだろう、俺が勝てば暫くオグリのトレーニングに付き合ってもらおう。そして様々なことを融通してもらう。オグリもそれでいいな。」

「トレーナー……それは必要なことなのか?」

「ルドルフは経験豊富だし、導くのが得意なウマ娘だ、コーチとして素晴らしい存在だ。」

「わかった…トレーナーを信じよう。」

「ククク、トウカイテイオー君、今から君の尊敬する人が私に蹂躙されるところをしっかり見ておくといい。」

一時間後

完　全　敗　北

「カイチョー絶対勝つって信じてたよ！」
「バカな、敗北するとは……ルドルフは将棋に関しては素人のハズじゃ。」
「君と別れてから始めたんだ、最初は弱かったけど大会に出て優勝したこともあるんだ。」
　ガチ勢かよ！そら勝てるわけないな。
「フッ、すきな命令をするといい。」
　どうせルドルフのことだから、生徒会のお手伝いとかそんな感じだろう。
「このあと、一緒に遊んで欲しいんだ。」
　そっち系か、珍しいな。いや
「ハハーン、さてはデートのお誘いだな、全くいつまで経ってもトレーナー離れができないんだから♡今日は一緒にいて、ア　ゲ　ル♥」
「……！トレーナー本当に大丈夫か！牛乳コーラの飲みすぎで頭がおかしくなったのか!?」

「……ハッ！俺は一体何を言っていたんだ。」
「君がそんなふうになったのを見たのは初めてだよ。」
「体調が悪いのなら他の日でも構わないが……？」
「いや大丈夫だ、オグリとテイオーも来るか？」
「私もトレーナーが心配だから一緒に行こう。」

「僕もカイチョーと遊びたいから一緒に行くよ！」
「ルドルフもそれで構わないな？」
「もちろんいいとも、今日は楽しい日にしよう。」

ルドルフの考え

本当は正木君とふたりきりでデートに行く予定だったが、ここはオグリキャップに対する牽制として見せつけようテイオーはまだ恋を知らない、敵ですらない、ここで彼と仲良くなることで私の元に帰りたくなってもらうのが私の作戦の一つだ。もう一つは有馬記念でオグリを倒し目標を達成させずコンビを解消させ私と再び組んでもらう作戦だ、こちらは出来れば行いたくない、少なくとも2年間はしたくない。このデートこれでは特別感がないどうすればいいものか、

ハッ！そうかこうすればよかったんだ。

「トレーナー！すまないが私は一旦寮に戻って着替えてくるから車を回して待っていてほしい。」

そう言ってルドルフが猛スピードで寮にいった。

「オグリとテイオーも着替えてきてくれ。俺は車を用意してくる。」
「トレーナー、気をつけて安全運転を頼んだぞ。」

オグリとテイオーはそう言って寮に向かった。

ゲームセンター

「トレーナーとカイチョー、メガネがお揃いでとても似合ってるよ！」

そういえば羽〇さんメガネをつけたままだった。

「このメガネは強者や皇帝にふさわしいメガネなんだ」
「何度も敗北している、俺にはもうつける資格はない。」

そう言ってメガネに手をかけたがルドルフが止めた。

「トレーナー、今日は勝者の命令に従って貰うよ、一日中メガネをつけていてくれ。」
「トレーナー、やっぱりメガネは似合ってるようだ。みんな外せなんて言わないしな。」

負けまくってるのに今日はいろんな人が優しい。
「そんなことより、今日は…」
キタちゃん「お小遣い全部使ったけど、一つも取れなかったね……」
ダイヤちゃん「クレーンゲーム難しいね……」
「目的変更だ、クレーンゲームでテイオーとマックイーンの新しいぬいぐるみを取るぞ。」
「もちろんいいとも、私達の後輩になる子たちだ、助けておいて損はないはずさ。」
帰る前に早速話しかける。
「やあ、キタちゃん、ダイヤちゃんお兄さんが二人のぬいぐるみを取ってあげよう。」
キタちゃん「あの～失礼ですがどちら様ですか？」
ダイヤちゃん「キタちゃん、この人悪い人かもしれない。」
「テイオー出番だ。」
「この人は悪い人じゃないよ～」
そんなふうにテイオーに説明してもらっている間にクレーンゲームに向かう。
「しかし、トレセン学園もえげつない商売するよな。
クレーンゲームでしか取れない人形を置くことでこのように回収する。苦手な人はほんとに取れんからな」
「関係者に聞かれたらとても怒られるよ。」
そんなことを言いつつ５００円を投入する、このゲームセンターはクレーンゲームを５００円で６回遊べる、この６回で取れればすごくカッコいい。
「ルドルフは横に立って縦軸を見てくれ、オグリは俺とタイミングを測ってくれ。」
正直いって、縦軸を見てくれたらなんとかなるがオグリの機嫌が悪くなる可能性もあるから、オグリにも手伝ってもらおう。
トゥルルルートゥルルトゥルルルルー
よく見たら久しぶりに見たな、このＳＥＧ○のＵＦ○キャッチャー、しかもソ○ックのやつだ。

「トレーナー、今だ。」
「ＯＫ、わかった」
「トレーナー４０ｃｍ先の場所がいい位置だ。」

「ヨシ！バッチリ２つとも取れたな。」
「…想定外に５ゲーム余ったな、ふたりとももう大丈夫だから、人形を持っていってあげてくれ。」
二人に任せて、もっと取れるか試してみよう。しかしよくバッチリ取れたな、ここまで簡単なのは新しく開いたときのショッピングモールのゲーセン以来だ。

そんなこんなで子どもたちにあげる分をぬいて、６個も手に入った。袋があるからそれに入れて戻ろう。

「トレーナー……すごい量を取ったな。」
「いや、それがまだまだらしい、最高記録が３回で１５個らしいからな。デートだからこれはルドルフにプレゼントしておこう。」
「トレーナー君本当にいいんだね。生徒会室に飾っておくとしよう。」
ナリタブライアンがこの前そんなことをしたらしいが生徒会室が人形まみれにならないことを祈ろう。
「代わりに、俺が最もゲームセンターで得意なゲームで勝負してほしい。」
「フフ、皇帝は勝負を逃げるわけにはいけないからね、相手になろう。」
「オグリとテイオーも俺と戦ってもらうぞ。」
「トレーナー麻雀なら私は打てないぞ。」
「安心しろ、四人プレイできるゲームで一番楽しみやすいやつだ。」
「今なら、店員さんが３００円で作るカードを無料で作ってくれるらしいから、作りに行こう。」

準備は万端だ、さてここでアーケードゲームの仕組みを紹介しよう。今回遊ぶのは私の口から言うのはがっかりする人もいるかもし

れないが、マリ○カートアーケードグランプリＤＸだ、私はこのゲームを２００５年の初代版から遊んでいる。その時は小学生だった、ＤＸへのデータ移行が出来なかったが、完全新作だから仕方ない。このゲームはアーケードゲームでありレースゲームだ、

つまり、マシンスペックの差が存在する、僅かな差だが私が負けるどおりはない、そして私は、すべてのアイテムを集めカートもコンプリート済みだ。このゲームであれば経験も多い、何度も言おう負けるどおりがない。勝利することで、水泳では勝てないテイオーを倒し、オグリから尊敬されるのが狙いだ。

私のマシンのカスタムは

パイロット　ヨッシー　加速型

マシンウルトラボイジャー最高速と加速を強化海空◎

アイテム　ヘビーキノコ　トリプルゴールドバナナ　ファイアーボール

バランス型かつどんな局面でも戦える構成だ。

シンボリルドルフ

パイロット　ロゼッタ　最高速型

マシンギャラクシーコメット最高速とハンドリング強化

アイテム　不明

バカな、レアマシンを持っているだと、それなりに遊んだことがあるようだな

オグリキャップ

パイロット　キノピオ　ハンドリング型

マシン　マッシュラン　加速を強化

アイテム　不明

キノピオに合わせた構成だな。相手にはならない筈だ、初心者だから、動かしやすさでハンドリング型のようだ

トウカイテイオー

パイロット　どんちゃん　ハンドリング型

マシン　ドンドコドライブ　加速を強化

アイテム　不明
やはりルドルフが敵になるだろう、だがテイオーは何でもこなすタイプの人間だ、俺の妨害をしまくれば勝てると気づけばかなりまずくなる。

さてレース開始の準備が整った、走る前にこれを伝えて始めよう。
「負けた奴は、最後の牛乳コーラを飲んでもらうぞ！」
３人「えっ!?」
３　２　１　スタート
まずはスキをついてロケットスタートを決めながらスタート。このことは画面にでてくるが意識しないとできない、序盤の攻防は私が制した。今回のコースはピーチキャッスル目を瞑っていても走れるコースだ。
コーナーに入る前にドリフトを入れる、これがアーケードのマリオカー〇の最も重要な要素、加速方法が全く無いこのゲームにおいて、ドリフトターボは自発的な唯一の加速方法と言える。そしてアイテムボックスに触れる
ルドルフはドリフトを使っているため、やはり経験者だ
出てきたアイテムはファイアーボール丁度いいアイテムだ、このゲームの洗礼を受けてもらおう。
うしろからオグリ、テイオー、ルドルフと続いている、大方の予想通りだ、だがルドルフもアイテムボックスに触れる前、このタイミングでファイアーボールを後ろに投げる！
「なに!?」
「驚いただろう！アイテムボックスは透明度はそこまで高くない！それに被せる形で最適な位置、そう！走っているラインに目掛けて投げれば直撃する！」
「そしてファイアーボールは前と後ろ両方に投げられ壁に当たると反射して飛んでいくアイテム！相手のカートがどの位置につくか、どの角度で撃てばどう反射するかそれらが完璧に合わさることで前後を完璧に射撃できる究極のアイテムとなる！」

最も恐ろしい攻撃アイテムトゲコウラは初心者でも使えるため、飛んでくる可能性があるが、コインでの加速ではないため、マシンスペックにより一気に抜き返せる！

問題はない！

「フハハハハハッ！キタちゃんダイヤちゃん君たちはそこで尊敬する人々が圧倒的な速度で蹂躙されるのを見ているといい！」

「トレーナー、やっぱりテンションがおかしいぞ。」

オグリはファイアーボールを受けたルドルフを抜いてドリフトの差でテイオーを抜いてきていた。オグリのアイテムはＰＯＷブロック　この距離では届かない。

順番は代わって上からオグリ、テイオー、ルドルフ　再びコーナーに差し掛かる。今度はドリフトレベルを教えよう、ドリフトはコーナーをどれだけドリフト待機状態で走るかでターボの長さが変わる。レベルで表記される、そして私は当然毎回最高のレベル３のドリフトだ

当然アイテムが決まらなければ抜けない！

更に私の攻撃は炸裂する！完全有利の状況だ！負けるはずがない！

そして２つ目のアイテムボックスに到達する、オグリはアイテムを無駄撃ちするしかない、テイオーのアイテムはボム兵のようだ、ルドルフには当てない、これも無駄撃ちだ、

ルドルフのアイテムは不明だ、だが問題ない。

アイテムボックスに触れる、アイテムは……なるほどルドルフのアイテムはテレサだったようだ、一位の相手のアイテムを奪い透明化する、強力なアイテムだ、取られたアイテムは一瞬しか見えなかったが、ヘビーキノコ、このゲームの加速アイテムであり強化アイテムだ、スピードアップと高速ドリフトが可能になる。

順位が入れ替わったルドルフ、オグリ、テイオーの順番だ。オグリの２つ目のアイテムは巨大キノコだがヘビーキノコの加速には勝て

ない。テイオーのアイテムは　アカコウラためているようだ、
　ルドルフが透明化状態だが、私に近づいて来たのがわかる、ヘビーキノコのもう一つの効果、重くなることでカートにダメージを与えることができるそれを狙っているのだろう、これを避けることはできない。直撃する、
　カートがスピンしてスピードが落ち一旦停止する、
　その間に更に巨大化した、オグリが私を轢いていく、それが終わったあと、テイオーのアカコウラをくらう、
　踏んだり蹴ったり、泣きっ面に蜂だ。
　順位は代わり一気に最下位になった、
　だがまだ、第一周逆転はこのゲームの醍醐味だ、そしてこの状況はいい展開ともいえる、ルドルフのアイテムテレサは後ろにいることで効果を発揮する。
　私のアイテムはバランス型だが実際の使い方はすべて攻撃と妨害特化即ち後ろが最も強力な位置だ。
　楽しみにしていてくれ。

　長いのでダイジェスト
　ドリフト中のスキをついてテイオーにファイアーボールをぶつけ、ぬきさる、
　オグリにはドリフトでぬいたあとにゴールドバナナを当てて、一気に速度を落とさせる。
　最後のルドルフはコーナーでヘビーキノコを使用し、コーナーを制し一位をもぎ取った。
　順位は私、ルドルフ、テイオー、オグリの順番だ。
「トレーナー…その本当に飲まないといけないのか？」
　やばくないか、オグリの体調が悪くなったら安田記念に勝てなくなってしまう。え～とどうしよう。
「ええい！ままよ！」

私は牛乳コーラをがぶ飲みした、
「トレーナー！大丈夫か!?」
「トレーナー君、さっきの気分悪そうな様子はそれを飲んでなったんだろう、大丈夫なのか。」
「トレーナー！どうして飲んだの!?」
「…いやなんとなくわかるだろう、あと俺は君のトレーナーではないからね。」
「取り敢えず口直しで横にあるスーパーでジュースでも買いに行こう。」
キタちゃんががっかりしている。
スーパー
お嬢様のウマ娘「チョコが一番ですわ！ワッフルといえばこれですわ！種類いっぱいありますけどもこれだけあれば勝ちですわ！」
「マックイーン！こんなところで何してるの？」
「テイオー!? こっこれは、見なかったことにしてください！」
見てはいけないものをみたがダイヤちゃんの為にもマックイーンも連れて行こう。

そして再びレースを行った。今回は罰ゲームの代わりにオグリがシートを離れて、マックイーンが入った。

レースの結果
一位から順位、私、テイオー、マックイーン、ルドルフの順番だ、
「トレーナー今度は、私が飲まないといけないな。」
と言いつつ、私の手元から牛乳コーラを取ろうとする、こんなもんウマ娘に飲ましてはいけない！
私が一気にのんだ。
ルドルフの心のこえ
間接キスは無理なようだ。

キタちゃんが悔しがっている、テイオーがマックイーンに負けたのが悔しいようだ。
オグリは私を少し尊敬した目つきで見つめてくる。
ルドルフに頼む、服を買ってきてくれと、お金を渡すとルドルフはすべてを察した。
私はトイレに向かった、多目的トイレだ、
私の今の服装はカッターシャツに、スラックス、トイレに口から吐き出した。気分が悪い状態でレースゲームしかもカメラがぐるぐるする、吐き出すに決まっている。
しかも2回もだ！
『気分が悪くなったらすぐゲームを中止しましょう』

「めちゃくちゃ気分悪い、気持ち悪い、」
ノックが入る、どうやらルドルフが服を買ってきてくれたようだ。
元の服を袋に入れてリュックに入れる、匂いが出ないようにだ、ルドルフの着替えは、ラフなズボンと文字のTシャツ、文字は……会長は今日も快調だ……

やりやがったなルドルフ！
いや、確かにこの前褒めたけどさ、俺も似たようなの持ってるけどさ、人前で着るものじゃないだろう！
着替えて出る。
「ルドルフ、これって……」
ルドルフが上着の内側の肌着を見せてくれた、
……会長は今日も快調だ……
ペアルックかよ！　何だこのクソダサペアルックは何なんだ！

それからのことは短くまとめようと思う、テイオー達に何故着替えたのか、その服は何なのかと聞かれたがカッターシャツは動きづらいので買ってきたと伝えた、流石に自分で自分の首を締めたとは恥ずかしくて言えない。それにより、かわりに私のセンスが犠牲になった。

あと、オグリは安田記念に勝利した、レースゲームでの私の動きを見てコーナーでの攻め方や溜め方のコツを掴んだようだ。休憩とこれを狙っていたので、バッチリだタイキシャトルは強敵だった、次はマイルチャンピオンシップで戦うだろう、だが、その前に夏合宿だ。

そして、その後、現れた、謎の最強レーサーマルゼンセンパイについてはまたどこかで語るとしよう。

???「今の走りはチョベリグよ！」

次回！　電脳レーシングウマ娘対戦　第１５話

「私は赤いスーパーカー！」

来週も私の走りを見ていてくれ！

芦毛とマッドな合宿

オグリたちとゲームで勝負をしてから二週間ほど経った
ルドルフがオグリと一緒にトレーニングをしてくれるようになった。どうやら○リオカートで負けたことで、
一応負けたので言うことを聞いてオグリとともにトレーニングをしてくれている。
「やっぱり、誰かとトレーニングをしたほうがいいようだな。」
周りに頑張っている人がいると、自分も頑張ろうと思い、トレーニングをする。しかもワーカーホリックなルドルフだ、めちゃくちゃ励む。
勉強の時とかは、『一応補修をすることにならないように』教えてもらっているが、
オグリ「会長…ここはどうすればいいんだ？」
ルドルフ「この問題はこう解けば簡単になる。」
こんなふうに問題の解き方からしっかり教えてくれるので、オグリの成績はかなり良くなった。
こんなふうに考えるのは良くないが成績がいいということは、頭が賢くなったと考える、そして賢いということは様々な作戦を考え、実行したり、相手の策にハマらないようになるということだ、他にもレースの位置取りとかがよくなったり色々あると思うが、頭を鍛えるのは悪いことではない、そういった部分は中等部2年のセイウンスカイが高いと思う。彼女が本気で走る姿を見た覚えがない、走る姿も見せないし、彼女は策士タイプだろう。だが様々なところで言われている、黄金世代に彼女は数えられている、彼女は私から見ると才能のある天才型だが、オグリ程わかりやすいタイプではない。
恐らく何事も無ければ台風の目は彼女になるだろう。

ここまでながながと語ったが、伝えたいことは一つ賢さは大切だ。特に長距離のレースでは賢さが重要だ。フルマラソンの選手でも良いタイムと悪いタイムでは、かなり変わってくる、賢さはその平均を

上げる能力といえる
今日はオグリとルドルフがトレーニングをしている間に
同期のトレーナーから面白い話があると言われたので、話を聞きに行こう。
「さ〝ぁ〝う〝ち〝と〝や〝ろ〝や〝ぁ〝」
「一緒に頑張りましょうね。」
あの様子だとタマモクロスとスーパークリークも一緒にトレーニングをしているようだ、スーパークリークはビート板勢だが、タマモクロスはどうなんだろう？
まぁ、あの様子だと問題なさそうだし、同期のところに向かおう。

学園内のトレーナー室
「乃河くん、久しぶりだが来週の合宿を控えた時期に呼び出すとは余程面白いことなんだろう、君の担当の実験台になれというのなら、ルドルフに通報して学園の平和の為に罰を受けてもらうがそうじゃないだろう。」
あまり会わないと思うので、いらないと思うが乃河悠一
私の同期だ、担当しているウマ娘はアグネスタキオン、トレセン学園のトレーナーでは一番のイケメンだ。
同時にかなりのひょうきん者でもあり、頭が割とイカれていて、タキオンの担当になったのもウマ娘の限界を超えた姿を見たいという好奇心と楽しそうというアグネスタキオン相手に持ってはいけない恐ろしい感情を持っている、ブレーキは壊れている。
乃河くん「いえ、正木さん今日はこの写真を見てもらいたくて、来てもらいました。」
そう言って写真を見せてもらった。
「……発育良すぎないか？」
子供に見えるが何がとは言わないがすごく大きい
「あと、このアングルはどう見ても盗撮したものにしか見えないが、」
盗撮イケメン「彼女の名前はダイワスカーレット小学６年生です。」

「この子ランドセル背負ってんの!?オイオイこんな写真持ってたら都条例で捕まるぞ。しかもロリのこんな写真ポルノ認定されてマジで捕まるぞ。」動揺している

乃河容疑者「ただの写真なんですが…この写真を見ればわかると思いますが彼女はウマ娘です。素行も良くて身体能力もウマ娘とはいえ小学生とは思えないほどあると言われてます。」

「ダイヤの原石という訳だな。俺は昔、確かに優秀そうな子がいたら教えてくれと言っていたが、小学生を出してくるとはな。」

「とはいえ、今の俺にはオグリがいるからな、二人以上の育成はするつもりはないから大丈夫なんだが……」

乃河くん「いえ、彼女は私が育てたいと思っています。どことなくタキオンに近い気配を感じますし、」

「じゃあ、なんで見せてきたんだ?」

モルモット「それは貴方にこれを飲んでもらう為です。タキオン今です。来てください。」

完全に油断していた!背後を見るとアグネスタキオンがいた。俺の両腕を上に挙げて捕まえている。

「これは一体何のマネだ……」

アグネスタキオン「安心してくれたまえ、これは人体にウマソウルを定着そして強化させる薬だ、成功すれば君は超人になれる。」

「それは恐らく、人間にしか使えない筈だろう。君の研究が目指していた物とかなり違うはずだ。」

「ウマソウルの強化その部分を調べるために君にも飲んでもらおうというわけだ。私が飲んでも何も起こらないんでね。」

ウマソウルってなんだ!?勢いで受け入れていたが何だそれ。ニンジャソウルの親戚か!?

「ということで助手くん、モルモットに早く飲ませるんだ。」

モルモット「ハイわかりました。タキオン」ゴクゴク

「乃河くん」

「助手くん」

!?!?!?!?!?!?!?

乃河くん「モルモットが飲みました。これでいいでしょう。」
「助手くん話が違うじゃないか！木原くんはとても頑丈で今回の薬の被検体にうってつけだと君が言ったんじゃないか！」
乃河くん「タキオンこういう物はまず私をモルモットにして実験しようと私は言いました。だから危険だからといって木原さんを犠牲にするのはよくありません。」
「それはそのとおりだが……
何が起こるかまだわからないんだ。それをわかっているのかい。」
そんなもん飲まそうとしたのか。
「私はそれが原因で何か起こったときに対処できるように研究しておくから、後で報告するように！」
……
「取り敢えずお礼を言っておこう。助かったよ」
「いえ、これは我々の問題です。タキオンがどうしても私に飲ませようとしないものですから、ご迷惑をお掛けしてすいませんでした。」
「しかし本当に大丈夫なのか、体調が悪くなったりしているようには感じないがタキオンの薬だ何が起こるかわからない。」
「いえ、むしろ元気になったくらいです。あなたも一杯どうですか？」
「ハハハ！俺は元気いっぱいだから大丈夫だよ。ところで生徒会室に行きたいようだね。」
「ハハハ、冗談ですよ。それでは私は合宿の準備に入りますから失礼します。」ダッ
「まちやがれ！逃さんぞ！」シュタッ
その日は一日中元気になった乃河くんを追いかけまわした。結局捕まえられなかったので今回は見逃した。

夏合宿スタート

今日から夏合宿が始まる。実力向上の為の強化トレーニングが始

まる。
「ここが合宿所……。
トレーナー、聞きたいことがあるんだが。」
「なんだ？」
「ここの合宿所に……バイキングはあるのだろうか？」
「……合宿だってこと忘れてないよな？」
「いや、忘れていない。
この合宿が、とても大事なことも。」
「すべてのレースで勝つために、
しっかり鍛えていくつもりだ。」
「大丈夫だ。私は頑張る。
……ただ食事も大事だと思うんだ。」
――――オグリキャップとの
熱い夏合宿がスタートした！
……そういうことにしてくれ

芦毛と未確認生物

タキオン「木原くんこのコーラをあげよう。」
「ありがとう、早速いただこう。」
色も同じだが僅かに味が違う。フタを閉めてぶん投げた！
「貴様何を飲ませた！」
「色も味も完璧におなじようにしたつもりだが君には効かないようだね。あと君そんなキャラではないだろう」
「それはうちのモルモット君が飲んだ物をパワーアップさせ効果が早く出るようにしたものだ。」
「あれからモルモット君はとても元気になってね。」
「実験は成功してモルモット君の身体能力も強化され１００ｍを９秒３０で走るレベルになった。」
「今の男子世界記録更新してんじゃねーか、どう考えてもドーピングだがその記録はおかしい。」
「タキオン乃河くんは結構鍛えてある人間だが１００ｍは１２秒台のはずだ、いろんなことを放って聞くが、そのレベルにいきなり強化されれば体に異常がある筈だが大丈夫なのか、筋肉痛とか」
「無論一週間の経過観察でバッチリ確認しておいた。私達ウマ娘には効果はないが普通の人間が飲むと体力が格段に強化される魔法の薬だ。」
「それを海に投げるとはもったいないことをしたね。その薬をどれほどの人が欲しがるものか。」
「だが、君の研究には必要ないものだろう。」
「そのとおりだ、二号くん私の研究の目的はウマ娘の限界に挑戦することであり、永続的な強化だ、成功しているがウマ娘に使えないのならば意味はない。」
誰が二号だ、人を勝手にパワーアップさせようとするんじゃない。しかし焦ってぶん投げてしまったが、海に流れたあれが環境に悪影響を与えないことを祈ろう。

オグリがタマモクロスやスーパークリークと一緒に海の家に行ってる間を狙ってくるとはなんて狡猾なウマ娘だ、仕方ない口直しに本物のコーラを飲もう。

友達と一緒に過ごす時間は大切だろうから席を外した
俺も海の家に行ってコーラを買おう。

海の家

オグリが海の家で行われている大食い大会に参加している。タマモクロスとスーパークリークはオグリの応援をしている。
「一時間半の長めの食事休憩にしておいたが、まさかその一時間で大食い大会に参加するとは思ってなかったよ」
「木原さん遅過ぎるで！もうすぐオグリの優勝が決まるところや！」
「オグリちゃんあっという間に完食するから作る方も間に合ってないようで、本当に圧勝してますよ～」
オグリが勝つのはわかっているがどれだけ食べているかが重要だ。見てみよう。食べているのは焼きそば、海の家で食べると美味しいものランキングで毎回入る素晴らしいものだ、夏祭りのランキングにも入る。
皿は１０皿で重ねられているものが、３０個　３００皿かぁ、わんこそばかな？

そんなこんなで終了まで観戦した。
オグリキャップの優勝コメント
「美味しい焼きそばだ、次回も参加したい。」
司会のお兄さんのコメント
「オグリキャップさんはなんとこれまでの最高記録の１０８皿を大幅更新の３倍以上の３５２皿を食べましたので、これはもう３回優勝したのと一緒ですので殿堂入りとなります。これからも海の家大食いグランプリをよろしくおねがいします。」

オグリは大会出禁になったようだ。

「トレーナー見ていてくれたか？」

「バッチリみたが、すごいお腹が膨らんでいるが、大丈夫か？」

今まで食べてたおにぎり５０個もまだ本気になっていなかったって訳だな。正直背筋がゾッとしてるよ、心を殺して作ったおにぎりでもまだお腹いっぱいになってなかったみたいで、

「トレーナー大丈夫だ、このあとのトレーニングにも支障はない。」

ボテ腹をさらけ出した状態でそんなことを言っている。

「……取り敢えず明日は腹筋しまくろうな。」

「トレーナー…少し食べすぎたようだ。すまない」

「安心しろ、俺はいっぱい食べるオグリが好きでトレーナーをしているわけでもあるからな。好きなだけ食べるといい」

今日のトレーニングはビーチを走るトレーニングだ、

ビーチで走るとバランス感覚がよくなり減少する体力も増えるため、スタミナの増強も見込める、おまけに足腰の負担も減らすことができる。最高のトレーニングだ。

ちなみに本当かはわからないが頭の回転も速くなるらしいぞ。

皆も近くのビーチでＬｅｔ’ｓ　ｒｕｎ

走ってみたら体がだいぶ軽く感じる。いつもは自転車で並走しているんだが走ってオグリとルドルフに追いつくことができる。

タキオンの薬ヤバすぎないか、ゆっくり走っているウマ娘に追いつくことができるってかなり強化されてるのがわかるな。

練習終了後

「トレーナーこれを見てくれ。」

コーラだ、２Ｌが６本もある

「これはいったい」

「大食い大会の景品がこれだったんだ、いつもお世話になってるから、受け取って欲しい。】」

お礼のことばを伝えたあとオグリを合宿所におくってトレセン学園のトレーナー室に戻った。合宿中はここで住むことにしている。そのためにベットもおいてある。

コーラを飲みながらＪＡＷ○を観て寝よう。

次の日、私の体力は元に戻っていた。タキオンの薬は効果が強化された代わりに一日で切れてしまったようだ、毎日超人は流石に疲れるのでこれでいい、さーてオグリの様子でも見に行くか。

ガチャリ

ドアを開けて部屋を出ると外に茶色くて速そうで美しい生物がいた。

ガチャリ

ドアを閉めた。うん、見て見ぬ振りをしよう

「いやー、幻を見るとはタキオンの薬の副作用だな、念には念を入れて窓から出よう。」

謎の生物「木原さん、開けてくれませんか。」

「ムッ、その声はわが友、乃河子ではないか？」

乃河子「いかにも自分は、トレセンの乃河である。」

「外にＵＭＡがいるからあとにしてくれないか。」

乃河くん「もう気づいていると思いますがそのＵＭＡが私です。」

「……乃河くん、タキオンの薬で人間をやめたのは何回目だい、」

乃河くん「いえ、それが初めてなんですよ。発光したり、すごい身体能力で動きまくったこともあるんですがこの美しい生物に変身したのは初めてです。」

「その割には落ち着いてるね。ところでそれってこの前の薬の副作用

？」
乃河くん「そうだと思いますよ。日に日に身体能力が強化されて飲んでから8日目の今日いきなりこの姿になりました。」
「俺もタキオンから同じやつの強化された物を飲まされたんだけど。」
乃河「明日から僕と同じＵＭＡ友ですね。」
ドアを開けて乃河くんにドロップキックをくらわした。
反撃で後ろ足で蹴られた。内臓が破裂するかと思った。

乃河くんと取っ組み合いをしているとルドルフとオグリがやってきた。

「…!?トレーナー初めて見るがその生物は？」
「同期の乃河くんだ、ほらあのイケメンの、タキオンの薬で謎の生物、取り敢えずＵＭＡと呼んでいるがそれになってしまった。」
「どうも木原さんの同期で友達の乃河です。オグリさんに会うのは初めてですがルドルフさんは何度かお会いしたことがありますね。」

ルドルフ「なるほど、アグネスタキオンの薬の作用か、彼女はやはり要注意人物だな。」
ルドルフはすごく冷静だ。オグリはよくわからないって考えているだろう。今なら？マークが見える気がする。
オグリ「トレーナー、合宿所の海でサメが出たんだ。」
「ああ、それは大変だな！トレーナーや理事長たづなさんライフガードに報告して警察や猟友会を呼ぶのが決まりだが、それはしっかりしたか、」
ていうか、今俺に報告しているのがそのことか、
「待っていてくれ、今すぐ警察と猟友会を呼ぶ。」
［それだけでは無理なようだから、私達についてきてくれないか。」
そう言われたので、急いで行くために乃河くんに乗せて貰ってビーチに向かった。

「……ルドルフ、サメって実は魚類なんだ。イルカに似ているから哺乳類だと思う人がたくさんいるらしい。だから陸上にはあがらないはずなんだ。」
「トレーナー残念ながらこれは現実だ、約１０ｍのサメが陸で活動している。」
　サメが這いずり回るように動いているサーフボードを巻き込んで引きずっているようだ、元は確か９ｃｍほどの厚さだったサーフボードがヤスリに削られたようにえぐられハーピーターンぐらいの厚さになっている。
「立ち入り禁止にしているようだな、合宿所で色々な人を呼んで作戦会議をするぞ。」

皇帝と地獄の鬼ごっこ

「理事長が海外出張により不在ということで今回は私が取り仕切る、まぁ、ほとんどのトレーナーは避難して残ったのがここ以外合宿場所が取れない、新人トレーナーだらけで私が最年長だからリーダーになるしかないだけだがな」
「なお今回の会議には第一発見者のオグリキャップと生徒会長のシンボリルドルフが出席するが構わないな。」
　桐生院「あの～」
「なんでしょう桐生院くん」
「先輩少しキャラが変わりましたね、この問題警察に通報すれば解決するんじゃないですか？」
「昨日の金曜ロー〇ショーって何か知ってる？ＪＡ〇Ｓだからな、通報したときイタズラだと思われて相手にされなかった。」
「第一１０ｍのサメなんてなんとかするのは警察でも無理だろう。」
「オマケに陸にあがって動き回る。全力疾走すれば人間でも逃げられる速度だからいいがこれはかなりまずい」
「デモゴルゴンって怪物がいるが人間の全力疾走より少し遅い速度で追いかけてくる奴がいるがあれのヤバさは折り紙付き、なんせパニックに陥った人間よりは速いからな。」
「怪物がいるがアレだから気分的にはＢ級映画の世界に迷い込んだみたいだ。」
　ルドルフ「トレーナー君、乃河トレーナーについては説明しなくていいのか？」
「俺は慣れたが説明が必要だな、俺の同期のアグネスタキオンのトレーナーの乃河悠一くんだ、元の姿はイケメンだが今は謎の未確認生物ＵＭＡになってる。」
　乃河くん「どうもアグネスタキオンのトレーナーの乃河悠一です、タキオンの薬で発光したことがありますがこの姿になったのは初めてです。」
「ツッコミどころは沢山あると思うが第一発見者のオグリに話を聞こ

う。」

オグリ「…あのサメ?は海で腹筋や腕立て伏せやマラソンとかで全身のトレーニングをしていた時に見つけたんだ。」
「私はトレーナーが不安になっているから多めに腹筋をする為に速めに自主トレーニングをしていたんだ。そうしていたら海にとても大きな影が見えて近づいてみたらあのサメだったんだ。海からあがって追いかけてきた」
「その後は急いで逃げてルドルフと合流してトレーナーのところに行った。」

「さて、この話を聞いてどうにかできると思った人は手を挙げてくれ。」
ハイッ!と言って葵ちゃんが勢いよく手を挙げた。
「こういうときの為のマニュアルはありませんか?」
「あるけど役に立たんわ!マヌケ!先祖代々鋼の意志を継いでるだけはあるわ!
サメが出たときは備え付けられてる水中銃で誰かに退治してもらうことになってるが10mのデカブツにあんな棒が効くか、心臓に届くのも難しいはずだ。オマケにアレの皮膚はレジンなどの素材を容易く削ることができる。ぶつかるだけで大怪我の可能性もある。更に水中だけなら危険性は減るが残念ながら奴は水陸両用だ、陸で追い詰めることができても海に逃げられる、そうなると人間に恐れを持つようになって襲わなくなるか、人間に憎しみを持って人を優先的に襲うようになる怪物が誕生するかのどっちかだ。」
葵ちゃんがショックを受けている。
「ながながと言ったが言いたいことはやつの対処方法は今の所どこにもない。ただし我々で考えないといけない。」
鏡祥太郎「木原さん、言われたとおりサメの偵察をしてきました、大きさは正確には16m程で人間をわざわざ襲うような性格ではないようです。近くにある動くものに襲いかかるようです。発見時刻か

ら一時間後ぐらいに海に戻りました。」
「いいニュースと悪いニュースをありがとう、聞いたと思うがジョ○ズの2倍ぐらいの大きさらしい。ジョブズではない、海に戻るということは長く居られないのか陸にいる必要がないのに気づいたかのどっちかだがまたあがってくる可能性はあるだろう。近くにある動く物体に襲いかかる、
ジョジ○のノトーリアスＢＩＧかな」
「トレーナー君今日はキレッキレだな。」
「フハハハ！今の時代にこんなクソみたいなＢ級サメ映画みたいなことが起きるとこうなるよ。しかもデカさがジョー○の2倍の大きさというのが安直すぎる。タイトルはビッグシャークだな。」

ここからはルドルフの視点でお送りします。

正木君が大爆笑しているようだ、よほど頭にキテるらしい、今度サメのジョークを作ろう。
今は事件の解決だ、せっかくのトレーナー君との久しぶりの夏合宿だ、あんな怪物に台無しにされては困る。
ルドルフ「トレーナー君あのサメの対処方法は思いついたかい？」
木原正木「思い付いたがあのサメの鼻っ柱に蹴りを叩きこむのは考えたが無駄だろう、顔面に近づくのも危険だし、人間の蹴りが聞くような大きさじゃないだろう。」
「第一銃があってもあの大きさだ、倒すのは難しいし時間がかかる凶暴化して暴れまわる可能性もある。」
「トレーナー君、サメが現れた理由は何だと思う」
「古代の巨大ザメ、メガロドンが現代に復活したって言われても納得できるサイズと形状だ、ただし昔のサメが陸を動き回れたかは謎だ。」
「冗談はさておいて、陸で活動するサメなんていないからな、人の手が加えられているのは確かだ。何度もいうがアホな映画の博士以外あんなバケモノを作るやつはいない。」
トレーナー君も私と同じように人工的に造られた生き物と考えて

いるようだ。

「トレーナー君、乃河トレーナーの変化とあのサメは同時期に発生した。この2つは関連があるように思う。」
「その場合容疑者はアグネスタキオンになるな、早速話を聞きに行こう。」
「桐生院さんに鏡さんもアグネスタキオンに話を今のうちに聞きに行くということで構わないかい。」
鏡さんも桐生院さんも私達についてきてくれるようだ。

アグネスタキオンの合宿部屋に向かった。途中でテイオーに出会った。
「カイチョー！ボクも一緒に手伝うよ！」
「テイオー、とても危険なんだ。君は連れていけない。」
「それなら尚更手伝うよ！ボク、カイチョーの役に立ちたいんだ！」
「ルドルフここは俺に任せてくれ。」
トレーナーは頼りになるな
「テイオー今回の作戦はチームを分けて行動している。エアグルーヴやナリタブライアンは逃げ遅れた生徒の避難誘導や巨大ザメの情報収集をしてもらっている。」
「テイオー君にはそちらに回ってもらいたい。そしてオグリを連れて一緒に避難しておいてほしい。」
!?そうか…トレーナーは私をおいていくのか……」
「オグリ今回のような問題は本当はトレーナーや生徒会だけで解決すべき問題なんだ、テイオー、オグリは一人だと迷子になってしまう。一緒に連れて行ってほしい、頼む。」
「……トレーナーワカッタヨ、オグリ先輩は僕がしっかり安全なところに連れて行くからね。」
「その代わり今度はボクのトレーナーになってね！」
「あぁ、オグリが最強になったらな。」
テイオーが『イツニナルカワカラナイヨー』と言っているが。一年

半後には最強になってもらう予定なんだがな。

「ルドルフ、タキオンを探すぞ。」

「トレーナー君、何か取り返しのつかないことになってる気がするんだが。」

トレーナー君まさかオグリの次はテイオーのトレーナーになるつもりなのか！私のトレーナーに戻って私と一緒に歩んでくれるはずじゃないのか…

「どうしたルドルフ？タキオンを探さないと解決は遠退くぞ」

「トレーナー君、君はオグリキャップを有馬記念に出走させるつもりかい。」

「あぁ、いま話すことではないが年末の有馬記念に出させるつもりだ。スケジュールは建てているがオグリにはまだ伝えていない。目の前のレースに集中してもらいたいからな。有馬を気にして菊花賞を勝てなくなれば元も子もないからな。」

「私も出走しよう。」

トレーナー君はあまり驚いてないようだが、桐生院さんと鏡さんはとても驚いている。

「今のオグリキャップの実力を測るためにも有馬記念で全力で勝負をする。」

これは敵対宣言と言えるだろう、それでもトレーナー君の表情は変わらない。君が育てたトウィンクルシリーズ最強のウマ娘皇帝シンボリルドルフの宣戦布告を受けてもトレーナーは微動だにしない。

少しだけ木原正木トレーナーの思考

ルドルフはトレセン学園に在籍している最強のウマ娘だその凄さは俺が彼女を育てた功績だけで、特別な資格を貰える程だ、彼女のG

１勝利回数を伝えてなかったと思うが１０冠だ、彼女の目標は７冠だったようだが出れるＧ１を片っ端から出続けて１０冠だ、そりゃ記者もルドルフはつまらないって言うよ。
勝負服に付いてある勲章より多くのＧ１を勝利している。
彼女を育てたことで俺にはある願いができた。
ルドルフがトウィンクルシリーズを席巻した時にこの最強の彼女をもうひとり最強のウマ娘を育てあげ倒したいと思った。
オグリの気持ちに任せるが恐らく遅かれ早かれ彼女たちは激突する定めだったんだろう。
オグリは強いウマ娘と競い合いたい、ルドルフはすべてのウマ娘が幸福な世界の為に強さを示さなければならない。
ルドルフとぶつかるのはもう一年先だと思っていたがタマモクロス、スーパークリーク、オグリにはライバルがいる。
だが彼女は今頂点に立ったことで生徒会の仲間たちもついてきてくれているが、戦う相手としては孤独になってしまっている。彼女の玉座は私が破壊しなければならない。
そしてオグリに海外で惨敗したルドルフの代わりに、日本のウマ娘の強さを見せ付けること、それが俺のもう一つの夢だ。

ルドルフの視点
「トレーナー君ここがアグネスの部屋だ。」
トレーナー君が高速でノックをする、鍵は掛かっていない。勢いよく開ける。
「アグネスは何処だ！」
「ひいい、アグネスデジタルです～」
「違うわ！やばい方のアグネスのタキオンだ！」
「二号くん少し静かにしてくれないかい、今キミにも使用した薬をウマ娘にも使えるように更に改良しているところだ。」
「そうかそうか、ところで今の乃河くんを見てもらいたい。」
「タキオン、姿が変わりましたが私です、美しくなりました。」

アグネスタキオンが絶句している、デジタルの方は目を輝かせているようだ、トレーナー君は話を進めるためにショックを与えたようだ。
「タキオン今外で巨大ザメが出現している、何か心当たりはあるかい？」
「……私の薬では巨大化はしないはずだが……」
「乃河トレーナーはこの姿になってから体重が５００ｋｇ程になっている、身体能力は格段にあがったようだけどね。」
「私の薬で巨大化やその姿になったのなら二号くんにも効果が起きている筈だ。結果が早く出るように効果が十倍早く出るようにしたからね。」
トレーナー君を研究に使ったようだ、許せないが事件の解決後に処分しよう、
「俺の体力が上がったのも飲んだ当日だけだ。失敗作だったのか、他の要因があるかどれかだな。」
「二号くんその後食べた物や飲んだものはなんだい、それと何か特別な行動はしていないかい？」
「特段変な行動はしていないが寝る前にコーラを飲んで遅めの食事を取っただけだ。合宿中は食事を作るのが面倒だからカップ麺を作った。」
「トレーナー君、カップ麺だらけでは栄養が偏るから私が食事を作ってあげよう。」
遊びに行く口実ができた。処分は軽くしよう
「そうか！モルモット君その姿では私の弁当が作れないじゃないか！」
「タキオンすみません、どうか美味しい料理の作り方を覚えてください。」
乃河トレーナーとアグネスタキオンが弁当の話を始めたので遮った。
「とにかく実験としてモルモット君にコーラを飲ませようその次は

カップ麺だ。」
乃河トレーナーはとても食べづらそうだがコーラを飲んでいる。
「あとは少し時間が経つのを待っていてくれたまえ。」

2時間後
乃河トレーナーがヒトの姿に戻った。桐生院さんがとても驚いている。アグネスタキオンが安堵の表情をしている、トレーナーが急いで乃河トレーナーを移動させて服を用意した、元に戻ったら全裸になるのを危惧していたんだろう。

トレーナー君の携帯から音楽が流れるどうやら電話がかかってきたようだ。
トレーナー君が相づちをうって話を聞き出している。

「タキオンあのサメは君の薬が原因のようだ」
「どういうことだ、二号くん」
「鏡君から連絡があったが再び陸にあがってきた。今度は四本脚でさっきの乃河くんのようなＵＭＡのような姿らしい。」
「君が原因だと確定した。残念だが一旦確保しなければならない」
トレーナー君がカッコよく決めている。
「私が思うにあのサメはキミが海にぶん投げた、薬品で変化したものだと思うんだが。」
「君があんなもの作らなればこうはならなかったんだぞ！」
「キミが海に放り投げなければここまで大事にならなかったんだ！」
「トレーナー君今は問題解決が先だ。」
「解決方法はいたってシンプルサメの口の中にコーラを入れるだけ

だ、正直いって乃河君がコーラで戻ったのも訳わからんが解決するならそれは些細なことだ。実は俺最近コーラのステマを延々としているような気がするがもう気にしないぞ。」
トレーナー君がそう言ってコーラを用意すると言って部屋をあとにした。

私達は作戦を用意してトレーナー君を待った。元に戻るのに2時間かかるのも考えて作戦を考えた。

トレーナー君が2Lのコーラを5本用意してやってきた

トレーナー君に作戦を説明した、私が一旦おとりとなってサメの前で走り、誘導して、走ってサメが疲れたあとトレーナー君達にコーラを口の中に入れてもらう。
これが今回の作戦だトレーナー君は少し不安そうだが了承して、早速作戦を決行した。

ビーチ
まず私がサメの前に立って走る。
サメが私を追いかけてきた、第一段階は成功だ。

もう三十分以上走っているがサメが一向に疲れない。
このサメはどうやら足が生えて速くなり体力の消耗が少なくなったようだ。朝のときは簡単に逃げられたものが振り切れない。だがあと三十分は逃げれる筈だその前に体力を消耗させればいい。

あれから二十分ほど経った、ビーチでは普通に走るより多めに体力を消費するようだ、私の方が先に限界が来てしまったようだ。
私の体が砂浜に倒れ込む。
最後はトレーナーの側と決めていたがどうやらそれは無理なようだ、最後に見た顔は不安そうな顔だった、最後に見る顔はやはり笑顔が良かったのだろう。
私は後悔している、学園の問題を解決できずに夢を叶えることも出来ずに私が消えてしまうのがとても悔しい。
地平線からすごい速度で走る人影が見える。
私が一番見たい幻覚だ、最後に幸せな気持ちになれた。

私の体はサメに食べられるのだろう、両親にはこんなことになってしまったことを不甲斐ないと思っている。

サメの口の中は想像より暖かった。それにさっきまで嗅いでいた筈なのに懐かしい香りがする。

「ルドルフ今君が3年前にされたがっていた、お姫様抱っこをしている。」
「……トレーナー君どうしてここへ？」
信じられない、トレーナー君が私を助けに来てくれたようだ。
「お姫様抱っこは無反応か、ルドルフ一人で犠牲にするようなことをさせてすまない、エアグルーヴを呼んでいるから、安心して休んでくれ。」
「……トレーナー君、とても脚が速いんだね。」
「タキオンが作っていた薬を大急ぎで5本飲んだ、単純な薬で飲めば飲むほど体力が強化されるようだ。」

「それと猛スピードで逃げてるから手荒になるかもしれないけど許してくれよ。」
そう言ってトレーナー君は私をエアグルーヴの方向に放り投げた。
私はエアグルーヴの側で安心して休んだ。

トレーナーの視点に戻ります

「ルドルフから引き継いで一時間以上走ってようやく疲労してきたようだな。」
サメの動きがようやくゆっくりになった。
コーラを口に放り投げようとしたとき、私の手がＵＭＡの形になった。

「嘘だろ……」
ガブッと頭から逝かれた。

「……変な夢だったな。」
「一日頑張って働く夢かつ、自分が死ぬ夢を見ると朝から元気がなくなるな」
しかし夢で良かった。あんな冗談みたいなことで死にたくないからな。
着替えて部屋を出よう。
ＵＭＡがいた。うん、これは『時計』だな。

「乃河君サメのことは覚えているかい。」
「ええ、もちろん覚えてますよ。木原さんしっかり頭から食べられてましたから。」
「たづなさんから説明は受けていると思うが本来『時計』は一人３回までだ、俺はもう使い切っている。乃河君が使うしかないはずだ。」
「時計は自分のウマ娘に関わることにしか使えず、自動発動するようです。私の場合はタキオンがあのことで薬を作るのをやめることがトリガーになったようです。」
「ただ木原さんがあの時のことを覚えているのに驚きました。使用者しか覚えていない筈です。」
「俺はしっかり夢を覚えておくタイプだからな。そのおかげだろう。細かいことはいいからコーラを飲んでくれ。」
「ええ、もちろんいただきます。それと実は私も昨日のＪＡＷ○を観たんですよ。」
「なるほど、感想を言ってくれ。」
「映画は面白いですけど、現実だと巨大ザメは嫌ですね。それにＪＡ○Ｓと比べたら悪いですね、私達を襲ったのはかなりＢ級ですから。」
「そのとおりだな、さぁ、ルドルフとオグリが来る前にコーラを飲んでくれ。」
「あの後大変でしたよ、時計が発動するまででしたがルドルフさんずっと泣いてましたよ、あんな姿始めてみましたよ。オグリさんは冷凍庫に入ってあるおにぎりを泣きながら食べてました。」
「今回はそうならないさ。どうすれば助かるか予想は建ててある。」

昨日に戻ってくれれば薬を飲み干してコーラを飲めば万事解決だが、朝に戻ったので、他の方法を取る。
一つの行動を変えるだけで充分だったようだ。そうテイオーとオグリにも手伝ってもらうことだ、こうすることでルドルフのスタミナは解決される。アグネスデジタルにも手伝ってもらったが一番スタ

ミナがあった、愛の為せる技だな。
ルドルフは意識してなかったと思うが取り返しのつかないことととはそういうことだろう。
それに心なしかオグリの根性とスタミナが鍛えられた気がする。成功ということだろう。
サメは二度と発生しないのでまた明日から普通の合宿だ、いろんな人間が『時計』を使って何度もやり直さない限り大丈夫だ、終わらない夏休みは絶対にあってはならないからな。

不沈艦と焼きそば屋台

サメ騒動が終わり合宿所に平和が戻った。私がこの仕事を教師のようだといったのはこれだけの大事件を解決してもボーナスも出ないというところだ。ボーナスは贅沢を言い過ぎたかもしれないがせめて感謝状くらい貰えないだろうか。

一回死ぬという経験もしてしまったが、なかったことになったのでこのことを知っているのは乃河くんと俺だけだ。

まぁ、気にしてはいけない『時計』のおかげで助かったわけでもあるし、リトライできるだけ感謝しよう。

そしてあれだけのことをしたんだが、

まだオグリのお腹は膨らんだままだ、

今日もオグリのトレーニングは腹筋多めだ。

ルドルフのトレーナーは海外出張している。

預けるという意味合いでもあったんだろう。

タマモクロスとスーパークリークにはオグリに野菜多めの料理を勧めてもらうよう頼んでおいた。肉よりは太りづらいはずだ。しかしオグリがとうもろこしを屋台で沢山食べたと聞いたときはしまったと思った。

とうもろこしは野菜の中でも糖質とカロリーが高い痩せようとしているときにたくさん食べるのは悪い。置き換えダイエットとかしてる奴には悪いが米のかわりにコーンを食べてダイエットとか言ってるやつは2個以上食うなよ。茶碗1杯よりカロリー多いからな。

ジュ～

元気なウマ娘「トレーナー何してるの？」

「その変な半角まじりの声はテイオーだな」

「見ればわかると思うが焼きそば屋台をしている。」

「ゴールドシップが手伝えと言ってきてな、日頃一緒に遊んでいるから手伝うことにした。今ゴールドシップは昼休憩中でついでにライ

バル店の偵察に行っている。」
俺はこのクソ暑いなか焼きそばを焼いている、一人じゃないとはいえ普通に12時頃に休憩を取るとは思ってなかった。
「そっちのカッコいいお兄さんは？」
乃河くん「前あった時はＵＭＡの姿でしたね、改めて自己紹介します。アグネスタキオンのトレーナーの乃河悠一です。」
「アグネスタキオンってこの前のサメ騒動の元凶だった人だよね。」
テイオーが少し恐がっているようだ。ここはかわりに釈明しよう。
でも乃河くん素でヤバいからなタキオンと組む前からヤバかったし、人に迷惑を掛けないタイプのヤバい人だしな、一緒にトレーナー試験受けたときに体力測定の水泳部門で自由に泳いでくださいって言われたときに背泳ぎ選んだ人間だからな。それはどっちかというと変なところか、一番謎なのはあんなにイケメンなのに彼女がいたことがないというのが不思議だ。告白をすべて断っているのか？
簡単に説明するか。
「安心してくれテイオー、乃河くんはいつも一番にタキオンの犠牲になっている人だ、あと面白さもあるぞ、モノマネが得意でこの前はビコーペガサスに正しいアマゾンポーズを教えていた。あと昔読モだったらしいから読モシャウトもうまいぞ。」
乃河君が昔元祖のア〇ゾンの変身をしてくれたが、するときにパンツ一丁になってしたから、かなりノリもいい
「ふ～ん、それでこのお店のオススメは何なの？」
「よく聞いてくれた、ゴールドシップにはただの焼きそばだけでは客の心を掴めないと言って様々な物を増やしている、俺のオススメはオムそばだ、卵のおかげで甘さがまして栄養もバッチリで夏にぴったりな物だ。」
「私のオススメは海鮮焼きそばです、近くの漁港で取れた新鮮なエビイカアサリなどを使用していますのでとても味わい深いものになってます。」
「じゃあボクはオムそばをちょうだい。」
「ヘイッ！オムそば一丁！」

「ってラーメン屋やないかーい！」
乃河くんはこういうノリがいい。

今度は生徒会の３人がやってきた。
「いらっしゃい！うまい焼きそばだから是非食っていってくれ。」
エアグルーヴ「貴様らちゃんと許可は取ってあるのか」
「安心してくれ営業許可もあるし、俺は食品衛生責任者と管理者両方の講習を受けてるから、安全面には気をつけてある。ちゃんと講習会の卒業証書もある。」
ナリタブライアン「肉はあるのか？」
「お肉マシマシの焼きそばはあるぞ。」
「ならそれを頼む、肉は更に多めに入れておいてくれ。」
「ルドルフとエアグルーヴは何がいい？」
「トレーナー君のオススメの物を頼むよ。」
「食べるとは言ってないが私は一日分の半分野菜焼きそばをくれ。」
「わかったルドルフはオムそばにしておくな、エアグルーヴなかなかいいセンスをしているな。」
最近野菜の値段が上がってきているので、この野菜焼きそばが一番原価が掛かってある。オムそばは比較的に安い、肉マシマシ焼きそばも結構原価はかかっている。
海鮮焼きそばはトレセン学園のお陰で安く仕入れることができたので実は結構安い。
ちなみに俺が好きなのは塩焼きそばだがあまり売れないオムそばも好きだが夏の暑さに塩焼きそばの塩分が非常によく効く、似たような現象でポカリ美味すぎ現象がある。

その後も俺たちは焼きそばを作り続けた、ナウでヤングなウマ娘にはナポリタンをオグリには特盛り野菜焼きそばをそんな具合で暗くなるまで焼きそばを作っていた。

夕日が沈みかけている頃

「乃河君俺たち間違ってた気がするんだ、冷静に考えて一日中焼きそば作ってるトレーナーって俺たちぐらいだと思うんだ。」

俺はオグリが太り気味だからまともなトレーニングが出来ないが乃河君はどうなんだろう？

「私はタキオンが謹慎中ですので気分転換ができて良かったと思ってますよ。」

そうか、あれだけのことだから流石に謹慎処分はくらうか退学にならないだけ良かったのだろう。

「本当にルドルフさんには感謝してます。タキオンと併走してくれたことも今回の件も本当にいくら感謝してもしきれません。」

乃河君は確か最初モルモットになるのを拒否していたがルドルフと併走するタキオンを観てモルモットになるのを決意したんだっけ、トレーナーじゃないあたりやっぱり狂ってるな。

ハジケリスト「遅くなったな！オメーらちゃ～んと焼きそば売ってたな？」

ようやく帰ってきたようだ。

「随分遅かったな、あの海の家の恐ろしいサービスのドリンクバーで遊んでたのか？」

「な～に言ってんだ、アタシが店を放って遊ぶわけねぇだろ！偵察ついでに勝負してきたんだよ！」

「料理勝負ですか、確かに宣伝にもなりますしライバル店とこのお店の焼きそばの違いもわかりますし勝ったときは宣伝になります。」

「おう！バッチリナカヤマフェスタと対決して勝ってきたぜ！」

「いやー、強敵だった、ソースの隠し味にオイスターソースを混ぜた、恐ろしい焼きそばだった、けどアタシの作った究極のゴルシちゃん焼きそばｍｋ２の敵じゃなかったな、」

「ちょっと待て、海の家の店員がナカヤマフェスタだったのか？」

「何いってんだそんな訳ねーだろ、アイツはただの客だぞ。」
「なんで客と勝負してんだよ！」
「しゃあねーだろ、アイツ勝負好きだし、その後はビーチフラッグにビーチバレー、遠泳対決に綺麗な貝拾い対決もしたぞ。」
「しっかり海を満喫してんのかよ！お前こっちは昼飯休憩も取らずにクソ暑いなかこの鉄板で焼きそば作ってんだぞ。」
「なんだ、そんなに怒って、そーか昼飯食ってないから腹が減ってるんだな、ほらアタシが作ったゴルシちゃん焼きそばｍｋ２をあげるから食え。」
　むしろ怒りのボルテージがあがったが腹が減っているのは本当なので食うことにした。
「うますぎる!!」
「乃河くん別にいきなりボケなくてもいいからな、けど確かにめちゃくちゃうまいな、腹いっぱいになったらなんかどうでもよくなったな。」
「お前ら明日も頼むぞ！」
「それは勘弁してくれ！」
　俺と乃河君は一斉にダッシュで逃げた。
　ゴールドシップの追い込みは凄まじい乃河君が一瞬で犠牲になった、その１０秒後乃河君を担いだゴールドシップに捕まった。

　その話をオグリにすると何故か知らんがゲートを出るのが得意になったかもしれない。マジで訳がわからない。

　明日はオグリの太り気味を治す為のトレーニングをするつもりなので仕方ないので鏡君を犠牲にしよう。
　赤ちゃんプレイの件で脅しをかければ大丈夫だろう。

芦毛の神社

木原「鏡くん少し話をしようか？」
鏡「はい！先輩！」
「君は元気だね、これから君の元気がなくなるような話をしようと思っているがいいかい？」
「えっ、アッハイ」
「君は担当しているウマ娘のスーパークリークに赤ちゃんプレイをしてもらっている。」
「そのことについてなにか弁明はあるかい？」
「先輩見ていたんですね、これは秘密にしておきたかったんですが話しておきます、クリークは誰かを甘やかしたり、彼女のイメージする母親の行動をしないと実力を発揮できないんです。」
「そのために僕は彼女の母親プレイに付き合うことで全力を出せるようにしているんです。」
「君はあくまで自分が愉しむ赤ちゃんプレイではなくクリークの為のママさんプレイだと言いたいんだね。」
「一つお願いがあるんだがポケットの中にあるものや持っている持ち物を見せてくれないかい？」
「えっと、それは……」
「大抵の人間は嫌がるのだが、最終的には見せる、よほどやましいものを持っていない限りはね。」
「私の推測では君はおしゃぶり、よだれかけ、ガラガラどれかを持っていると考えている。もちろん君はスーパークリークのためと言うだろう。」
「ここまで話しておいてだが、君を追い詰めようとしていない、ただ君の現状を確認したい。」
鏡君は無言でおしゃぶり、よだれかけ、ガラガラの三種の神器を取り出した。
「それを出したうえで君は言い訳を考えているだろう、それもそうだ、普通の人間はそうする、でもそれは無駄なことだ、誰も信じない。」

「私は君の絶望が見たいわけではない、だからこれは誰にも話すつもりはない。」
「僕は最初はスーパークリークのためにと思いこのことに付き合いました、今は拒否感はなくなりクリークに全てをゆだねてしまっています。」
「人の心とは簡単なものだ、一度許してしまうと何度も許してしまう、もっと簡単なのはだんだん馴染んでしまうことだ、君はクリークママの赤ちゃんである自分と本来のトレセン学園のトレーナー鏡祥太朗の自分との境目を失いかけているんだろう。」
「赤ちゃんがママに甘えるのは当然のことだからね。」
「何が言いたいんですか……」
「ここまで言ってまだ分からないのかい？君の心と脳は赤ちゃんに侵されてしまった。」

このあと焼きそば屋台を任せると言うと少し呆然としながら屋台に向かっていった。
少し言い過ぎたかもしれないが彼のためにも伝えておいて正解だろう、スーパークリークと一旦離れたほうが自分たちの関係について考えるいい機会になるはずだ。

鏡君に焼きそば作りをさせることに成功した。ゴールドシップは納得しきってないようだが、満足してもらうしかない。

そういったことをしたあとだが本日はオグリと神社に行くことになっている。オグリの元気がないので合宿中のウマ娘の定番の海で遊んで気分転換というわけにも行かないので神社にお参りというわけだ。
オグリ「トレーナー……合宿中に無理を言ってすまない」
「元気がない状態でトレーニングはケガをするだけだしな、でも他にもいい場所があると思うがどうして神社なんだ？」
「最近、体が重いんだ……。」

太り気味だからな
「何をやってもちょっとしたミスをしたり、とにかく調子が悪い……。」
太り気味だからな
「それで、『困ったときは神頼みだ』って、マサさんが言っていたんだ。」
「実際、故郷のレース場の中にある神社で、お祈りしたら、レースで勝てたこともあるんだ。」
「だから、神頼みをすることにした。」
「それなら俺も一緒にお願いするよ。」
「いいのか？ありがとう、トレーナー。」
オグリキャップとお祈りをした。
「御賽銭もしたし、頼みを聞いてくれるといいが……。」
「……む？何か、ポケットの中に入っている……。」
「――こ、これはラーメン屋の替え玉無料券！
早速のご利益だ！」
「きっと、ラーメンを食べて元気になれという事なんだろうな……！」
「体も軽くなった気もするし……うんラーメンを食べに行くか……！」
早速頂いたご利益を手に、軽やかな足取りのオグリキャップと、ラーメンを食べに行ったのであった。

次の日

膨らんでいたオグリのお腹がひっこんだ、…おかしい野菜多めに取らせて栄養にも気を遣った食事ではなくラーメンで痩せるのは訳がわからない。
ま、まぁまともなトレーニングが出来るようになるのを喜ぶべきだろう。次起きたときも神社に行こう。
でも今日は雨模様が一日続くらしい、ゴールドシップも屋台を畳んでいる。雷まで降るらしいから今日は屋内でのトレーニングだ。
ドン！ゴロゴロジャン
早速降ってきたな。近くで雷も落ちたようだすごい音だ。

サイボーグなウマ娘「恐怖対象雷を確認、これより防御モードに移行します。」
不思議な子もいるんだなロボットみたいな口調だ、どうやら雷が怖いらしい。
しかしライスシャワーが近づいている、俺は邪魔になるだろうから離れておこう。アグネスデジタルが好きそうな組み合わせだな。
オグリに会って合宿中の雨の日用のトレーニングを伝えよう。
そう思い歩いていると足元にバナナの皮が落ちているのに気がついた。バナナ先輩ビワハヤヒデが落としたのだろう、友人として拾っておいてあげよう。
噛みつくのが好きなウマ娘「あーー！どうして罠を取るのだー!?」
「フッ、これが罠だと随分手を抜いているようだな、」
「何！これはあのとき汚されたウィンディちゃんの誇りを取り戻すための罠なのだ！」

回想

「ふんっ！何度叱られても、止めない！これからも廊下に罠を作ってやるのだ！」
アマゾン!!「……そーかいそーかい。反省しないと、でもあんたの罠よりバクシンオーの注意のほうが恐ろしいけどね。」
「あいつ、生徒に注意するときものすごいスピードで走るからね、廊下を走るなと注意するときも走るあいつのほうがまだ厄介さ。」
「あんたはまだ、バクシンオーと比べれば可愛いもんさ！」

「ンガーッ！絶対バクシンオーより廊下で走る奴を捕まえてやるのだー！」
確かにウマ娘の全力疾走は危険だがバナナのほうが危険だ。だが彼女は学級委員長と取り締まりで対抗するという良いことをしていることに気づいていない。
「フッ、所詮子供か。可愛らしい物だ。」
おっと怒っているようだ。ここは逃げよう。
フフ、バクシンオーと同じ方法は取らないはずだから走ってこない

はずだ、これで簡単に逃げられる。
　ってアレ？ダッシュで追いかけてくる。
「ウィンディちゃんの怒りを受けるのだー！」
「ギャーーーー!!!」

　オグリ「トレーナー、その首筋にある歯型は……」
「シシマイに噛んでもらった、ご利益もあるし縁起がいい。」
　そう言って俺はタマモクロスに最近獅子舞姿のた〇けん見てないなと言ってオグリと将棋のトレーニングをした

芦毛とビデオ

雨はまだまだ続く、今日は過去のレースを見て研究をすることにした。

木原「オグリ、この人があの恐ろしいエアグルーヴのお母さんだ、記者会見の映像まであるからわかると思うがエアグルーヴと似てないだろう。めちゃくちゃ明るい人だ。たわけとか貴様とか言わないぞ。」

オグリ「トレーナー、でも走っている姿は似ているぞ、とても強そうだ。」

「そんでこの人がキングヘイローのお母さんだ、７冠のすごいウマ娘だ、７冠ウマ娘の娘ということでキングヘイローはすごい期待されてるぞ。この人も強敵と戦いまくって勝ったり負けたりしてたからキングヘイローのあのど根性と努力は親譲りかもしれないな。」

昔のレースを見ていると今活躍している。ウマ娘の母親が出ることもあるのでそこいらへんの解説もしている

「全く関係ないんだが後輩のＢＮＷと呼ばれている三人組のウイニングチケットの座右の銘はパワフルなレディらしいぞ、なんでだろうな。」

「トレーナー、この人たづなさんにそっくりだ、昔はレースに出てたのか、それに他のウマ娘達を置き去りにしているぞ」

「ハハハ、オグリたづなさんは人間だぞ、あとその映像は白黒だぞ、ほらそれにたづなさんは緑の服だからな、アハハ」

たづなさんの正体は不明だがおそらく人間だろう。そうであってください

そんな感じでオグリとレースについて勉強している。

「トレーナー４０年以上前のレースにマルゼンスキーが出ていた気が……」

「気にするな、それは気のせいだ。ほら俺年上には敬語使うだろ、マルゼンスキーに敬語使ったところ見たことあるか？」

「そうだな、きっと気のせいだな。」

危ない、新人のときマルゼンスキーに敬語使ってたんだよな、たづなさんと理事長をちゃんづけで呼ぶから年齢が謎なんだよな。
「ほらオグリ今度は最近のレースを見るぞ。」

オグリとルドルフのレースを見た。
「ルドルフ今とだいぶ違うな。」
「今でもたまに中央を無礼るなよとか言ってるけどな、昔のほうが威厳はあったよ。けど今はダジャレのおかげで親しみやすさがましたな。これはヒミツなんだがルドルフはジョークをまとめたメモ帳を持ってる。それにジョークが書かれたTシャツも持ってる。」
「それにとても速いな。いつかレースで勝負したい。」

ルドルフが有馬記念で勝負したいと言っているのは隠して伝えるのは菊花賞のあとにしよう。今のルドルフ弱点を教えておこう。
「オグリ実はルドルフはラストスパートの時に3人以上追い抜くとめちゃくちゃ速くなってたんだ、理由はわからないがその力を使うためにいつもは差しで戦ってたが最近は安定する先行策をとっている、おかげで恐ろしい爆発力が無くなったから少しだけやりやすくなっている。そこが弱点だろうな。」
オグリがその話を聞いてうなずいている。さて重要な話もしたしお菓子のおかわりを用意してあげよう。
すごく食べるから多めに用意しておいてよかった。
テイオー「トレーナー！遊びに来たよ～」
「テイオー、遊んでいるつもりはないんだがな、まあいいか、テイオー昔のレースを観てるが一緒に観るか。」
「観る観る！カイチョーのレースもある!?」
「担当だったからな、レース前のインタビューからあるぞ。」
「コーラとお菓子を用意するから興味のあるレースを観てくれ。」
「テイオー、このレースにたづなさんが出ているんだ、トレーナーがどうしても信じてくれないんだ。」
「え～!?たづなさんってレースに出てたの！強かったの！」

「１０レース見たけど全部勝ってるぞすごい人だ、それにレコード勝ちが多い」
「へ～たづなさんってカイチョーぐらいすごい人だったんだ～」
「イヤだから気の所為だからな、オグリそういうことにしておいてくれ、ほらおにぎりも作ってあげるから。」
　そう言うとオグリはようやくたづなさんのことを話さなくなってくれた、知らないほうがいいこともある。
「かわりに俺の考えたルドルフがメイクデビューについて言いそうなことを言おう。
　キリ『そんなものは鎧袖一触だ』たぶん転入生が入ってきたら言うと思う。」
「え～、カイチョーって確かに四字熟語よく使うけどそこまで無理やり使わないよ～。」
　まぁ、中央に転入してくるウマ娘がそうそういるわけでもないけどな。それにオグリレベルの強い子はそうそう現れないだろう。でもこれは絶対言う。
　ルドルフ「今日は勉強会のようだね。私が何か言うと話していたが何を話していたんだい？」
「気にするな、ルドルフは皆のために粉骨砕身で頑張ってくれる品行方正で立派なウマ娘だって話していたんだ。」
「そうか、そう思ってくれているなら頑張っているかいがあるよ。ところでトレーナーその首筋にある歯型は……」
「ルドルフが勘違いするとは思わないが一応言っておこう、トレーナー仲間がキスマークと間違ってたがこんな深々と大きいものがあるわけない、シシマイに噛まれた。そう言うことにしておいてくれ。」
「カイチョー、キスマークって何～？」
「テイオーそれは私には説明できないからトレーナーに聞いてくれ。」
　そういうわけでテイオーに説明した、テイオーの顔が赤くなっている、夜には相部屋のマヤノトップガンも赤くなるだろう。

　そんなこんなで３人でビデオを見た、若者にビデオがわかるか不安

だったが、問題なかった、ルドルフはレースシーンは見られても普通だったがインタビューをみられていると少し恥ずかしそうにしていた、どんな人間にも恥ずかしい過去はあるという訳だな。
全員レースに対する理解力が上がった気がする。これ以上は今日は効果が出ないだろう。
「さて、レースについての勉強は十分出来たと思うからＤＶＤの映画でもみるか？」
「ボクもレースはたくさんみたから映画が観たかったんだ。ありがとうトレーナー！」
ルドルフとオグリも賛成してくれたので映画を選んでもらっている、正直サメ映画以外ならなんでもいい。
タマモクロスやスーパークリークと一緒に映画を観て反応が見たかったが二人とも今日はレースらしい、合宿中にレースは疲労を残しやすいからあまりしない方がいいが何か理由があるんだろう。
見る映画が決まったようだ、
ちなみに俺のオススメはコマ〇ドーだがター〇ネーター２になった、どちらもすごいマッチョマンが活躍する映画だから実質同じだ。

テイオーとオグリが溶鉱炉のシーンで泣いていた。俺は泣かない、金曜ロ〇ドショーでもみるし、土曜プレ〇アムでも見る、何なら一年に一回ＤＶＤで見る、でもその度いい映画だと思う。そんなにみてるがたぶんＤＶＤ持ってないラピュ〇の方が多く見てると思う。何度も同じシーンで泣くのは無理だ。でも先輩が閃光〇ハサウェイを３回見たけど３回とも泣いたと言っていたので大ファンなら泣けるのだろう。
この勢いでターミ〇ーター３を観るようだ、ポップコーンがきれかけているので買ってきてあげよう。
ルドルフに伝えて部屋を出た。

ツルン　グチャ

「ハッハッハー！あんなに言ってたのにウィンディちゃんの罠に引っ掛かるなんてお前馬鹿だなー！」

シンコウウインディが大はしゃぎしている、タキオンから取り上げておいたＵＭＡになる薬を飲んだあと全力で追いかけ回した。

捕まえたあとヒシアマゾンに引き渡した、ポップコーンと一緒にコーラを飲んでＵＭＡにならないようにした。

コーラでなぜ治るのかはわからないが気にしたら負けだろう。

ターミネー〇ー3の反応は2より良くは無かったので2のほうが面白く感じたようだ。

天気予報では明日は晴れるらしいのでトレーニングに戻れるだろう。

同期と畑

晴れたと思ったらトレーニングではなく畑仕事をしている、俺が言えることは無農薬は大変ということだ。

理事長「雑草！根っこから引き抜くことを忘れずにな。」

理事長が無理やりあの口調で話しているのがわかる。

夏合宿の途中だが俺たちはトレセン学園の人参畑の草抜きをしている。無農薬で栽培している為雑草が生えまくる、連日の雨により凄まじい量が生えてしまった。

生徒会が時々手伝っていたようだが手が足りないというわけで俺が呼ばれた。謹慎明けの乃河君とタキオンもいる。

乃河「木原さん、随分手慣れてますね。」

「俺の母校の高校は商業科と農業科があって俺は商業科だったんだが、部活動の方で野菜を育てるのとボランティアをしていた、設備があるから本格的に野菜を育てることもできた。ボランティアの方では故郷の植林活動と伐採事業を手伝ったこともある。なれなきゃできない作業だったよ。」

ちなみに俺の故郷の植林活動は自然を守るための活動と言っていたが俺の故郷は林業が長い間殆ど停止していたためむしろ山に木が有り余っていてむしろ間伐材だらけで土砂崩れが起きるくらい木が多いんだがそのあたりはよくわからない、森は百年サイクルで管理しないといけないらしいが林業を行う人間が少ないし、増えることもないだろうし、これ以上木を植えないほうがいいと思うがそこいらへんは誰も話さない。植林と伐採を行っているのが別々の組織だから起きるんだろう。

そんなふうに様々なことを考えていると落とし穴を発見した、簡単に発見したのでシンコウウインディの落とし穴だろう。ゴールドシップの落とし穴は見つけられないからな。

「乃河君、引っかかるマヌケはいないと思うが落とし穴を埋めるから、スコップを貸してくれ。」

「私も埋めるのを手伝います、そのほうが早く済みます。」

「ありがとう、早速埋めるとしよう。」
落とし穴の目の前に移動したとき、いきなり足場が沈んだ、
……そういうわけか、ここまで恐ろしい罠を作るのはゴールドシップだろう、ダミーを作って誘導して本命の穴に落とす。引っ掛かりやすいように考えられた恐ろしい落とし穴。落とし穴だからそこまで危険ではないが3ｍも掘るな一人で落ちたら出れなくなるわ。
いやゴールドシップがそんなただえげつないだけの事をするとは思えない、ということは

「おっしゃー！ゴルシちゃんの落とし穴に落ちたにんじん泥棒はどんなやつだ～！」
「俺だ、あとにんじん泥棒じゃない。」
「オメー、トレーナーが落とし穴に引っ掛かるなよ。そんなんじゃ立派な侍になれねえぞ。」
やはり意味不明だな、友人だと思っていたがやめようかな
「ほらアタシが引っ張ってやるから、早く手を上に上げろ」
「3ｍもあるから腕を伸ばすくらいでは無理だ、乃河君も引っ張り上げるのを手伝ってくれ。」
「ええ、わかりました。」
そう言って乃河君がゴールドシップの足を掴んで支えて穴から引っ張り上げてくれている。体力ヤバいなタキオンの薬を飲みすぎたのか？
引っ張りあげてくれた、ゴールドシップが助けてくれたが穴を掘ったのもゴールドシップなのでヒシアマゾンに連れて行こう。理事長に報告は段階をとばし過ぎて大変なことになるかもしれない。

一時間後

「乃河君今度こそウィンディの落とし穴だ、埋めよう」
「道をチェックしながら進みましょう。」
これは俺が引っ掛かったあとにわかったことだがゴールドシップはこの畑に大量の落とし穴を作っており、高難易度のマインスイー

パーや、トル〇コ不思議のダンジョンのワナの石像部屋のようになっている、俺がくらったのはシンプルな落とし穴だが他にも転び石、ネバネバ、水浸し、回転、様々なギミックがある、モンスターが出ればガチのダンジョンになる。
「……乃河君、タキオンはどこに行ったんだい。」
「今は皆さんにお茶を配りに行ってます。」
「……今のうちに捕まえよう、何か起きる前に」
穴を埋めたあとタキオンを探した。

「タキオンそのお茶は普通ですよね？」
「モルモット君、勿論だとも夏の暑さにピッタリの美味しい紅茶さ」
「タキオン、君は前科もちだからな、悪いが今のうちに捕まえさせてもらうぞ。」
タキオンが素直に連行されてくれた、本当に何もしてないのかもしれない。悪いことをした。
「木原さん、オグリさんも手伝ってくれているそうですが何をしているんですか。」
「オグリはメジロライアンとトマトの畑に行っている。雑草を抜いたり畑を耕したりしているだろう。」
「あの二人仲いいんですね。」
「俺は初耳だが一緒に畑を作ってるから仲はいいんだろう。それにこの地獄よりあのトマト畑にいてくれる方が安心だ。」
「それもそうですね、私達が穴埋め班に選ばれたそうなので二人で埋めましょう。」
畑作業では本来ないはずの穴埋め作業をしている。というか何が起きるかわからないので地雷処理を任されている気分だ、さっき花火が炸裂したしな。焦るからやめてほしい。
「もう２０個以上埋めたがまだあると思う？」
「流石にないと思いたいですがゴールドシップですからね、何が起こるかわかりません、ですがもう7時を超えて暗くなってきました、理

事長も帰りましたし、残っているのは私達くらいですからもう帰りましょう。」
そういうことで帰ることにした。

次の日の朝

「乃河君も気になるから来たんだと思うが、これは俺たちだけの秘密にしておこう。あと犯人は誰だと思う。」
ニンジンが落とし穴に落ちている、何故か顔があって腕と足があり歩けるように見える、某魔法映画のマンドラゴラのようだ、鳴きだしたらやばいかもしれない。
「タキオンだと思います、謹慎中に栄養価の高いにんじんを作ろうとしていましたし、どうすればいいと思います？」
「にんじんのくせに土の中が苦しいらしい。このまま埋めてやれば動かなくなるだろう。」
そういうわけで埋めた。タキオンはやはり実験をしていたようだ、このにんじんのように動きだすにんじんが増えるかもしれないがその時は理事長に話して畑を燃やすしかないだろう。

数日後

乃河君はタキオンがにんじんに注射した栄養剤をすべて破棄して、調合レシピもシュレッダーに掛けたあと燃やしたようだ、これで同じことは起きないだろう、事件になっていないので報告せずにしておいた。

ルドルフ「トレーナー君、最近トレセン学園の無農薬にんじん畑で夜な夜な悲鳴のような音が聞こえるらしい」
テイオー「エー！カイチョーホントナノー！」
「フフ、テイオー怖いのか」
「ボ、ボクは無敵のテイオー様だからね！怖いものなんて何もないよ！」
「ああ、その件に関してはマンハッタンカフェが乃河君と調査したらしいどうやら彼女の目には何も映らなかったようだから幽霊のしわ

ざではないらしい。テイオーも怖がらなくてすむぞ。」
「だからボクには怖いものなんて効かないってば！でもオバケが出るわけでもないからこれで皆が安心できるね。」
「トレーナー君、今でも聞こえるらしいから原因は不明なようだ。今日の夜一緒に調査してくれないか。」
「あぁ、もちろんいいぞ、調査道具はこっちで用意しておくからしっかりトレーニングしておいてくれ。俺はこのあとオグリのかわりにトマトの水やりに行くからそのついでに準備しておく。」
エアグルーヴの花に水をあげるのも頼まれたのでそれもする、夏合宿のあとのレクリエーションについて会議するらしいので長引くようなのでかわりに頼まれた。オグリは今日は早朝からトレーニングに向かったので水やりを忘れているようなので代わりにする。

ルドルフと夜ににんじん畑を調査したが当然確信には触れないようにした、それに今日は鳴き声も聞こえなかったので問題解決は困難だが問題なし時間経過で自然に解決として処理してもらった、
そういうことでトレセン学園の怪談に夜な夜なにんじん畑に忍び込む者に聞こえる謎の悲鳴という話が加わった。
あのにんじんには悪いが悲鳴もあげなくなったし、３ｍ以上深いところにいるから見つかることもないだろう。

夏合宿はまだまだ続く、ここでのオグリの成長が明暗をわける。基本はウマ娘に任せるのが私の方針だが明日はオグリのトレーニングに付き合おう。

芦毛と母性の合宿

今日はオグリのトレーニングを見ている。腹筋はしていない、今日もビーチマラソンだ、スピードは鍛えておいて損はない。マラソンだからスタミナも鍛えられる、このことについては前も考えた気がする。

本当は遠泳をして全身を鍛えたいんだがオグリはビート板勢だ、何かあったら大変だ。そして今日はクリークとトレーニングをするようだ、ルドルフは生徒会、タマモクロスはパワーを鍛えに行っているらしい。

差しにはパワーが必要だからだろう。テイオーはなぜかルドルフについて行っているらしい。あれで生徒会メンバーではないから不思議だ。

まぁ、それより気になることがあるんだが、

木原「その、祥太郎君突然下の名前で読んで少し変だと思っているかもしれないが聞くよ、その自転車に付いている補助輪はなんだい？」

祥太朗「……実は僕自転車が苦手で、普通の道でも大変なのに砂浜でこけずに走れるわけがないと思い補助輪をつけました。」

「その、羞恥心とかそういうのはお持ちでない？

たしかにコケたら大変だけど、見た人全員ドン引きするか、見てはいけないものを見たときの反応してるよ。ほら二人のことは俺に任せて走ったあとに渡す飲み物を買ってくるとか、そっちのほうがいいんじゃないのかい」

「あとこうするとクリークが喜びます。」

「そっちが本命だな、てか君すごいな！担当ウマ娘の為にまさかそこまで捨てれるのか!?実はトレーナーって俺以外全員やばいやつなんじゃないよな。」

「先輩がそれ言わないでくださいよ。先輩はボケもツッコミもこなす人だと思われてますよ。」

それは別にやばいことではないと思うが、オグリとクリークの様子

を見てみよう。見たところオグリのほうがスピードはあるな、だがスタミナはクリークの方が上だろう。胸にあんな重たいものがあるのにどういうことだろう。サブタンクなんだろうか？

ってクリークがコケた。ド派手にコケた。大事を取って保健室に連れて行くようだ。

オグリも一緒にコケていたがなんともなさそうだ、頑丈だからノーダメージなんだろうか、それともウマ娘の謎の一緒にこけたのに一人だけダメージを受ける現象だろうか、ウマ娘の謎は深まるばかりだ。オグリも保健室に連れて行こう。

保健室

クリーク「オグリちゃんに追いつこうと思って急いだら砂浜に足を取られてしまいました。」

オグリ「いきなり加速してすまない。」

「オグリちゃんのせいじゃないですよ～、それに最近何をしてもうまくいく気がしないんです。」

それは少しおかしいな、体の状態は完璧と呼べる状態のはずだ。それに傍から見れば絶好調に見える。そう考えていると鏡くんが話しかけてくる。

「先輩はどう思いますか、この状態。」

「絶好調で体力もバッチリあるのに失敗する。ただのスランプではないと思う。ウマ娘の体についてはわからないことのほうが多い、だから所感が重要だ、何か心当たりはあるかい？」

「実は……」

そう言って、軽い血行不良があり秋までレースなど気をつけるように言われているのを教えてくれた。

「その状態で皐月賞に出てきてあの強さだったのか、恐れ入るよ。ダービーに出走しなかったのは体を気遣ってだな、君たちは治す方法は考えているのかい？」

「それがまだ、わかってないんです。」

「思いつく限りの血行不良を治す方法を試すといい。それで治らなけ

れば他の要因があるのがわかる。難しいことを考えすぎて基本的なことを行えていないだろう。」
「オグリも手伝ってくれるか？」
オグリがうなずいて返事をした。早速移動する。

プール

「トレーナーどうしてプールなんだ。」
「体のどこが原因で血行不良になっているのかわからないからな、全身動かすことができる水泳の出番だ。それに見たところクリークに最も向いているトレーニングは水泳だろう。」
「クリークは泳ぐのが苦手で、こうなってからは避けていました。」
「頑張ります。」
この水泳まで失敗したらもうどうしようにもならないが流石にそれはなかった、やはり完璧に見える。オグリも一緒に泳いでいる、両方ともビート板持ちだがそこは問題ないだろう。
「祥太朗君、これは私の考えだが君とクリークでは認識の違いがあると思う。それは何を大切にするのか、なんの為にレースに出るのか、そういったところだと思う。だから質問するよ、君が最も大切なものはなんだ。」
「スーパークリークです。」
「あぁ、それが正解だ、だがそれだけではまだ足りないんだろう、君たちの関係はそれだけでは言葉が足りないはずだ、今度は少し変えよう、君たちの力の源はなんだ？」
「それはクリークが努力を続けていること、体調を崩しても諦めない彼女の努力のおかげです。」
「半分正解だ、だが少し違う、どうして彼女が君を甘やかし褒め続けているか、わかってきているはずだ。彼女が君に伝えたいことを。」
「先輩はわかっているんですか。」
「オグリが俺におにぎりを作ってくれたんだ、とても大きな一つでお腹いっぱいになるようなすごいやつだ、そして俺は毎日おにぎりを作ってたんだ、５０個だ。だから恩返しだったんだろう。」

「トレーナーはあまり褒められる仕事じゃない。公務員みたいなもんだしな、でも彼女は知っているんだろう、君がとっても凄いやつだということを、トレセン学園にいるウマ娘は全員エリートだ、トレーナーもそのはずだ、大前提だ、そのうえで君を褒めるんだ。」
「僕はどうすればいいんですか。」
「君はこの前の私の話を受け取りすぎたようだ、演じるのは悪いことではない、だけど信じないのはダメだ。私から言える一つの答えは、どうして褒められ甘やかされているときに演じているんだ、君自身が褒められているのに。」
「この関係は少しおかしいと思っているんです。」
「何がおかしいんだ、トレーナーとウマ娘の関係はどこも違うのに、どんな関係が正解かは誰にもわからないんだ、俺だってこの前はおにぎりを作り続ける機械になっていた。それもトレーナーなんだろう。」
長々と説教臭いことを言ってしまったが、ここまで言えばわかるだろう、円満にいく一番の方法は本気で甘えることだということが、
「ありがとうございます！ようやくわかりました、絶対に秋までにクリークの血行不良を治します。菊花賞は必ず勝利します。」
「あぁ、楽しみにしているよ、君たちが最強になって現れるのを。」
祥太朗くんはようやく自分の進む道を見つけることができたようだ、だが本当にわかっているんだろうか私が言ったことは人間性を捨てろと言っていることに。

「オグリそろそろあがってくれ。」
オグリが返事をしてあがってくる。
祥太朗くんに応援の言葉を伝えて、外のアイスの自販機でオグリを待つ
「トレーナー、クリークは大丈夫なんだろうか」
「少しアドバイスをしておいた、秋には完全に治っているはずだ。俺たちも菊花賞にむけてトレーニングを続けよう。強くなって現れるはずだ。」
オグリにアイスを買ってあげた。俺はチョコナッツモナカを買っ

た、17アイスで一番うまい。チョコがパリパリでナッツの香りがよくて非常にうまい、期間限定のやつを入れてこれを抜くやつは絶対に許さん。
「トレーナーはどうして私にアイスを買ってくれるんだ。」
オグリは俺のおすすめしたソーダフロートを舐めながら聞いてくる。
「今日はマラソンの後に水泳もして頑張ったからなアイスぐらい奢るさ。」
甘いと言うやつも居るが食いしん坊でかわいい相棒と一緒にいたら奢りたくなるだろう。破産しない程度にな。
オグリのライバル達はさらに強くなるだろう、忘れてはいないが夏合宿だからな思い出も大切だが強くなるのも大切だ。

芦毛とお出かけ

ライバルのパワーアップを手伝うという冷静に考えたらしないほうがいいことをしたんだが大丈夫だろう、オグリが同じぐらいパワーアップすれば問題ないしな。

オグリ「トレーナー、どうして今日は砂の城を作るのがトレーニングなんだ。」

「オグリ、少し疲れているんだろう、だったらついでに遊ぼうと思ってな夏合宿でもたまには全力で遊ぶ日があってもいいだろう。」

この前のトレーニングでわかったことだがオグリも疲れが溜まっているようだしな。コケた時に疲れているように見えたし、

「オグリこのタライに砂を入れたから踏みまくってくれ。」

「城を作るには土台が必要だ。土台は……」

「オグリ辞めよう、向こうにバカでかい城を作っているゴールドシップがいる。バレたら大変な気がする。」

作るのをやめて正解だったようだ、及河君が奴隷のように働かされている。

「トレーナー、やっぱりトレーニングをしたほうがいいと思うんだ、クリークだって今もトレーニングをしている。」

「クリークはあのあと5日ほど休んだからな、俺たちも休まないと体を壊してしまう。」

「トレーナー……」

「強くなるには走ることも大切だが休むことも大切なんだ、失敗してケガをしたら元も子もない。」

「ゴールドシップに見つからないように今日はレストランにでも行こう。」

「つまり、遊びに行くぞ。」

「さぁ、この雑誌をよく見てくれ。」

見せてみると雑誌を食い入るように見ている。

「すごいな…黄金色のクリーム……これはウニか、パスタの上でキラキラと……まるで宝石のようだ」
　やはり料理は偉大だな。オグリにはすごく効く
「ああ、こっちは……あたたかいパンケーキに冷たいアイス……。新鮮な果物がこんなに……なんて贅沢な……。」
　チョロすぎないか、催眠術師に騙されたりしてないよな
「気になるお店を見つけたようだな。」
「……トレーナー本当は次の休日に行ってみようと考えてはいたんだ。故郷と比べると店が多くてな……時間がかかって結局行けてなかったんだ。」
「どんな店なんだ？」
「うむ、パスタとパンケーキが人気の店でな。ここは『隠れた名店』と呼ばれているらしい。」
「しかし……実は先日も同じようなラーメン屋の広告を見つけて、向かってみたんだが……。」
「地図を見てちゃんと電車に乗ったはずなのに、見つけることが出来なかったんだ。」
「さすが隠れているだけある。……一筋縄ではいかないな。」
「はっ……。まさか、世を忍ぶ仮の姿で潜んでいるのか……？」
「そんな忍者や黄門様みたいな店はない。」
「むぅ……であればどうしてたどり着けなかったんだろう。不思議だ。」
　地図を見てみるとかなり簡易的なものだ、中学の修学旅行で沖縄に行ったときわかりづらすぎてマクドナルドで済ませたのを思い出した。余談だが日本では沖縄のマクドナルドにしかないスーパーサイズとかそんな感じのコーラがある。デカすぎて同級生はドン引きしてた。
　そんなどうでもいいことは置いておいてカフェに行こう。
「オグリ善は急げだ、早速行くぞ。」
「あぁ……それにトレーナーと一緒なら。安心だな。よろしく頼む。」
　ということで早速車で向かう。何事もなくカフェに到着した。

「ここがそうなのか……まったく迷わなかったな。さすがトレーナーだ。」
「……。」
「どうした？」
「いや、こんなにも垢抜けた場所だとは思っていなかったから……なんだか落ち着かない。」
「この服で大丈夫だろうか。
　都会には、決められた服装でないと追い返される店もあるのだろう？」
「ここは問題ない。」
「そうか、それならよかった。だが……やはり少し落ち着かないな。」
　お店のスタッフ「ご注文はお決まりになりましたか？」
「あ……えっと、なんだったか……。」
「パスタとパンケーキじゃなかったか？」
「うむ。だが名前が少し難しくて……。」
「フランス語のような……カタカナの……。１つはウニのパスタで、なんと言ったか……。」
「ウニのパスタを２つ」
「それですと、リュミエール・ドレのウニクリームパスタですね。」
「おお……正式な名前でなくてもいいのか。……よし。」
「すまない、フルーツがたっぷり乗ったパンケーキも２つ、お願いしたいのだが。」
「はい、フリュイ・クレープですね。かしこまりました～。」
「すごい……見ていたか、トレーナー。私でもちゃんと注文できたぞ。」
　慣れない場所にオグリキャップは緊張しているようだったが、食べた後には、すっかり緊張も解け――
「美味しかった……味わったことのない味だ。口の中でとろけるように、一瞬でなくなってしまった……。」
「……トレーナー。１つ提案があるのだが、お代わりをしないか？」
「あまりにも一瞬でなくなってしまったので、少し味わい足りない気

分なんだ。せっかく出向いて来たのだし――」
「お代わりもいいけど、他のも試さないか？」
「他のも……言われてみれば確かにそれもありだな。」
「パスタもパンケーキも素晴らしい味付けだったし、他のメニューも負けず劣らずの美味しさに違いない。」
「となると何を頼むのが正解なのか……。むぅ、これは非常に難しい選択だぞ。」
　そう言ってオグリキャップがメニューとにらめっこをすること数十分――
「……ダメだ、決まらない！どれもこれも美味しそうで、全部注文したくなってしまう。」
「ん？……それでも問題はないか。」
「トレーナー、メニューに書かれているもの、全部注文してみるというのはどうだろう。」
「それは勘弁してくれ……」
　こうすればよかったんだ　みたいな顔をしてヒカ○ンみたいなことを言わないでくれ……
「……ダメなのか。だったら君が注文を決めてくれないか？どのメニューが好みだ？」
「ハンバーグのパイ包み焼き」
「ふむ……初めて聞く料理だ。」
「うん、せっかくの機会だしそれを食べてみよう。私に注文させてくれ。」
　オグリキャップは子供のように嬉しそうに手を挙げて店員を呼ぶと、『ハンバーグのパイのやつ』と注文した。小学生かな？
「サクサクのパイに程よい酸味と甘みのベリーソース、パイの中には肉汁たっぷりのハンバーグ――」
「まるで夢を見ているかのような幸せなひと時だった。」
　いきなり語彙力が復活した。
「なるほど、ハンバーグに果物のソースというのがピント来ていなかったが、これは確かにありだ。」

「ありがとうトレーナー。キミのおかげで、食の世界が広がったみたいだ。」
「自分の好物だけでなく、一緒に食事する相手の好みのものを食べてみるというのも、楽しいものなんだな。」
　実はハンバーグよりスパゲッティ・ネーロ、イカスミパスタの方が食べたかった、好物だしあまり食べれる店も多くない。同じものを食べるからみんな大好きハンバーグにした。秘密だがな
「トレーナー、今日はありがとう。料理も美味しかったし、とても楽しかった。」
「こちらこそ、いいセンスだった。」
「ふふっ、そう言ってもらえると嬉しい。今日は本当にいい日だ。」
　オグリを車に乗せて合宿所に戻ろう。帰ったら今日のことを思い出して布団に入るのだろう。
「それじゃあ、次の店に行こうか。」
「……え？」
「普段は学園近くの店を巡るばかりだったが、今日はトレーナーが案内してくれると言っていたからな。」
「いくつか他にも目星をつけてきたんだ。」
「ランチの時間は過ぎてしまうかもしれないが腹具合からして、あと10件は回れるだろう。」
「今日は1日カフェ巡りになりそうだ、楽しみだな、トレーナー。」
　心なしか足早になるオグリキャップと共に、門限ギリギリまで、カフェ巡りを続けたのだった……。

　そしてビーチには姫路城が出来あがっていた。まさに砂上の楼閣である。
　夏祭りの時期も近づいている、他にも肝試しや生徒会のイベントもあるから手を貸そう。半分は過ぎたがもう少しだけ夏を満喫しよう。

芦毛と夏祭り

海辺の施設に泊まり込み実力向上を目指す夏合宿、折り返し地点を過ぎているがもう少し続く今日も早速オグリのトレーニングを始めようとしたところ――

「すまない、トレーナー。トレーニングを開始する前に、受け取ってほしい。」

オグリキャップがバッグの中からゴソゴソと一枚の紙を取り出す。

――どうやら手書きのアンケート用紙のようだ。

「私が体を温めている間にでも、答えておいてほしい。なに、すぐに済むはずだ。」

アンケートの内容は――

『甘いものは好きか』『辛いものは好きか』『食物アレルギーは？』と、食べ物に関するものばかりのようだ。

「ほとんど『はい』か『いいえ』で答えられるようになっているので、手間はとらせない……と、思う。」

「頼めるだろうか。」

「構わないが……」

「ありがとう。では、よろしく頼む。」

オグリキャップが準備運動で走っている間に、アンケート用紙に記入した……。

「助かった。夜までには確認して、役立てたいと思う。」

「役立てる？」

「うむ、トレーナーがしっかりと書いてくれたので問題ないはずだ。安心してくれ。」

「あとは、トレーニングに集中し、今日のメニューをしっかりとこなすだけだ。」

「中途半端な状態では、楽しみも半減する。できるだけ体を動かし、夜に備えよう。」

「夜に何かあるのか？」

「知らないのか？　今日は夜から――……むっ、

これはアレだな。」
「秘密にしておくほうが、それらしいのではないか？
どう思う、トレーナー？」
「よくわからんがやりたいようにすればいい」
「……ううむ、悩ましいな。とりあえず、トレーニングを終えてから考えるとしよう。」
オグリキャップは、ソワソワしている。問いかけるのをやめ、トレーニングを開始することにした
「はぁ、はぁ……ふーっ。」
「今日のメニューはこれで終わりか？もう少しいけそうな気もするが……。」
「このくらいがちょうどいい」
「そうか……うん、今日はここまでにしよう。」
「トレーナーが答えてくれたアンケートの確認もしなくてはならないし、身を整える時間も欲しい。」
思案するオグリ「下見はしてあるが……なにぶん、初めてのことだ。時間は十分にとっておいた方がいいだろう。」
「どこか行くのか？」
楽しそうなオグリ「ああ、連れていきたい場所がある。汗を流したら、合宿所の前で待っててくれ。」
「だったら食事を済ましてからの方がいいんじゃないか？」
マジトーンオグリ「……それはいけない。いけないんだ。トレーナー」
育ち盛りオグリ「私も、トレーニング後の空腹に耐えるのはツラい。すぐにでも食事をとりたいのが、正直な気持ちだ。」
苦悶の表情のオグリ「この時間、合宿所に戻れば夕飯の香りが廊下を漂っている。今日の献立は竜田揚げと煮物らしいから殊更香り立つだろう。」
覚悟完了オグリ「だが、乗り越えなくてはならないんだ。目的を果たすためには、多くの誘惑に打ち勝たなくては。」
宣誓オグリ「どうか、わかってほしい。」

「わ、わかった。」
　ニッコリオグリ「ありがとう。」
　食いしん坊オグリ「……まぁ竜田揚げと煮物は取っておいてもらえるか確認だけはしておこう。」
「ではトレーナー。後ほど、また。」
　オグリキャップは足早に立ち去った。―そして。
「ついたぞ、トレーナー。」
「どうだ、素晴らしい屋台の数だろう。」
「祭りか？」
「ああ。今日の夕飯は、どうしてもここでとりたかったんだ。」
「見ての通り、たくさんの屋台がある。トレーナーの好きなものもたくさんだぞ。」
「良かったら、今日はご馳走させて欲しい。日頃の礼と感謝を込めて。」
「もしかして、その為のアンケートか？」
「うむ……キミが私を知るほど、私はキミを知らなかったからな。何が喜んでもらえるのか、調べる必要があった。」
「とにかく、もてなしたかったんだ。私なりに……キミのために考えたフルコースで。」
　いつもは食べることとレースのことしか考えていないオグリキャップが、アンケートまで作って考えてくれたフルコース……。
　メインヒロインオグリ「それに……キミと食べる食事はとても美味しいんだ。だから折角なら、一緒に楽しめれば……と。」
「凄く嬉しいよ!!」
「……そうか。それなら、良かった。私も嬉しい。」
「では、さっそく案内しよう。まずは『超特大ジャンボシリーズ』からだ。」
「これはすごいぞ。あらゆるものがジャンボの名に恥じぬ大きさになっているんだ。」
「かき氷はバケツサイズだし、お好み焼きは座布団サイズ。たこ焼きは野球ボールサイズが……。」

「大きすぎないか!?」
「とはいえ、かき氷はもはや飲み物だし、お好み焼きは……見てみろ、ほぼキャベツだ。」
「いや……もはやこれは、前菜では？」
「前……菜……!?」
　さてここで心の中で落ち着くために少し説明しよう。
　かき氷がほぼ飲み物なのはそこまで大きいとある程度作り置きしないといけないからどうしても溶けてしまい水が混ざるから飲み物認定しているんだろう。いやそれはそれでおかしい。
　お好み焼きが殆どキャベツなのは利益を出すため、売るには屋台で売れる値段にする必要がある。だからキャベツの割合が多いのだろう。それに肉とか海老とかイカとかいろんな具材が入るとそれこそまともに食べれる人間はいないだろう。キャベツなのは店側の優しさかもしれない。ちなみにキャベツは消化によく温かいまま食べれるので胃に優しいかも知れない。ただしここまでデカければなんでも消化に悪いぜ。
　そして実はタコは結構安い、駄菓子などでタコが使われるのもそれが理由だ。なので屋台側もギリギリ赤字を免れているんだろう。しかしいくらなんでも一つの大きさが野球ボール並だと関西人でも食べるのにお米と食べる奴はいないだろう。関西の人間はうどんやお好み焼き、粉ものをおかずにご飯を食べるぞ。タマモクロスがこの前『アー！ウドンハオカズヤー』と大井生まれの江戸っ子イナリワンに言ってた、俺も粉ものとご飯を一緒に食べるが関西出身ではないぜ。
「ふふっ。トレーナーも興奮しているのだな。わかるぞ……私もワクワクしている。」
　違うぞ！冷静に考えながら絶望しているんだぞ！
　っと、心のなかで叫んでいると
「すまない、店主。かき氷を２つと、お好み焼きを４つ。」
「４つ!?」
「うむ、他の屋台も回る予定だから、まずは控え目にな。足りなかったら、また戻ってくればいい。」

「遠慮はいらない。好きなだけお代わりしてくれ。」
「いや、流石に食べきれ――」
「トレーナーはいつも、私に足りないものをフォローしてくれる。これはいまの私にできる精一杯の感謝の気持ちだ。」
「こういったことは初めてで、照れくさいが……
どうか、受け取ってほしい。」
大きすぎる感謝の気持ちに、しばらく動けなくなるほどお腹いっぱいになったのだった。

「おっ、オグリ食べるのは一旦やめて金魚すくいとか射的とかしないか、それにお好み焼きのあとにもんじゃ焼きは斬新すぎると思うんだ。」
「トレーナー、アンケートではご飯はいっぱい食べる方と書いていたぞ、それにこの前はおにぎりを食べていただろう。」
「いやーでもやっぱりお祭りといえば遊びも醍醐味だと思うんだよなぁー、それにほら俺はキミの代わりに遊びの屋台を調べてたからね、足りないところは補い合うのがトレーナーとウマ娘だからね。」
そう言っていると背後から肩を叩かれた。
振り向くとゴールドシップがいた。
「粉モンばっか食って喉かわいただろ！このゴルシちゃん特性のスペシャルドリンクで水分補給するといいぜ！」
「えっ!?ちょっ!?」
ゴールドシップが俺の口の中にドリンクを入れてきた。
そのまま抵抗できないので飲むしかない。
「なぜこの仕打ちを、あと色の割にまともな味だったが何を混ぜたんだ？」
「オメー、何アタシの店に来る前に食い物やめようとしてんだよ。お前の後輩もようやく焼きそば作り半人前になったから食わしてやろうとしてんのによ。」
「あとゴルシちゃんスペシャルドリンクの中身はにんにくにマムシに

クモにオメーが作ってた牛乳入りコーラにタキオンの薬を混ぜて作ったスペシャルドリンクだぜ。」
　マイスウィートエンジェルオグリ「トレーナー！大丈夫なのか？」
「ああ、大丈夫だオグリ、俺が大丈夫なのは地球が赤色で月が青色なくらい当たり前のことだ。そして俺はきみがルドルフとスケートをしていたのを知っている。」
「……トレーナー？」
「それに今回のお話は本来はオグリとジャンボシリーズを食べたところで終わる予定だったんだがあまりにも間を開けすぎて申し訳ないと思った作者がいつもより少し長めの話を書こうと思って伸びたお話だからな。」
「……トレーナーが壊れてしまった。」
「あと作者が夏合宿に入ってから展開が遅くなってしまって申し訳ないと思っているのも知っているし、同期の乃河くんのイケメン設定を生かしたネタや話をせずあんまり意味のない設定になっているのも申し訳ないと思っているのと、サメが陸にあがって走り回るとか意味不明な話ばかり書いて悪いと思っているのも知っている。」
「そして何よりウマ娘のキャラクターの出番が減ってきたのも申し訳なく感じてるようだ、天才バカボンの主役は一応バカボンだがバカボンのパパの方が出番が多いのと同じような感じだ。」
「トレーナーひとまず病院に行こう。」
「マイエンジェルオグリ、畏処苦導幻という言葉があってな、美味しいものを食べると元気になるという言葉だ。」
「安心してくれ私はすぐに元気になる。」
「オメー大丈夫か、でも面白くなったから別にいいな」
「ありがとう！ハジケリスト私はとても気分が良い。」
「おう！後でアタシの屋台に来いよな！」
「オグリ、それじゃあまずはヨーヨー釣りをするぞ。」
「トレーナー……元に戻ったのか？」
「オグリ私はいつでもこんな感じだよ、君のトレーナーだからね。」
「その……理由になってないと思うんだが……？」

「ハハハ！気にするな遊びに行くぞ！」
　そういうと私はオグリの手を掴んで屋台に向かった。
「ウー、トレナイヨー」
「私も紐が切れてしまいました……。すみません店員さん、もう一回お願いします！」
「フッ、無様だな」
「まさかヨーヨー釣りにそこまで苦戦するとはな」
「トレーナー、すごい自信だな。」
「私はヨーヨー釣りは保育所で孤独のハーレム状態の時から得意でね。」
「ワケワカンナイヨー！」
「ならば私達にお手本を見せてもらえませんか。」
「良かろう、ついでに勝負にするぞ、二人まとめてかかってくるがい い、言葉を覚える前にヨーヨー釣りをしていた私の技術見せてやろう！」
「ならボクたちが勝ったらこのあとの屋台奢ってもらうよ！」

結　果

トレーナー	ＴＭタッグ
３３個	４個

「まさか、お手本を見せてもらったあとにここまでの差が出るとは思いませんでしたわ。」
「ウートレーナーガココマデツヨイトハオモッテナカッタヨー！」
「トレーナーどうしてこんなに上手いんだ？」
「さっき言った通りだが、３歳の頃にはヨーヨー釣りをしていた。保育所の七夕での屋台そこで私はヨーヨー釣りの技術を研いた。」

「そしてマックイーンあの時の絶望を思い出しただろう。おっと無理に思い出す必要はない、世の中には忘れていた方がいいこともあるからなぁ。」
マックイーンが頭を抱えてうずくまった。テイオーが駆け寄るがマックイーンは大丈夫と言っている。
「トレーナー、さっきから何を言っているんだ？」
「気にするな。そんなことよりコツを教えるから一緒に遊ぼう。」

コツを説明するぜ☆
まずはこよりをねじります。この時店によっては怒られるので店主の目を盗むか諦めることだぜ☆
こよりは短く持って操りやすくしよう。そうすると暴発を防げるぜ☆
こよりは水につけないようにしよう。紙製だからすぐに弱ってしまうから気をつけよう☆
ゴムと水風船の接続部を狙おう、こうすると輪っかをむりやり作れて取りやすいぞ☆

このテクニックを使ってレッツエンジョイ☆

オグリとのイベントはカットだぜ☆
競走馬またはキャラクターのイメージを著しく損なう表現は行わないようご配慮くださいますようお願いいたします。
という、電波を受け取って全カットになったぜ。
ＴＯＬＯＶＥるレベルのイベントは起きてないから許してくれ☆
皆の妄想の中でイベントを完成させてくれよな。
トレーナーとの約束だぜ☆

「オグリ今度はゴールドシップの焼きそば屋台に行くぞ。」

「今日行く予定の屋台に焼きそばはなかったから丁度いいし一緒に行こう。」
テイオーとマックイーンもついてくるようだ、

「ゴルシ大将塩焼きそばを一つ頼む！」
「私はオムそばを頼みますわ。」
「ボクもオムそばお願い！」
「大将、海鮮焼きそばを２つ頼む。」

「よーしアタシの焼きそばをメ・シ・ア・ガ・レ♡」
「大将ボクも焼いているんですが。」
「鏡くんも少しハジケというのを理解できたようだな」
「えっ、全然困惑してるんですが。」
「本当にわからないと喋ることすらできないからな、目指せビュティポジションだな！」
「先輩大丈夫ですか。」
「だいじょうぶだ……おれは　しょうきに　もどった！」
「本当に大丈夫ですか？」
乃河くんならわかるんだが、鏡くんはわからないようだ。
「その様子だと悩みは少し解決したようだな、話はきかんが頑張れよ。」
「ゴルシちゃん焼きそば、気合を込めて作ってやったからちゃんと食えよ！」

「おう！美味しく食べるよ。」

そう言って屋台を離れた。マックイーンとテイオーはキタちゃんとダイヤちゃんと遊ぶようなので空気を読んで離れた。

その後もオグリと夏祭りを楽しんだ。

―――――――――――――――

少しだけ時間は流れて

「オグリ今日が夏合宿の最終日だ。悔いが残らないようしっかりトレーニングするぞ。」
「今日もよろしく頼む。」

―――――――――夕方―――――――――

「オグリトレーニングお疲れ様。」
「トレーナー今日で合宿が終わるんだな……」
「少しさみしい気持ちになるな……」
「オグリ君はこの夏合宿とても強くなれた。マイルチャンピオンシップも問題ないはずだ。それでも少しさみしいけどな。」
「オグリ実は合宿最終日にするイベントがあるんだが参加するか？」
「……どんなイベントなんだ？」
「肝試しだよ。少し前から生徒会と手伝いたいって子を集めて開いて訪れた生徒を怖がらせるイベントさ。」
「トレーナーはどっちで参加するんだ？」
「おれはおばけだ白塗りになって白装束で化けて出るやつだ。」
「トレーナー私もちょうど衣装もあるしタマも衣装があるから私も怖がらせる方で参加しよう。」

いきなり巻き込まれるタマモクロスだが大丈夫なんだろうか？

合宿所近くの森

集まったウマ娘やトレーナーも各々考える怖がらせる服装をしている。
「トレーナー君今年も参加してくれてありがとう。」
「生徒の思い出を作るのもトレーナーであり、教師の仕事でもあるからな。」

「ところでルドルフどうして乃河くんは七色に発行しているんだ。」
「すまない、ここに来たときには既に光っていたんだ。私にもわからない。」
ゲーミング同期「正しくは１６８０万色だそうです。」
「とりあえずそれで怖がる人間はいないから受付で明かりになってくれ。」
「あとオグリにタマそれは怖がらせる衣装じゃないだろ、ハロウィンの衣装だろ！」
オグリは恐らくドラキュラの仮装（マント）、タマはゴースト衣装（萌え袖）こんなもんみたら恐怖心が引っ込むわ！
「でもトレーナーおばけの服装だぞ。」
「急に参加が決まったからウチもこれしかないんや。」
「ルドルフ洋風肝試しでも癒やしポイントにされそうだぞこれは」
「トレーナー君それは大丈夫だ、二人には受付係をしてもらう。」
「なるほど。可愛いから人は呼べるな。」
「それとウララちゃんも白装束かい。」
「ワタシはこの懐中電灯で驚かすんだよ～」
「なるほどシンプルだが効果的だね」
「最後に回したがルドルフとても怖いＴシャツだな、殆どのウマ娘がいきなりみたらショックのあまり気絶すると思うからでないでくれ。」
さっきからずっと頭を抱えていたエアグルーヴとナリタブライアンが顔を上げた。
ルドルフのＴシャツは文字だけのやつで『皇帝を肯定する行程』と書かれている。見た生徒の会長の威厳は爆裂四散するだろう。
「……？トレーナー君普通のＴシャツだよ。」
「この空間で白の服に文字は怖すぎる『大嘘』それに指揮する人間が必要だからルドルフはあまり出ないほうがいい。そのほうがみんなの役に立つしな。」
「わかった、トレーナー君の指示に従おう。」
エアグルーヴとナリタブライアンと無言でハイタッチした、始めて

心が通じ合った気がする。
　そしてその他ウマ娘ちゃんを怖がらせるのは不本意ですがこれもウマ娘ちゃんたちのためといってアグネスデジタルや貞子の衣装で駆けつけたマルゼンスキーなどがいる。

　それぞれの配置につく前におれは顔の部分を白く塗らないといけない。青白くすることで恐怖感を演出するつもりだ。
　というわけでウララちゃんに塗ってもらったが白くなりすぎた。
　アレだ、コウメ太夫だな。暗闇でコウメ太夫がどれほど怖いかはわからないが行くしかない。
　全員で情報を共有できるようにブルートゥースイヤホンを装備している。
　さてタマモクロスとオグリの様子は
　ウマ娘Ａ「タマ先輩かわいい～～」
　ウマ娘Ｂ「タマ先輩一緒に写真取らせてください！」
　どうやら最初はよく知らない子のようだな、やはりタマモクロスは怖がらせ要員にはできないようだな。
「タマ大人気だな。」
「オグリ先輩もカッコよくてかわいい～～」
「オグリ先輩も一緒に写真撮りましょ～～」
「ウチラは観光スポットやないんやから早く森に行き～～」
　遠回しに促したな、恥ずかしさも相まって強気に出れないようだな。
「最初の二組がいった。」
　小声でオグリが言っている。
　そういえば乃河くんガン無視されてたな。あの光り方だとイヤでも目に入ると思うんだが、ヤバそうなものには関わらないトレセン学園の教育が行き届いているな。
「「バァー!!」」

「キャーー!!??」

ウララちゃんとアグネスデジタルの不意打ちが決まったな、もうこれだけで怖いだろう。

走り回ったところでナリタブライアンのこんにゃくだ。
くぐもった叫びが聞こえてくる。
なおも逃げ惑う生徒達。
井戸から這い出る貞子。
ちょっと違うが恐怖で逃げていく。
いきなり明かりをつけて動き回るおばけ提灯。
ここまで来ると何が起きても怖い。
そして薙刀を持って彷徨うグラスワンダー。
…ちょっと待てスプラッターホラーがいたぞ。
しかも見える位置にいたやばすぎる。
固定回線「ルドルフ、薙刀を持っているグラスワンダーが見えたがどう思う。」
「ああ、そのことか、実はエルコンドルパサーとグラスワンダーにも協力を依頼していたんだ。張り切っていたがそんなものを用意していたんだね。」
「別にヴァイオレンスな展開になる訳じゃないんだな」
「トレーナー君そろそろ君の出番の様だ、しっかりキメてくれ。」

「その、トレーナー今回の子は肝が強かったんだ。」
「俺以外にはダッシュで逃げてたけどな。」
「最後にコウメ太夫が出てきたけど何だったんだろう。と言っていたが……」
「忘れてくれ。」
「トレーナー今度はテイオーとマヤノトップガンだ」
作戦を変えよう。普通に出てきてもコウメ太夫だからあまり怖く

ないんだろう。
「ウワーー!?」
「マヤ　わかっちゃった」
だんだんテイオーが怖がらなくなってしまった。
私は全力で怖がらせないといけない。
ここで私の特技を説明しよう。私は後ろ向きで１００ｍを１５秒台で走れる、さらに首と肩の関節が柔らかい。これを使い。
目をギンギンにして全力で見上げるようにして後ろを向いて腕は逆手で超スピードで追いかける。
「ギャァー!?」
「アイコピー?」

「トレーナー、テイオーが涙目ですごいスピードで逃げていって、それにマヤノトップガンが笑顔でついていった。」
「つまり大成功だなオグリ!」
「トレーナーその調子で頼む。」
任せてくれ、と口に出さずとも伝わるだろう。

その後は順調に進むので見どころだけ見せよう。

一流のトレーナー「キング」
一流のウマ娘「私に抱きつく権利をあげるわ」
「感謝しなさい。」

赤ちゃん「ク、クリーク怖くないのか?」
ママ「はい、み～んな私の赤ちゃんだから怖くありません。」
ガラガラとおしゃぶりとよだれかけを持ったクリークが赤ちゃんを探している、ナリタタイシンと鏡君が犠牲になった。

W「お゛ば゛け゛こ゛わ゛い゛よ゛ー゛」
蹴られギャル「チケゾーさんアタシも怖いよー！」
突如現れた徘徊型エネミーゴールドシップ、果たしてその目的は!?
「ジョーダン！一日一回の蹴りに来たぜ！」

ロジカルウマ娘「おばけなんて全然ロジカルじゃねーし、そんなもん信じねーし。」ガクガクブルブル
不憫巨峰「救いはないのですかー」

一通り終わったあと

グラスワンダーは徘徊型で変なタイミングでエンカウントして怖がらせる役目でエルコンドルパサーはグラスワンダーを怒らせて逃げているようだな。
さっきめちゃくちゃ怖がせられたから近づいてきたらテイオーと同じように怖がらせよう。

その後私は薙刀を振り回すグラスワンダーから１０分以上逃げることになった。模造刀であると信じたい。

無人島と鍋

皆さんどうも木原正樹トレーナーの同期の乃河悠一です。
突然ですが僕達は無人島に来ています。新人の炎鶴祐也さん、炎鶴くんと木原さんと僕で無人島ツアーに参加しました。合宿が終わってすぐに炎鶴くんに誘われたのできましたが、僕が生でヘビを食べていたら船が出ていってしまいました。
日帰りの予定だったので食料などはありません、ヘビは食べれるところは僕が全て食べました。なので本当に食料はありません確保しなければいけません。それでは木原さんが状況確認をするので皆で話しましょう。
木原「もうわかっていると思うが乃河くんにエンちゃん我々は現在危機的状況に陥っている。」
「とりあえずゴールを確認しよう。このツアーは毎月5日に行われている。今日も5日なので一月生き延びることが出来たらゴールだ。」
乃河「私はタキオンのおかげで2週間は食事を取らなくても大丈夫です」
「君は本当に人間なのか?」
「ええ、代わりに16時間の睡眠が必要になる省エネモードにならなければいけませんが。」
炎鶴「先輩俺のせいでこんなことになってしまってすいません。」
「大の大人がこんなにいて誰も確認してないのが一番悪いからこれは仕方ない。」
炎鶴くんの考え
先輩たちこんな時でも冷静で凄いな、この人たちといれば一月大丈夫な気がしてくる。頑張って生き延びて素敵なウマ娘を見つけて素敵なトレーナーライフを送るぞー
「ところで乃河くん、尻が光っているのは何か理由があるのかい?」
ほの明るく緑色に発光している。
「省エネモードだと自動的に光るようになります。」

「薬無しでも光るのか（困惑）」
「それでは僕は一旦睡眠に入ります。夜の見張りなどは僕がしますので探索をお願いします。」
乃河くんの恐るべき頭脳を頼ろうと思ったが明日の朝の探索まで活躍はお預けだな。エンちゃんの方は体力はすごいあるから頼りになるし明るいうちに探索しよう。

森の中

ヤシの木などがあるような島ではないので食料を集めるのは大変だろう。
海に出るのもいいが火をつけるのに三十分ほどかかってそれなりの暗さになってしまった。焚き火が出来たから拠点はそこで頑張ろう。
遭難まで入れば間違いなく死ぬので海の探索は後回しだ。
炎鶴「先輩この島毒を持った動物とかいると思いますか？」
「流石に日本だからいないと思いたいが山には普通に毒ヘビが出るから、ここにいてもおかしくはないから気をつけよう。」
「乃河さんさっきヘビを生のまま食べてましたけど大丈夫なんですか？」
「よくわからんがほぼミュータントだから大丈夫だろう。」
適当に話をしながら探索を続けたが滝などもあり生物もそれなりにいるようだが今日は捕まえることができなかった。

焚き火の側

「とりあえず無人島で無言でいると気が狂うらしいから適当に話をしよう。」
乃河くんが全裸で尻を振っている。
「先輩もしかして乃河さんはもう手遅れなんですか。」
「わからん、もうさっきから導入とＧＭとＰＣが適当なクトゥルフ神話ＴＲＰＧを体験しているような気分だ。」
「その場合、ずっとファンブルが出てますね。」
全裸で尻を振っている男がそんなことを言う。

「多分君はＳａｎｉｔｙでファンブルが出たんだろう。神話生物でも見たのかい？」
「お尻でＳＯＳと書いているんです。目に止まった船が助けに来てくれるかもしれません。」
「俺が漁師で君をみたら怪物か既に手遅れだと思って見て見ぬ振りをするよ。むしろ見た人間のＳＡＮ値が削れるよ。」
「先輩やっぱり海の探索もしましょうよ。」
「海が荒れてきているし、暗闇で離れ離れになったらそれこそ危険だ、お腹が減っているなら今日は俺のカロ〇ーメイトを分けてあげるからそれで我慢してくれ」
「先輩……ありがとうございます!!」
「しかし、オグリが心配だなぁ、でもごはんは食べているだろうから問題ないか、ルドルフは捜査願とか出してくれているだろうか。」
「タキオンにはここに来る前に弁当を作っていますし、自分でご飯を作れる子なので大丈夫でしょう。」
「先輩たちは担当ウマ娘がいていいですねぇ～」
「いや、お前は危機感をもて、冷静に考えたら担当がいないトレーナーが無人島ツアーに参加するな。クビになるぞ。」
「それがいろんな子にアプローチはしたんですけどうまく行かないんですよ。才能のありそうな子はもう一流トレーナーがついて居ますし。」
「炎鶴くんこの経験がいい方向に働いてくれますよ。」
「そうですね、こうなってしまったらこれも経験だと思って頑張るしかないですね。」
「先輩最後に担当ができたら気をつけたらいいことってありますか？」
「ケガをさせないことだな、彼女たちはあくまで人間だそれに俺は何人も天才と呼ばれた奴がケガをして駄目になったのを見ている。」
「俺の兄貴は相撲がめちゃくちゃ強かったんだ、小学生の時、練習はあまり相撲のことを知らない人に教えてもらって全国大会に出て記録を残すくらいには才能の塊だった。」

「兄貴は遠くの名門校の人がわざわざ直接家に来てスカウトされたよ、中学の時にはＮ○Ｋで特集が組まれたよ。当時久しぶりの日本人横綱になると言われるほど期待されてたよ。」
「相撲の大会ではバナナが差し入れとして出されるんだが誰も食わない、でも兄貴は食って『バナ～ナパッワー!!』と言って試合で力を出してたよ。」

「そんな兄貴が高校の時事故で大怪我をしたんだ、首の粉砕骨折だ右半身不随になったよ。誰も怪我には勝てない、そうなって相撲はできなくなってしまった。」
「皆兄貴のことを忘れてしまったよ、ウマ娘たちも怪我をさせるわけにはいけないんだ、彼女たちは皆の夢を背負っている、人々の記憶に残って誰かの夢や憧れになるのを彼女たちは願っている。」
「まぁ、兄貴は三日後には左手でカップ麺を食って一月後には立ちあがって歩いて看護師の腰を抜かしたよ。最近は右手でパチンコ打ってるよ。」
「だから彼女たちの幸せと夢をかなえることを願うなら最善の幸せは怪我をさせず彼女たちが進みたい道を歩ませることだ。」
「だから先輩は担当がしたいことをさせるんですか。」
「長い話ですまなかったな、怪我の話になると暗くなるからあまり関係ない話もしたよ。」
「明日は本格的に動かないといけないから今日は早く寝よう。それとさっきの話は人に言うなよ、気にするな君の信じるやり方で担当と歩むといい。」

次の日の朝

地獄のような目覚めだった。風が吹き荒れ、焚き火を簡単にかき消す大雨、波により砂浜の近くにはいられなくなりました。
「なんで乃河くんはこの天気で眠っていられるんだ。」
「省エネモードだからじゃないですか？」
「やはりもう人間ではないのかもしれない。」
乃河くんを背負って移動しているがやはりそれなりに重い。まぁ

俺より身長が高いからそんなもんだろう、むしろ細身で助かった、エンちゃんはガッシリしているから後で運んでもらおう。
「そういえば先輩台風が近づいてた筈でしたからそれが原因だと思います。」
「それでも仕方ないから食えそうなものを探そう。」
探した結果毒があるかもわからないキノコしか見つからなかった。

夜になった。
「雨と風で結局あまり探索できなかったな、波もあるし今日は本当に最悪の日だったな。」
「キノコを見ましたが、私がわかる範囲でも毒キノコしかありませんでした。わからないものもありますが食べないほうがいいと思います。」
「結局今日は何もできませんでしたね。」
「そう悲観するな、正直いってかなりのピンチだが明日更に探索して食べ物を見つけるぞ。」
「それじゃあ、今日も話をするぞ、実はトレセン学園のトレーナーの若手の離職率が高いのは知っているか？」
「えっ!?トレセン学園って成功すれば給料もかなりいいって聞いてますけどそれなのに退職者が多いんですか。」
「そういえば私達の同期も結構いたんですが今では半分以下に減ってますね。」
「それくらい成功するのが大変なんですね～。」
「いや、それが違うんだ、担当ウマ娘がＧ１勝利していたり大成功と言われているトレーナーほど引退しているんだ。」
「えっ!?なんでですか？」
「退職後何をするかはあまり知らないが誰もが担当の卒業や退学で退職しているんだ。」
「テレビで引退したウマ娘の『結婚したウマ娘は本当に幸せなのか』っていう特集されてたんだよ。一般男性って言ってたけどどう見ても先輩とか同期の元トレーナーなんだよ。」

「だから女性の退職率はあまり高くないんだ。」
「そういえば今度来る理事長代理はミソジドクシンオーと呼ばれてましたね。」
「ひどいアダ名だな、まぁトレーナー同士で結婚するやつもいるしな、鏡くんは担当がママだし、同期の女の子と仲良くしてるしな。」
「えっ!?アイツそんなことになってるんですか。」
「それにしてもすごい驚くな、まぁ、ここまでは前フリなんだがな、」
「理事長に頼まれてトレセン学園の夜の見回りをしていた時に予定ノートを拾ったんだ。名前も書いてないし中身も何も書いてないんだ。」
「白紙のノートですか?」
「もしかして何か仕掛けがあったんですか?」
「あぁ、二重の仕掛けだ、仕掛けに気づいた俺はまずブラックライトで照らしたんだが、ドイツ語で書いてあった、全く読めないからグーグルで翻訳して読んでみると内容は幸せなカップルの予定みたいなのが書いてあったよ。」
「十年先のことまで書いてあったよ、そして数字が割り振られてあって、俺が見たやつは最初のものだった、7つはあるようだ、後半の方には子供の予定まで書いてあったよ。」
「幸せ家族計画ノートでもあったようだな、次の日の朝俺のトレーナー室がノックされたよ。エイシンフラッシュがノートの中身をみたか聞いてきたよ、当然、白紙のノートだろ、何か書いてあったのか?ってとぼけたよ。」
「担当ウマ娘がトレーナーをロックオンしている可能性もある訳だな。予定では同期が三年後にはまた一人確実に減るだろう。まぁ、俺とオグリにかぎってそれはないけどな。」
「私とタキオンもないですね。」
「ルドルフさんと付き合ってるって聞いたんですが、あと好きなタイプはウララさんやライスさんだと聞いてます。」
「ハハハ、誰がそんなことを言ってるんだ、俺がそんなわけないだろう、あと誰だ俺がロリコンだと噂を流している畜生は、その話だと俺

がルドルフで妥協した外道じゃないか。」
「お前あそこまで完璧な女の子はいないぞ、面白いし賢いししかも料理もうまいお嫁さんとしては最高やぞ、プレッシャーがすごいけどな。」
「やっぱり付き合ってるんですか？」
「お前それ以上トレセン学園で絶対言うなよ、付き合ってないし今はオグリの倒すべき壁だ。」
「あと俺たちトレーナーは退職金が貰えるんだが３年でも俺たちは５００万貰えるがもしかしてトレセン学園は結婚相談所になっているのかもしれない。」
……
……
「この話はこれ以上するとまずいと思うので今日はもう寝ましょう。」
「そうだな、それじゃあおやすみなさい。」
次の日の朝
今日も変わらず、まずは森の探索だ。乃河くんは今日は起きている、くだものがなっている植物を発見する。
「乃河くん、バナナだと思うが食べれると思うか？」
「先輩早く食べましょうよ。毒なんかないと思いますよ。」
「パッチテストをする時間はありませんし、毒耐性がある私が食べます。」
「毒耐性あるのか。」
「ええ、他にもマヒ耐性と石化耐性があります。」
そう言って乃河君がバナナを食べた、苦しみだした、
「タキオンそんなにそってもその高さのリンボーは無理ですよ。」
「正気に戻れ！」
乃河くんにビンタを食らわした。
「タキオンこれは私の愛です！」
「タキオン逃げたのですか、貴方がなぜここに自力で脱出を……」
腹パンを食らった、全力でぶち込んだ様だ、かなり苦しい、みぞおちではないのが幸いだろう。

すかさず俺も無言で腹パンを叩き込む。
「俺はタキオンではない」
流石にダウンする。
「流石乃河くんだ、錯乱していてもボケを入れてくるとは」
「今のは一体何だったんですか？」
「決闘者のギャグみたいなものだ、挨拶は『おい、デュエルしろよ』だ。」
「さっきはすいませんでした。」
乃河くんが既に起き上がっている。
「どんな状態になったんだ？」
「幻覚を見たあとテンションが上がりました、幻覚耐性はありませんでした、本当にすいませんでした。」
「気にするな乃河くんでテストした俺も悪いしな。ボディーはだいじょうぶか？」
「今は大丈夫です。」
「で、味は？」
「最高でした。」
「そうか。」
そう言って話したあと木原先輩と乃河先輩がバナナを食べた。

木原先輩が突如全裸にネクタイの服装になり『バナ～ナパッワー!!』と叫んだ。
乃河先輩は『タキオン、貴方のモルモットはここですよ』といって彷徨いだした。僕を見つけるとタキオン！と叫んで追いかけてきます。
木原先輩はただひたすらバナナを食べている。
バナナを見つめてしまい、しばらく格闘した、体力が持たない、最後の体力を使って先輩たちが近寄らない砂浜の方に逃げよう……
無人島に取り残されてから3日がたったが僕以外の二人が脱落してしまった、僕ももうすぐ脱落するだろう。

携帯の電波も相変わらず圏外のままだ。
（もう一歩も動けない……）
うまくいかないからって気分転換に無人島ツアーに参加するんじゃなかった。せめて、帰りの連絡船の時間くらい調べておけばよかった。
後悔先に立たず。来るかもしれなかった、ウマ娘との輝かしい日々を惜しみながら、ゆっくりと目を閉じる……。
「――？」
ふと、誰かの声が聞こえた。一体どこの誰なのか、よくわからないが――とても温かい、優しい声色だ。
「よくわかんないけど大変だったんだね～。もう大丈夫だよ～。はい。お水どーぞ☆」
体を起こされ、コップが口元へ運ばれる。全てを包み込む大きな体。与えられる安心感。直感的に感じる。彼女はきっと――
（女神だ……）
水を飲み干すと、今度は温かい味噌汁を差し出された。夢中になってすすするうち、朦朧としていた意識もはっきりし始め――
よく見ると、『女神』はヒシアケボノだった。
女神ヒシアケボノ「あっはは、いい飲みっぷりだね～。お味噌汁作ってきててよかったぁ～。」
「それにしても、びっくりしたな～。学園のトレーナーさんが海岸に倒れてるんだもんっ。」
「さっき連絡船に無線で連絡したから、もう大丈夫だよ～。一緒に学園まで帰ろうね☆」
ほのぼのと笑う彼女のことをつい最近見たことがあった。そう、デビュー前のウマ娘が中心となって出走する『種目別競技大会』だ。
「皆に報告があります。実はあたし、今朝――身長が１８０ｃｍを超えました～！」ババーン
（おお～……！）
「記念すべき日だもん、今日はがんばるよ～っ！」
実況「各ウマ娘、ゲート入りが完了しました。種目別競技大会芝１

２００ｍ――スタートです！」
中堅トレーナーＡ「ヒシアケボノ、どんどん成長していくなぁ、今やトレセン学園で一番大きいんじゃないか？」
中堅トレーナーＢ「そうかもしれないわね。体格の活かし方もうまいし……。狙っているトレーナーも多そうだわ。」
自称中堅トレーナーＫ「デカすぎてデカスギアケボノだな。」
「とああ～～っ！」
「一着はヒシアケボノ！大差をつけて悠々とゴールしました！」
豪快な伸び脚で、ド派手にゴールへ飛び込む姿は印象的だった。しかし、そんな彼女がなぜ無人島に……？
「昆布拾いに来てたんだ～。漁業組合のおじちゃんと仲良しでね、ちょっとなら持っていっていいよって言われてるの～。」
「ここの昆布はねぇ、ミネラルたっぷりのダシがいっぱいとれてとーってもボーノなんだよ～。」
「そうだ！お腹、すいてるもんね。せっかくだから、お料理作ろっか！」
「ここで作れるのか!?」
「うん☆　お外で使えるお料理道具持ってきてるからね♪　そういえば山菜もあったっけ？　そうだ、海鮮鍋にしよっか～。」
「お魚と昆布のダシたっぷりのほかほか海鮮鍋！……考えるだけでお腹がすいてきちゃった～！」
「てなわけで、まずは火を起こそ～☆」
ヒシアケボノは先輩たちより慣れた手つきで調理具を設置して火を起こし――
「あちち！　あはは、やっぱり火起こしはちょっと難しいな～。――あ、カニ発見！」
いつの間に獲ってきたのか、大きな魚をあっという間にさばいて――
「ふぅ～、いい匂い～！　シメにおうどん入れたくなっちゃうねっ！」
瞬く間に、美味しそうな海鮮鍋を作ってくれた。
「はい、どうぞ☆　きっととってもボーノだよ～。」

「美味しい！」
「あはは、良かった～♪」
　夢中でかき込み、飲み下す。ふと顔を上げると、幸せそうな顔でこちらを見ているヒシアケボノと目が合った。
「ボーノ？」質問
「ボーノ！」１００点の解答
「えへへ……おいしそうにご飯食べてもらうのやっぱり嬉しいね～！あたし、そういう人に担当してほしいって思ってるんだ～。」
「でもこれ、スカウトしてくれた人に言うと、『よくわかんない』って言われちゃうの。」
「だから、なかなか担当トレーナーさんが決まらなくて……。」
「……あっ！　そーだ！　あなたはどうかな～？　あたしのトレーナーさんになってくれない!?」
「え!?」
「トレーナーさんになってくれたら、そうだなぁ、毎日お味噌汁、作りに行くよ～！」ＲＴＡ新記録
　お味噌汁は断るとして――豪快な走り姿は印象的だったし、彼女の不思議な雰囲気にはどこか惹かれるものがある。
（今後の動向が気になる。）
　そんな思いがよぎり、首を縦に振った。
「わあ！　いいの！　やった～♪」
「えへへ、今日ここに来てよかったなぁ～。これからよろしくね、トレーナーさん！」
「そうだ、今日のお夕飯は記念にトレーナーさんの好きなご飯を作るよ～！　なにがいい？　なにがいい～？」
　はしゃぐ彼女についつい好物を告げてしまい……そんなこんなでヒシアケボノとの二人三脚の日々が、急に幕を開けたのだった。

「乃河くん、コンビができると思って遠くから見守ってたけど俺達のこと完璧に忘れて帰っていったな……。」
「木原さんの言うとおり確かにすごい勢いで人生のパートナーにもなってましたね。」
「それもそうだけど帰りどうする？」
「帰ったら思い出してくれると思いますのでもう少し二人で頑張りましょう。」
「そうだな。バナナのおかげでテンションあがって明るい気持ちになったしもうちょっと頑張ろう。」
　ということで海に魚を獲りに行って森を探索した。
　魚は３匹も取れた全部乃河くんが採ったけど
　森に探索すると滝があり、滝行をするカワイイウマ娘がいた。
　有名うまスタグラマー「……あっ！　お兄ちゃん探したんだよ！　こんなところにいたんだ！」
　乃河くんが猛ダッシュで逃げ出した。
　俺も追いかける。
「乃河くんどうして逃げるんだ？」
「初対面でお兄ちゃんと呼んでくる子がまともな訳ありませんよ。」
　タキオンの担当なのに!?そう思ったが口には出さなかった。
「っ！乃河くんそっちは海だぞ！」
「大丈夫です。３人でしたから言えませんでしたが僕は一人なら運んで三日間は泳げます。」
「なるほど三日も泳げば流石に陸地にもつく距離だしな。」
「地理はこちらにあるんですが追いかけてきてますので飛び込みましょう！」
「お兄ちゃん！　どうして逃げるの!?」
　乃河くんもどうしてあそこまで健気にしているのにガン無視して

るんだ？
「木原さん騙されてはいけません、飛び込みますよ！」
乃河くんがキレイなフォームで飛び込む。俺もそれに続く。
流石に海までは追いかけて来なかった。
そこから先はたいへんだったがダイジェストでお送りする。
「バカな！何だこの潮の流れは！」
「そういえば昨日まで台風でしたね。」
「もしかして最悪のタイミングで出てしまったんじゃないのか。」
「もう帰れる距離でもないですし進むしかありませんね。」
「乃河くん俺が力尽きかけたら頼むぞ。」

「木原さん、大変です。足が吊りました。」
「なんでそんな冷静に緊急事態の報告ができるんだ!?」
「ヤバすぎて冷静になったのかもしれません、このままだと死にます。」
「ちくしょう！　背負っていくよ！」

「木原さんの背中大きいですね♡」
「振り落とすぞ。」
「すいません、ふざけてラブコメで男の子におんぶして貰ったときにヒロインが言いそうなセリフを言ってしまいました。」

「木原さん大変です。巨大なサメがいました。」
「少しトラウマになってるから余り言うならガチで捨てるぞ。」
「いえ、違うんです、後ろの方にホントにいます。足の吊りも治ったのでおろして確認してください。」

後ろを確認する、８ｍほどのサメがいる
「…ガチやんけ、本家ジョ〇ズのサイズだな。」
「ジョブ〇ですか？」
「それは前俺がやった、とりあえず迂回とかして避けながら進もう。」
「いえ、こちらを追いかけて来てます、幸いあまり速くはないですが。」
「乃河くん時計が発動すると思う？」
「タキオンがこれで競技生活辞めるとは思わないので発動しないと思います。」
「乃河くん水中戦の心得はあるかい？　俺はなんとかする。」
「私は身体能力でいきます。」

「よし！追い払えたな。しかし例の薬はないのになぜ現れたんだ？」
「世界の法則かもしれません、どうやっても我々の前には２回巨大ザメが現れるというルールがあるのかもしれません。」
「わからんが、世界のせいにするな一回目はタキオンの薬のせいだからな。」

「乃河くん船が見えたぞ！でかい豪華客船だ！」
「助けてもらいましょう。手を降れば気づいてくれるはずです。」
「……近づくと波がかなりすごいんだがかなりまずくないか気づいてないし、」
「このままだと死んでしまいますね。」
「人の命をなんだと思ってるんだ。全力で横に避けよう。」

そんなことがあって理事長がポケットマネーで手配していた、船に発見され回収された。見捨てられてないようだ。

オグリにこの話をするとスタミナと根性が鍛えられた気がする。
さて理事長が海外出張に行って開催される、予定のアオハル杯が理事長代理によって阻止されようとしているのでそれを止める為に説得に行かないとな。
圧力の為にルドルフも連れて行こう。

皇帝と決闘（デュエル）と野球

ランニングデュエルそれはウマ娘の世界で進化した決闘（デュエル）。そこに命を賭ける伝説のウマ娘を人々は５Ｈ，Ｓと読んだ

「……呼びません」

「えっ……」

「呼びません!!」

「オヨヨ～～」

決闘（デュエル）ターフ

このレース場でいま大会の準決勝が始まろうとしている。

ライフポイントはおたがい８０００でスタートしてゼロにした方が勝利する。

「行くぞ！　ルドルフ、俺のターン！　手札よりフィールド魔法ウマぴょい伝説を発動する！」

「この効果により俺のウマ娘の攻守は５００ｕｐする、そして発動時の効果処理としてレベル４以下のウマ娘、俺はハルウララを手札に加える。」

「そしてミホノブルボンを通常召喚、この効果により手札にキングへイローを加える。キングの効果により手札のハルウララと特殊召喚する、ハルウララの特殊召喚効果により一枚ドローする、そして３人のウマ娘でオーバーレイ！現れよ６枠９番タイキシャトル、守備表示で召喚だ。」

ハルウララがウッララ～といいながらカードを持ってくる。

タイキシャトル　ランク４攻撃力２０００守備力２１００＋５００＝２６００

「オーバーレイユニットを１つ取り除き相手のライフに１５００ポイントのダメージを与える！　ただしこの効果は１ターンに一度までだ、俺は手札を２枚伏せてターンエンドだ。」

タイキシャトルがルドルフに銃を撃つ、ルドルフは動じない。

ルドルフ　Ｌｐ（ライフポイント）６５００

「トレーナー君、私はこのタイミングで手札のエアグルーヴの効果を発動する、私がダメージを受けたエンドフェイズに私のカードがフィールドに存在しない場合発動できる、エアグルーヴを特殊召喚しこのターン私が受けた最も大きいダメージを相手に与える。この場合１５００ポイントのダメージを受けてもらう。」
エアグルーヴ　レベル８攻撃力２５００守備力１０００
トレーナーＬＰ（ライフポイント）６５００
まずいな、それなりに良い手札のようだ。
「ドロー　手札の永続魔法トレーナー契約書を発動、デッキからウマ娘を手札に加える、ナリタブライアンを手札に加え、そのまま効果で特殊召喚する、このカードは私のフィールドにレベル８以上のウマ娘が存在する場合、特殊召喚出来る。」
ナリタブライアン　レベル９攻撃力２８００守備力１５００
「そして私の墓地にウマ娘が存在せず私のフィールドにレベル８以上のウマ娘が２体存在する、手札よりシンボリルドルフを特殊召喚する。」
シンボリルドルフ　レベル１０攻撃力３０００守備力３０００
「更に２枚の永続魔法トレーナー白書とトレーナーマニュアルを発動、この２枚の効果により私のウマ娘はフィールドを離れるとき代わりにデッキの下にいき、１ターンに一度破壊を無効にすることができる。」
ルドルフはどうやら最初からフルスロットルのようだな
「バトルフェイズに移行し、ナリタブライアンで攻撃する、ナリタブライアンの攻撃時私は５００ポイントのライフを払わなければいけない。」
ルドルフライフ６０００
「シャドウブレイク！」
タイキシャトルがオーノー！といって破壊される。
「ナリタブライアンの効果により破壊されたウマ娘の攻撃力分のダメージをトレーナー君に与える。」
トレーナー　ライフ４５００

「だがタイキシャトルが破壊されたとき素材に入っていたウマ娘を特殊召喚できる。俺はウララちゃんとブルボンを守備表示で特殊召喚する。デッキからスズカを手札に加え、一枚ドローする。」
「ナリタブライアンは相手フィールドのウマ娘全てに攻撃できる、ハルウララに攻撃する。」ルドルフＬＰ５５００
　ウララちゃんが驚いた表情を見せたあと破壊される。
「そしてトレーナー君に５００ポイントのダメージを与える。」
　ＬＰ４０００
「そしてそのままミホノブルボンに攻撃する。」ルドルフＬＰ５０００
　ミホノブルボンがそのまま破壊される。
「トレーナー君に１５００ポイントのダメージを与える。」
　ＬＰ２５００
「このときシンボリルドルフの効果が発動する、ウマ娘がバトルによって３体以上破壊されたとき攻撃力を３倍にし、守備２倍貫通効果を得る。そして攻撃できる場合このモンスターは攻撃しなければならない。」
　シンボリルドルフ　攻撃力９０００
「そしてエアグルーヴの攻撃力は相手とのライフポイントの差分上昇する、よって２５００ポイントアップする。」
　エアグルーヴ攻撃力５０００
「エアグルーヴの攻撃！
　ブレイズ・オブ・プライド！」
「リバースカードオープン！　トラップ発動！　レインボーライフ！
　俺は手札のライスシャワーを墓地に送り発動し、俺がこのターン受けるダメージを回復に置き換える。」
　ライフ７５００
「攻撃を利用するとは流石だね、私の攻撃は強制だから更に回復させてしまうようだ、だがエアグルーヴは相手とのライフの差だけ攻撃力が上がるので更にｕｐする。」
　ＬＰ１６５００

エアグルーヴ　攻撃力１４０００
「私はカードを一枚伏せてターンエンド。」
「俺のターン　ドロー　ルドルフこのまま決めさせてもらう。俺は手札より炊きたて復活（リターンオブシスター）を発動する！　コストとして手札のサクラバクシンオーを捨てて発動する。この効果により墓地のライスシャワーを精米の黒竜（ブルーライスブラックドラゴン）として降臨させる！」
巨大なライスシャワーがフィールドに現れる。
『おーにーいーさーまー』
「精米（ブルーライス）の特殊能力を発動する。相手フィールドの攻守が変動している全てのモンスターの変動している数値分だけ攻撃力を上げる。そして相手フィールドのウマ娘の攻撃力は元の数値に戻る。」
「スキル発動！　クールダウン！」
シンボリルドルフ攻撃力９０００→３０００
エアグルーヴ攻撃力１４０００→２５００
精米の黒竜（ブルーライスブラックドラゴン）　攻撃力１７５００
「更に俺のライフを１５０００ポイント払いスキルを発動する！　決意の直滑走！　払ったライフ分１５０００ポイントｕｐする！」
精米の黒竜（ブルーライスブラックドラゴン）　攻撃力３２５００
「そしてライスは直接攻撃ができる。バトルだ！　切り裂け！
ブルーローズチェイサー！」
「リバースカードオープン、トラップ発動。トレーナー解雇。この効果によりフィールドのトレーナー永続魔法を全て墓地に送り一枚につきライフを１０００回復できる。今回は３枚で３０００回復する。更に送った枚数分のカード３枚をドローする。」ライフ８０００
「それだけでは防げないぜ！」
「そして墓地に送られた３枚の効果を発動する。私がこのターン受けるダメージは回復に変換され、このターン私のウマ娘は効果・戦闘で破壊されない、そしてこのターンのエンドフェイズに攻撃を行ったウマ娘はすべて除外される。」ライフ４０５００
「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ。」

ライスが除外される
「ふふ、トレーナー君絶体絶命の状況だね、トレセン学園の未来を、チームファースト打倒を私達チーム皇帝を肯定する行程に託す気になったかい？」
なんて名前だ。
「悪いがトレセン学園は生徒の自主性を尊重する学校だが、これは内輪もめでもある、俺達教師やトレーナーが解決しないと行けないんだ。じゃないと生徒に示しがつかないからな。」
「君はこういう時頑固だからこうして決闘（デュエル）で決めることにしたんだ、これ以上の会話は無駄のようだね。」
「ドロー　そして魔法カード皇帝の烈風を発動する。この効果により相手のマジックトラップを全て破壊し私は３０００ポイント回復する。そのカードを破壊して安全にトドメを刺すとしよう。」
「実はこのカードたちは防御カードじゃない。だからこのタイミングで発動させてもらう。」
「リバースカードオープン！逃げ切りｆａｌｌｉｎ，Ｌｏｖｅ！そしてもう一枚のカード活路への希望を発動する！」
「効果の逆順処理によって活路への希望から発動する。ライフを１０００ポイント支払い『残り５００』俺とルドルフのライフ差２０００につきカードを一枚ドローできる。」
「俺とルドルフのライフ差は４００００よってカードを二十枚ドローする。」
「これで防ぎきるためのカードを手札に用意して凌ぐつもりのようだね、でも皇帝の烈風の効果により表側のカードだけを破壊した場合代わりに相手に３０００ポイントのダメージが入る。そして君のデッキにチェーン処理中にダメージをゼロにするカードはない。」
「そのとおりだ。だがもう一枚が逆転を呼び寄せる！」
「俺はもう一枚のカード逃げ切りｆａｌｌｉｎ，Ｌｏｖｅの効果により手札のマルゼンスキー、ミホノブルボン、サイレンススズカ、スマートファルコ、アイネスフウジンのカードから究極のウマ娘グループ逃げ切りシスターズを完成させる！」

「このカードがフィールドにいる場合俺はゲームに勝利する！当然俺が受けるダメージは発生せずこのまま相手を変えてデュエルを継続する。怒りの業火ファルコーストフレイム！」
「トレーナー君勝負は最後まで分からないことをまた君に教えられたようだ。」
「カイチョ～あとはボクに任せて！キタちゃんの出番がなくなるけど三人抜きしちゃうもんね！」
「頑張れテイオーさん！」
「フィールドと手札をそのまま引き継いでデュエルを再開します。」
「デュエル!!」
「トレーナー！悪いけどボクのフィールドにはカイチョーから引き継いだ三体のウマ娘がいるからこのままあっさり勝たせてもらうよ！」
「それができたら幸せだったのになあ！それでは本日二度目の必殺技怒りの業火ファルコーストフレイム！」
「エッ！ウワッー!?」
「このカードがフィールドにいる間俺は勝利し続ける。ここは既に火葬場だあ！全員仲良く平等にウェルダンにしてくれるわ！」
「ということでキタちゃん、食らってもらうぞ！ハイ！本日３度目の大技です！皆様ご唱和ください！怒りの業火ファルコーストフレイム！」
「キャッー！」
「ダイヤちゃんごめんね決勝で戦う約束してたのに……」

少し後

乃河「いやあチーム皇帝を肯定する行程は強敵でしたね。」
「ミストさんみたいなことを言うんじゃない。」
「トレーナー、凄い勝ち方だったぞ。このままチームファーストをやっつけて食堂のおかわり禁止政策を無くそう。」
「ここまで来てもやはり食欲か。」
タキオン「我々チーム５Ｈ，ｓもようやく決勝でファーストと戦う権利を手に入れられる。そしてなんとしても私の研究室を返してもらう。」

「メンバーの私利私欲が強すぎる。というかよくよく考えたらタキオンなんでお前が戦わないんだよ。俺ただの人間だからウマ娘が走っているなかバイクで走りながらデュエルしてるんだぞ。」
「我々ウマ娘が走りながらデュエルすることも十分おかしいのだが。」
オグリ「デュエルは走りながらするんだが。」
「それに僕は2回戦で壁に激突して入院したんですけど何事もなく大会は続きましたね。」
「その時は補欠メンバーのタマモクロスが活躍してなんとかなったから問題ない」
「事故が起きてもお構いなしなのがなかなか狂ってますね。」
「このトレセンアオハルランニングデュエルグランプリを俺たちが優勝すれば解決する話だ。今回はコンボが決まったからオレ一人で大丈夫だったがこれは何度も使える戦法ではないからな。対策もされるだろうし次に備えよう。」

「木…さ……てく……い…」
「木原さんおき……ださ……」
???????
「木原さんおきてください！」
「ウッ!?何だ俺は一体何を見ていたんだ。」
鏡くん「変な夢を見たのなら、恐らく枕代わりにしているその変なものが原因だと思います。」
腕を見てみると謎の銃と円盤がついていた。
「なんだコレは!?いや知ってるんだけどなんでデュエルディスクが俺の腕に付いてるんだ!?」
「手紙がありますけど説明する暇もないですから走り読みしながらついてきてください。」
「いきなり忙しいな、言葉の意味も違うがなにか余程の緊急事態だろ、ついていくよ。」
走って移動中
「鏡くんこれ誕生日プレゼントだわ、ゴールドシップがぶっ飛んだ文章でおめでとうしてくれたわ。」

「そうなんですか！誕生日おめでとうございます！」
「いや、俺の誕生日無人島で遭難している間に過ぎてるんだよ、ドラえもんと同じ日だからな。」
「あと寝ている間にデュエルディスクつけないでほしい、変な夢見るし驚くし、寝違えるし。」
「先輩、でも良くできてますよ。」
「これ市販品じゃなくて金属とかを加工して作ったやつだからそれなりに重いんだよ、外し方もわからないし」
「って先輩こんなことを話している場合じゃないです！」
「木原さん、鏡さんこんばんは。」
「あっ、お久しぶりです乃河さん。」
「乃河くんこんばんは。急いでいるから用があるなら走りながら伝えてくれ。」
「木原さん誕生日おめでとうございます。これは誕生日プレゼントのロングコートです。走ったままで大丈夫ですから来てもらいます。タキオンで人に上着を着せるのは慣れてます。」
「君も忙しいし急だな。拒否権もないし。」
　そう言って恐るべき早業で一秒にも満たない時間でロングコートを着せられた。
「なぜデュエルディスクを腕につけている人間に着せれるのかは聞かないけど、この見た目は…」
「木原トレ～ナ～！ここに居たんですか、急いでいるようですから私もついていきます！」
「お前もか、もうなんでもいいから用を言ってくれ。」
「木原トレーナー誕生日過ぎたじゃないですか、実はミークと一緒に用意したプレゼントがあるんです。鏡トレーナーやスーパークリークさんたちと一緒に水族館に行ったのをミークはとても楽しんでくれたようで、手配してくれたのは木原トレーナーですからとっておきのプレゼントを用意したんですよ！」

サンダウンターフ

ハーモニカの音♪
モブっぽいウマ娘「なにこの音楽は?!」
太陽と地平線が重なり黄昏が訪れようとしているこのときに太陽を背にセルフでＢＧＭを吹きながら腕に謎の円盤と銃をつけたロングコートの何もかも変な男が現れた。
ビターグラッセ「……」
リトルココン「……」
モブっぽいウマ娘「……」
オグリ「トレーナー?何をしているんだ?」
「今日のラッキーアクションはデュエルだ。夕日が沈むのを合図にサンダウンデュエルをするぞ。」
「そうなのか。トレーナー丁度併走が終わったところだから一緒に帰ってそれから、デュエル?をしよう。」
「あぁ、オグリそうすることにしよう。それじゃあ鏡くん、オグリが世話になったな。菊花賞で万全になったクリークを楽しみにしてるよ。」

「そのまま帰らしちゃったけどどうしよう。」
「意味不明すぎて何もできなかった。」
鏡「レース場の使用禁止なんかどうでも良くなったからなかったことにしませんか?」
ソルっぽいウマ娘「はい、私達がオグリ先輩に負けたことも事実です。それに馴れ合いだけのチームと思ってたけどそれだけじゃない怪物がいることをしれた。」
カイっぽいウマ娘「次は油断せずに倒させてもらいます。」
「ありがとう木原先輩出てくるだけですべてを解決してくれて。」
帰り道
「オグリ今日は何があったんだ?」
「午前授業を受けたあと、トレーナーが今日は疲れててチームキャ

ロッツと一緒にトレーニングをして。」
「うんうん。明日からは俺もいつもどおり一緒にトレーニングを見るからな。」
「ライスがココンのドリンクをこぼしてしまってチーム対抗でレースをすることになって私も出たんだ。」
「おー、やっぱり実践は大切だからな、偉いぞオグリ」
「私はそれで中距離と長距離で勝てたぞ。」
「元々マイルで走ってたのにそこまでのスタミナがついたんだな、凄いぞ。」
「その後私はキャロッツの正式なメンバーじゃないから対抗レースのルールではこっちが一回でも勝てば勝ちなんだが、」
「でも正式なメンバーじゃないから拗れたんだな。呼ばれた理由がようやく分かったよ。」
「それでクリークの調子はどうだったんだ？」
「今日は元気そうだったぞ。」
「それならいいんだ、あとオグリ土日は今週は野球をするからバットの素振りとかをトレーニングに入れるぞ。」
「なんで野球をするんだ？」
「二日後理事長代理に揺さぶりをかけてその後トレセン学園の方針を野球で決めるのを約束させる。」
「3年も宙ぶらりんのままにしとくのだめだからな決めるならすぐのほうがいい、このままだと卒業する生徒にも悪いからな。」
「トレーナー、それならレースの方が……」
「レースは長いスパンで結果を出すからすぐに決着はつけれない。そしてチームの絆と体力づくりにはうってつけのスポーツだ。それにこれは徹底管理と自由主義どっちが正しいかを決めてそれを学園に反映させるのがアオハル杯でもある。別に野球でもトレーナーの能力は発揮できるイヤとは言わせない。そのためにルドルフも説得している。」
「そういうものなのか？」
「そういうものさ。それにチームファーストは今すぐ決着をつけたい

はずさ。」
「わかった。トレーナーを信じよう。」

二日後

「理事長代理！二日前はおたくの子達を沢山可愛がってあげましたよ！」グヘヘ
「丁度良かったです。私も貴方達と話したいと思っていました。」
「トレーナー君とても元気なようだね。」
「あぁ、久しぶりにぐっすり眠れたよ、無人島に行く前から夏休み中はずっと働いてたから丁度いい休みだったよ。」
「まぁ、そんなことより二日前からおたくの子達になにか異変があったでしょう」
「!?　何故それを!?」
「図星のようですね、私の予想では帰ったあとにこっそり自主練を始めてたでしょう?」
「ええ、そのとおりです、これまで私の言うことをしっかり守ってくれていたのに対抗レースのあとに突然過度なトレーニングを始めるようになってしまって……」
「それは危機感を持っているんですよ。貴方の為に最強のチームになろうとしているのに代表格の二人がオグリに負けちゃいましたからね。」
「そんな危機感をなくすいい方法がありますよ。」
「一体どうすれば彼女たちの無茶を止めれるのですか……」
「今度こそしっかりと決着をつければいいんですよ。」
「野球で！」
「?なぜ野球なんですか?」
「レースで決着をつけるとまたオグリが何度も走らないと納得がいかないでしょうし、レース能力は長期的に成長するし判断も難しい、わかりやすい点数での勝負にすればいいんですよ。」
ドアが開いてパッション系記者が出てきた。

乙名史記者「野球などのスポーツも長期的な視点から最終的な成績を決めるので安定した試合にはならないと思われますがその部分はどう考えているんですか？」
「何故あなたが……理事長に話したときに記者にも伝えておくって言っていたがあなたなんですね。」
「はい！理事長さんからは最強のウマ娘とチームを決める戦いをするときいて居ても立っても居られなくなりました！」
最強のウマ娘を決める戦いを野球で決めるのか……
「ですが、レースといったい何の関係が？」
「彼女たちは魅せることをあまり知りません、ルドルフ、ウイニングライブもウマ娘の大切な部分だよな」
「そのとおりだトレーナー、ウイニングライブも心を込めなければ一流のウマ娘とは呼べない。」
「テレビで放送予定の冬の特番があります。そこで野球を放送するんです。エンタメ能力を鍛え上げレースも強くなりチーム活動について早いうちに学んでもらうそれが私の狙いです。」
「私自身がウイニングライブについてあまり教えることができていないことも知っていたのですね。その提案グラッセやココンたちと相談して考えさせてもらいます。」
話をしたあと理事長室を後にした。
「トレーナー君、本当に私に説明させないで良かったのかい？」
「ルドルフこれが成功すればトレセン学園の宣伝にもなる。だからこそルドルフに話してもらうべきだがトレーナー同士の会話にしたかったんだ。」
「その、徹底管理体制と今までどおりにするか早く決着をつける部分を話し忘れていると思うのだがそこはどうするんだい？」
なんで俺それを忘れるかな
「いや～、野球でトレセン学園の命運を決めるのはおかしいと思ってなパワ〇ケじゃないんだから、それに乙名史さんの前でトレセン学園の命運を決める戦いをするって言ったらどこまで話を大きくされるかわからないからな」

「確かにそのとおりだ、それとトレーナー君、野球をするメンバーは決まっているのかい？」
「オグリとクリークとライスとタイキとウララちゃんとフクキタルが出てくれるのは決まっている。」
「トレーナー君、その面々で野球で勝てるのかい？」
「トレセン学園の命運は握らないけど牽制として大事な勝負だよな、ライスは責任感で出てくれるけど自身がないようだしウララちゃんは元気だけど強いわけじゃないしフクキタルは変な感じだしクリークは本調子じゃないし普通に強いのはタイキぐらいだな。」
「トレーナー君普通に人数が足りないのはどうするつもりなんだい。」
「心当たりがあるからそれを当たれば９人は超えるさ。素人にいい強力な作戦も用意してある、」
「私も参加していいかい？」
「大歓迎だ頼むぞ。」

一週間後

９人以上普通に集まったがピッチャーを用意するのに骨が折れた。ブライアンがピッチャーをしてくれて助かったが。普通に速い球を投げれるし重い球とか付いてそうだしなんとかなりそうだ。変化球の飲み込みも早いし、何より１７０キロはやばい
「まぁ、生徒会の３人のお陰だけどな」
「今年はまだシーズン中だからどこも球場を貸してくれないが来年成功したら年末頃に収録させてもらえるらしいから面白くしないとな。」
「トレーナー何の話をしているんだ？」
「来年の話しさ、でも少し早いか、オグリもまだまだ今年走るしな。」
「あぁ、私はまだまだ走り足りないぞ、天皇賞秋や菊花賞、ジャパンカップも走るそして有馬記念にも出るぞ。」
　ん、なんで予定の倍走るつもりになっているんだ？
「まぁ、吉報は多いほうがいいからなオグリこの野球も大事な勝負だ勝ちに行くぞ。」

色々起きたのだが野球を9回まるまる説明するわけには行かないのでダイジェストでお送りしよう。
チームファーストが先攻で始まった。
その前に始球式をした。そしてそれは始球式と呼べるものではなく1打席だけの真剣勝負だった。

ピッチャーは俺木原正樹
バッターは樫本理子理事長代理
キャッチャーはシンボリルドルフ
どこに需要があるのかはわからない。だが余興だとしても全力で戦わなければならない。何度もいうが生徒に報いる為に。あとルドルフ何度も女房役って言わないで。

フルスイングした樫本代理が担架で運ばれていった。
生徒のお手本になるような素晴らしいフルスイングだった。ボールに当たればそれなりに飛んだだろう。一球見逃したあとに美しいフルスイングをして空振りしたあと3球目前を向いたまま立ち尽くしていたあと、桐生院が駆け付け担架を呼んだ。チームファーストの面々が睨みつけてくる。八方睨みかな、あとこんな残念な人だと思ってなかったよ、育成能力も高いのにメンタルと体力どちらも弱いって誰がわかるんだ。
その後は相手チーム監督不在のまましばらく続いた。
その状態で5回裏までどちらも点数は動くことはなかった。相手側のピッチャーリトルココンが覚醒した。様々な変化球を織り交ぜたピッチングに次々抑えられていく。
6回表樫本代理が駆けつけた。相手チームこれに勢いづき4番ビターグラッセがソロホームラン、6番リトルココンがタイムリーを飛ばす。2点を取られたがその裏で取り返すことはできなかった。
7回表ブライアンの体力に限界が近づいている、こちらの秘密兵器

の一人ビワハヤヒデを出す。元々は姉妹バッテリーの予定だったがハヤヒデがキャッチャーは頭が大きく見えるから嫌だと言うことでピッチャーの練習をしていた。ハヤヒデにはブライアンより多くの変化球を覚えてもらい松脂を使わせた。塁に出さずに次の攻撃に移る。

７回裏３番シンボリルドルフ出塁、そしてついにオグリがホームランを打った。２点を取り返し同点に入る。タイキシャトルも快音が出るがフライになる。その後塁には出るがリトルココンが意地を見せた。２点までで抑えられる。

８回表を難なく抑え、８回裏ビターグラッセがピッチャーにつきリトルココンがキャッチャーにつく技巧派のリトルココンとは違い恐ろしい１７５キロの豪速球で玉を飛ばせてくれない。リトルココンも技巧派で１５５キロ投げてたけどな。これがウマ娘の力だ。

そして９回を終え延長戦に突入する。しかしそれでも決着はつかず１２回でタイブレークに突入する。一塁と二塁が出塁したまま始まる。

この２つのチームはマウンドでなにかわかりあえたようだ。ただ全力でぶつかりたいそういったものを感じる。

タイブレークをなんとか無失点で抑えこちらの攻撃に入る。この空気だがこれは全力の勝負だ。容赦なく行かせてもらう。タイムに入る。

「ウララちゃん送りバントって知ってる？」

「バントってな～に～？」

「ウララちゃんが勝負を決めれる魔法のプレイだよ。」

「一度も当たってないからアタシそれする～！」

騙して悪いがウララちゃんのお陰で前進する。

そして最後の秘密兵器サクラバクシンオーを投入する。野球のプレイを教えても３工程以上あると忘れてしまうが足を生かさないともったいないので代走を専門にしてもらう。

そしてタイキに話す。「全力で振れ」「ＹＥＳ！」

そして見事なフライになる。とってもわかりやすくバクシンオーに合図を出す。すっ飛んでいく。送球は恐ろしく速いレーザービーム、送球が恐ろしく速いがバクシンオーも恐ろしく速いなんとか間に合う。

犠牲フライ成功だ。

試合終了2対3こちらのチームキャロッツの勝利だ。

「その、トレーナーあの作戦はいいのか？」

「これはいつの時代も必殺のプレーだぞ。」

「そうなのか。」

「トレーナー君その用意していた作戦って…」

「ウララちゃんが勝利に貢献できたと大喜びしてるんだからこれで良かったんだ。タイキがバーベキューするっていってるから手伝いに行くぞ。」

「あぁ…そうだね。」

ファーストの面々と来年の2月にもう一度レースをするのが決まったみたいだ。視聴率がよかったらもう一回野球もしてもらうけどな。

俺は睨まれた。でもオグリが成長できた。大成功だ、まずは秋の天皇賞それに勝利しないとな。

最後になるがブライアンがチームに参加してくれた理由はタイキが練習後などにバーベキューをしてくれていたからだ。今日は観戦に来ている生徒たちにも振る舞っているのですごいことになってるぞ。あとブライアンは野菜を押し付けようとするな。ちゃんと食え

芦毛と狂気のローテーション

野球からしばらく経って天皇賞秋の時期になったタマモクロスと戦うためにオグリは出走する。さらに恐ろしいことに菊花賞にも出る。そしてジャパンカップ有馬記念これらも出る。ファンは大盛り上がりする人と俺に殺意をぶつけてくる人にわかれている。記者からも狂気のローテーションと言われている……

俺も辞めさせたいよ。成功するビジョンが見えない。このローテションで一つも勝つことができなければオグリのファンは減るだろう。育成失敗と馬鹿にされるかもしれない。だがオグリが走ると言っている。俺はもうオグリをこのローテションに耐え勝てるように鍛えるしかない。予定は少し早いが今までは本人の才能と努力に任せる方針だったがトレーニングも本来は来年の４月から始めるものに変えるしかない。

今まではできる戦略を増やすのを重点的にしてきたがオグリの戦法を先行策に固定する。そしてトレーニングをショットガンタッチなどに強化する。今まで遊んでばかりいたのはトレーニングの強化のためだ、理事長への根回しや生徒会活動への協力。全てはオグリを強くさせるためだ。

こうしてオグリの本格的なパワーアップが始まった。

「トレーナー今日は何をするんだ？」

「水泳をしてビート版でクロールしてくれ」

一日中見守った。

次の日

「トレーナー今日は何をするんだ？」

「トレーナー！ボクも一緒にトレーニングする！」

「今日は背泳ぎをしてくれ。オグリはビート版だ。」

一日中見守ったあとセブンティーンアイスを奢った。

次の日

「トレーナー今日はどう泳ぐんだ？」

「トレーナー！今日もボクも一緒にトレーニングするよ！」

「ウチも一緒にやらせてもらうで！」
「今日はバタフライだ。オグリはビート版だ。」
一日中見守ったあと、今日はたこ焼きを奢った。
次の日
「トレーナー今日も泳ぐのか？」
「最近ボクたち水泳ばかりだけど何か理由があるの？」
「最近どころかずっと水泳だぞ。スタミナは本当にいるからな。」
「今日は私もお願いします。」
「ということで犬かきを頼む。」
その時、不思議なことが起こった。なんとオグリキャップがビート版を持たずに泳いでいる。
スッ「オグリさんビート版なしで泳げるようになったんですね。」
突如背後に現れ話しかけてくる鏡くん。
「いると思ったけど後ろからいきなり現れるんじゃない鏡くん。」
「それにクリークも泳げるようになっています。一体どうしたんですか。」
「後ろからの部分はガン無視か、オグリは長い間水泳していたからついに形になってビート版がいらない状態になったんだろう。クリークはオグリに対抗してビート版抜きで泳いでいるだけだ。」
「クリークは無茶をしているんですか、とめたほうがいいのかな。」
「いやバッチリ泳げている。もしかしたら気持ちの問題だったのかもな。それとも不調も原因だったのか、何にせよ今は大丈夫だ。」
「トレーナー！もっと見てくれ！ビート版抜きで泳ぐ私を！」
「すごいはしゃいでるな。バッチリみてるからもっともっと泳いでくれ。」
「トレーナーさん！私もオグリちゃんやタマちゃんと一緒に泳げるようになりました。私のこともよく見てくださいね。」
「クリークって赤ちゃんプレイ意外でもはしゃぐんだな。」
「僕の担当ウマ娘をなんだと思ってるんですか。」
「ブギーマン。」
「なんですかそれ。」

「子供をさらう怪人だ。」
「クリークがそんなことするわけないじゃないですか。」
「そうだな、攫ったりしないもんな。」
成人男性を甘やかそうとしたり、高い高いしたり身の回りのお世話をすべてしようとするけど子供はさらわないもんな。
「天皇賞と菊花賞どっちもオグリに取らせるつもりだから覚悟しておけよ。」
「そっちこそクリークの恐ろしさをわかると思いますよ。」
二週間後
天皇賞と菊花賞両方敗北した。
タマモクロスの強さを侮っていたのかもしれない。白い稲妻その強さで春の天皇賞を制したのはタマモクロスだということを、完璧な仕上がりで迎えられ相手の狙い通りのレース展開で抑えられ敗北した。
スーパークリークはあのときついに山場を超えたのだろう。今までは考えられない強さで完全に敗北した。
「トレーナー…私はいったいどうすればいいんだ。」
「オグリまだ勝負はこれからだ。ジャパンカップ勝ちに行くぞ。」

……伏兵にやられた。
「トレーナー…」
「全力の勝負だったんだろう、悔しいだろ、でも、それでも前に進むしかないんだ。」
「相手のウマ娘がタマモクロスと君に言ってたろ、『いい勝負だった』って。」
「トレーナーの夢が……」
……なぜ俺の夢を知っているんだ。
「たづなさんが言っていたんだ。トレーナーの夢は海外のウマ娘に負けない強いウマ娘を作ることだと。」
たづなさん……二年前に言った俺の言葉を覚えていたのか。
俺はルドルフを海外のレースに送り出し惨敗させた。海外遠征を

楽観視していたのが原因だ。
理事長の命令でチーム作りをしていたときだった、こう思ったんだ。
「ルドルフは強いやつだ、俺がいなくても大丈夫なはずだ、彼女の夢に俺は最後までついていけないだろうから今回は俺無しで行ってもらおう。」
ルドルフは俺に頼っていたんだ、それを無視して一人にしてしまった。そしてルドルフは海外で負けて繋靭帯炎を発症した。いろんなことが彼女を蝕んでいた。今度は二度とこんなことにならないように体を壊さないように支え続けると大切なときそばにいることを。
ルドルフは奇跡の復活を遂げた。その時俺は離れていた。それでも動き出した、雪辱を果たすためにこのまま日本ウマ娘界最高傑作が世界では相手にならないやつだと思われたまま終わりたくない。
日本のウマ娘は強い。それを証明したかった。
「オグリ俺の夢はもう叶ったよ、今回のオグリのレースのおかげでさ。」
「トレーナー、でも…」
「いつまでも負けたレースを悔やんでいるわけにはいかないんだ。」
「俺も君のおかげで前に進めるようになったんだけどな。」
それに俺の願いを完璧に果たしてくれるウマ娘が現れるかもしれない。それに今回のオグリの順位は3位タマモクロスは2位海外ウマ娘ファンたちにも日本勢の強さが伝わった筈だ。
オグリキャップは勝てなかったが彼女の強さは伝わったはずだ。
「オグリ、俺が言いたいことはわかるな。」
「もちろんだ、必ず有馬記念を勝利してみせる。」
「よし！帰ってトレーニングをするぞ！」
その前にご飯を食べに行くけどな。
前にも寄った定食屋だけどなオグリが気に入ってくれてるようで助かる。栄養バランスよく食べてるようだが量が多いので本当にバランスがいいのか不安になる。
「トレーナー！このすき焼きとても美味しいぞ！」

「オグリ、カツ丼とカルパッチョと茶碗蒸しと焼き鮭を平らげたあとに言われてもそうなのかとしか言えないぞ。」
「てかそのカルパッチョ、サーモンだしその後に焼き鮭食うのはなぜなんだ。」
「トレーナー…」
　オグリが神妙な面持ちで言った。
「このお店の魚料理はとても美味しいんだ、もちろんすき焼きとかの肉料理も美味しいぞ。ただ魚がとても新鮮で美味しいんだ。」
「なるほど、ところで肉や魚ばっかで大丈夫か？」
「……トンカツを頼もう。キャベツはおかわり自由だからたくさん食べよう。」
　お肉も増えるが考えるのはやめよう。お米もおかわり自由なので出禁にならないギリギリをついて帰った。
　帰りに桐生院トレーナーがひったくり犯を捕まえているのをみかけた。トレセン学園のトレーナーは全員体力高めなのかもしれない。

芦毛と雪と記憶

１２月が始まる頃
雪がシンシンと降り、木々にも降り積もり美しい情景が広がるトレセン学園、そして朝早くに練習場に積もった予想外の大雪を轟音の中除雪する理事長と我々。
グォーン！グォン！グォン！
……広いおかげで騒音などがあっても外には聞こえないのだ！
「理事長！そのマシンがあれば我々は不必要なのでは！」
「否定！このマシンは雪が積もっているとパワーが足りなくなる。」
「なるほど！だから我々もスコップで雪かきするんですね！」
理事長代理がふんふん言いながら雪を退かしている。あっ倒れた。ココンとグラッセが呼びかけながら運んでいる。
桐生院「先輩、すごい雪かきうまいですね。」
「イヤミか、君のほうが圧倒的に除雪できてるぞ。」
「トレーナー見てくれ、用務員のおじいさんがすごい量の雪を運んでいるぞ。」
「凄いな、俺達より体力ある、しかしオグリごめんな、練習場がこれでまともに朝練ができなくてすまない。」
「昼からの練習までに使えるようにするために私も精一杯手伝うから、任せてくれ！」
「私もあれだけの雪を運べばトレーニングになるかも知れない。私は用務員さんの手伝いをしてくる！」
「あぁ、この前腰をやってたからしっかり手伝ってくれ。」
二百キロ以上のバーベルを持ち上げるオグリにあれがトレーニングになるかはわからんがいいことなので送り出そう。
目が滑りっぱなしですまないがそういうことだ。
ちなみにこの雪はどうかなるのかというと運んだあと生徒たちが雪合戦をする。彼女たちも中学生と言うことだ。
クリスマス頃にもう一度大雪が降るとニュースで見たがその時はオグリはファン主催のクリスマスパーティに出るからその日以外に

降ればいいけどな。ホワイトクリスマスにも限度がある。俺は出席するつもりはない、たまにはファンと水入らずになってもらおう。
いつもは芝を管理してくれる人がいるが大雪で遅れるそうなので我々で除雪するしかないのだ。
「トレーナー君、除雪活動への協力感謝する。」
「気にするな、生徒たちの指導が俺たちの仕事だからなそのために準備しているだけだ。」
そうは言っても雪かきは大変だ、12月は有馬記念を始め大きなレースが多いからコースで練習をする生徒が増える。一刻も早く雪をどかさないと行けないのだ。さっきから雪かき大変と言い続けているがそれだけ大変と言うことだ。
生徒会の仕事を適度にサボるブライアンもレース場で走るために手伝ってくれている。というかトレセン学園の生徒会が激務すぎるんだ。日頃の仕事に雪かきまで手伝うってそらブライアンもサボるよ。

様々なことを適当に考えながら雪かきを続けた。
途中オグリが雪を運ぶのを手伝ってくれたり、桐生院が凄まじい動きで転けそうになっていた同期を助けたり色々あったがつつがなく終了した。
そうしたあと生徒たちを朝の授業まで見送ったあとそれぞれの仕事に戻る。俺は偵察で得た資料の閲覧と対策づくりそしてオグリにあったトレーニングの考案と色々する。練習中の栄養補給用のスポーツドリンクとかを作る。チームトレーナーだとサブトレーナーがこういったことをするところもあるので少しだけ楽ができるようになる。
なお乃河くんは鏡くんのチームキャロッツのサブトレーナーだがドリンクなどを用意するのを禁止されている。何故ならタキオンのトレーナーだからだ。
まぁタキオンは一応許可を取ってからのませにくるけどな
俺も理事長にチームトレーナーをしてほしいって頼まれてるけど

オグリへの指導が終わるまで待ってもらっている。その後はどうするかは考えていない。まぁ普通にチームを作ると思うが。
そういったことを考えながら仕事をしているとエアグルーヴがやってきた。
「授業中に来るとはどうしたんだエアグルーヴ？」
「今は休憩時間だ。貴様に頼みたい仕事がある。」
エアグルーヴは俺にクリスマスの日に一人暮らしのウマ娘にプレゼントを届けることをしてほしいそうだ。
「寮のウマ娘にも届けるのもしようか」と提案したが今年は鏡トレーナーと桐生院トレーナーが届けてくれるそうだ。
プレゼント選びも手伝うのでこの時期に話が回ってきたというわけだ。
あと5年前までは俺の師匠のトレーナーがプレゼントを配ってた。立派な髭を蓄えたお爺さんだから純粋な生徒はサンタを信じてくれた。
中学生になっても信じてるのは流石にピュアすぎる。
三年前に俺は乃河くんと寮のウマ娘にプレゼントを部屋に届けた。途中起きていたウマ娘に『サンタさんだぁー』と追いかけられたが二手に分かれて撒いた。
なおバレないようにしなければいけない、本来トレーナーはウマ娘寮に入ってはいけないからだ。
あと純粋な子供の夢を壊さないように決して正体がバレてはいけない。でも高校卒業までサンタを信じさせるのは不可能だと思う。
俺は今年は一人暮らしの生徒にプレゼントを届けるからそこいらへんはかんがえなくていいな。
マルゼンスキーやミスターシービーはそこいらへん大丈夫だろう。
ちなみに専属トレーナーはプレゼントではない。毎年こっそりやってるアンケートで欲しいプレゼントの欄に専属トレーナーをかく生徒もいるが人手不足なのとそうそういいパートナーが見つかるはずもないので無理だ。理事長が昔いろんな生徒に対応できるように生徒に合わせたトレーナーを作りたいと言っていた気がするがト

レーナーを作るというのはよくわからないし首を突っ込むと怖いことになりそうなので忘れることにしよう。
　ということでアンケートの結果を見てみよう……
　マルゼンスキーはなんとかなるがシービーのほうがわからない、まさかアンケートに答えていないとは基本的にほとんどのウマ娘がアンケートに答えるがここに来てタブーを破るとは……いや違うなジンクスを破壊したんだ。
『ジンクスは破壊してこそです！』セェーガー
　最近聞いていないＳＥＧ○の音と謎の声を聞いた気がするが気のせいだろう。
　……！これだ！
　電話を取り出し同期の名前を選ぶ。
「之河くん少し懐かしいものを探して買ってきてほしいがいいかな」
「えぇ、エアグルーヴさんにサンタさんの手伝いをしてほしいと頼まれていたのでもちろん手伝いますよ。」
「いややっぱり新しい方にしてくれちっちゃくなったやつのほうがソフトを色々揃えなくていいからな。」
「わかりました、時代が求めた例の１６ビットのものですね。」
「察しがいいね、流石は同期一の天才だ。」
「ハハハ、もう同期半分もいないんですけどね。」
「あと新型が開発中だがそっちは興味が出たら来年のプレゼントに書いてくれるだろうし、好きなものを調べるのに丁度いいからな。」
「来年のことも考えているんですね。それでは僕はタキオンの弁当を作るので失礼します。」
　サンタの仕事も入ってしまったがそれよりオグリの有馬記念が重要だ。
　……この時期になると考えることが増えるな。
　今日もオグリのトレーニングを見よう。
　練習用レース場
「トレーナー今日はなんの練習をするんだ？」
「今日はヤエノムテキを連れてきた。併走をするぞ」

雪かきを手伝ってくれたときに併走を頼んでおいた。来年以降ぶつかる相手かもしれないのでちょうどいい相手だ。
「よろしくお願いします」
ヤエノムテキが左手を差し出した。
オグリが両手で握り返した。
ヤエノムテキは困惑している。
「私も今日はよろしく頼むぞ」
そう言ってオグリはヤエノムテキから外側に立った。
……オグリ天然なところあるんだな。
菊花賞以来の顔合わせで左手を差し出し（利き手と逆の握手はマイナスの意味があると言われている）まさかの宣戦布告とはなかなかやると思ったがオグリの天然が勝った。併走で外側に立つのは速い方のウマ娘が基本だ。
土壇場で皐月賞に現れたオグリに敗北しダービーはチヨノオー共々オグリに再び敗北し菊花賞で共にクリークに敗北したが強敵であるのは変わりない。皐月賞の時の鬼気迫る走りはとても恐ろしかった。オグリが居なければ彼女が勝っていただろう。チヨノオーもそうだ。
三時間後
「走っていれば体は暖かいが止まるととても寒いな。」
「……今からでも勝負服のへその部分暖かくしようぜ」
「今日の併走はここまでですか？」
「今日はありがとうな。雪も降ってきたし今回はここまでだ、一時間後には止むらしい。」
「ということで飯でも奢ろう。いい練習相手になってくれた礼だ。」
「トレーナー私も一緒に行っていいか」
「もちろんだ」
「あまり人から施しを受けるばかりではいけないのですが…」
???「見つけたよ。貴方カレンのお兄ちゃんと一緒にいた人でしょ。」
突如背後に恐ろしい気配を感じオグリの方に逃げてしまった。
「アッ、貴方はカレンチャン！」

なぜ喜んでいるんだ。
「トレーナー彼女は何者だ？」
「……わからん、俺の知り合いにこんなかわいい妹がいるやつなんて居ないはずだ。」
……いや待てよ、俺の後輩に母親が再婚して美少女の妹ができたとはしゃいでいたアホがいたなその妹か？
「君はまさか円堂の妹……」
「なにその名前、あんまりカワイクない気がする。」
「私のファンの人もいるみたいですし、これからあそこのカフェでゆったりしながら少し『おはなし』しませんか」
話しくらいなら聞いてあげたほうがいいんじゃないか…
一時間後
「カワイイカレンチャン!!」
「トレーナー一体どうしたんだ」
「カレンってば少し加減を間違えちゃったみたいこんなんじゃ全然可愛くないからもっと修行しなくちゃ」
ウォーカレンチャンカワイイ！
「カレンチャン貴方のお兄ちゃんはチームキャロッツのサブトレーナーをしています。」
「私がそのチームの所まで案内いたしましょう！」
「トレーナー感情の変化がすごすぎないか」
「フフ、ありがとう早くお兄ちゃんの所に案内してね」
チームキャロッツの練習場
「モルモットくん今日は寒すぎるから今から屋内トレーニングにしよう。」
「タキオンでは気分転換に将棋をしましょう。あなたは賢いですが鍛えておいて損はないでしょうしね。」
「見つけたよ！お兄ちゃん！」
「貴方は無人島に現れた謎のウマ娘！」
「モルモットくんカワイイ妹がいたんだねぇ。私に紹介してほしかったよ。」

「謎のウマ娘じゃないよ！お兄ちゃん昔カレンと約束したことを忘れたの!?」
「……ハ!?」突如思い出される記憶
「貴方のことを思い出しました。私はとんでもないことを言っていたんですね。そして貴方は夢に進んで私の前にもう一度現れました。どうか今は私のチームに入ってください。」
「喜んで入るよ！」

fin

「……改めて冷静になると何が起こってるか何もわからないなニュー○イプの会話か」
「トレーナーは正気を失うのは早いけど戻るのも早いな」
オグリのファン感謝イベントが近いがこんな調子でいいんだろうか。